

国道第151号線改良工事に伴う埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

早稲田遺跡 その2

阿南町西条早稲田 宮下地籍

1983. 3

長野県飯田建設事務所
長野県下伊那郡阿南町教育委員会



国道151号線改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

早稲田遺跡 その2

阿南町西条早稲田 宮下地籍

1983. 3

長野県飯田建設事務所
長野県下伊那郡阿南町教育委員会



片口鉢と花瓶



墓穴1 陶器群出土状況



花瓶出土状況



山茶碗



天目茶碗



青磁 椀



瀬戸系茶椀



常滑系陶器



小皿 小壺



瀬戸系茶椀とオロシ皿



播 鉢



発掘地の景観



深見の池

序 文

阿南町大下条は、各所に数多くの有力な埋蔵文化財包蔵地があることは古くから知られていましたが、近年の発掘調査や表面分布調査によりまして、多くの新発見遺跡周知遺跡規模の明確化が進んでおります。

昭和53年ごろから始まりました国道151号線改良工事に伴う早稲田神社前の試掘確認調査は、出土遺物が多いだけではなく、早稲田神社に関連する中世・平安時代を主体とする重要遺跡と判明いたしました。そのため、県教育委員会と県の飯田建設事務所へ保護協議をお願いしまして、本格的発掘調査を決めていただきました。

早稲田遺跡は、平安時代の昔からこの地に鎮座されます国史現在社の式外社早稲田神社の在所でもあり、神社関連遺構のほか、縄文時代晩期遺構の重複も予想されますので、長期にわたる発掘調査の遂行に苦慮していました。幸い若手の酒井調査主任のほか、今村団長、松村・松沢・鋤柄調査員等有為の方々を得、予期以上の成果を上げることができました。

調査の成果は、報告文にありますように、早稲田神社にまつわりそうな堂址や竪穴址の発見のほかに、中世工房址や火葬墓群の検出、平安時代の住居址や発見例の稀有な縄文時代晩期の竪穴址さえ発見されまして、国史現在社や、周辺の中世諸城跡に深く関連する遺跡究明、下伊那南部地域における縄文時代晩期文化の移入経路究明のために果す役割は大きいと自負しています。やがて実施されます「久保畑」地籍の発掘調査や、より綿密な周辺分布調査を重ねまして、早稲田遺跡の持つ史的性格を明確にしていきたいと考えています。

調査報告書刊行に当りまして、この調査の実施に深いご理解とご指導をいただきました飯田建設事務所、県教委文化課、困難の多かった発掘調査を遂行して下さった今村団長はじめ調査団各位、調査進行に何かと温かいご協力を賜った旧地権者や周辺地権者の方々に対しまして、深甚の謝意を表します。

昭和57年3月

長野県下伊那郡阿南町教育委員会教育長 佐々木忠次

目 次

口 絵
序 文 阿南町教育委員会教育長 佐々木 忠 次
例 言

I 調査の経過	1
1 早稲田遺跡(宮下地籍)の発掘調査	1
2 調査団組織	3
II 大下条の環境	4
1 大下条の遺跡分布	4
(1) 和知野地籍の遺跡	5
(2) 古墳を中心とした遺跡	6
(3) 早稲田・深見地籍の遺跡群	6
(4) 戦国の武将、関・下条氏にまつわる遺跡	7
(5) 中谷・御供の遺跡群	8
(6) 川田地籍の遺跡	8
2 阿南町大下条地区の歴史的背景	12
1. はじめに	12
2 関氏と下条氏の興亡	13
(1) 関氏の進出	13
(2) 下条氏の進出	14
(3) 関・下条両氏の抗争と関氏の滅亡	15
(4) 大下条の郷主と関氏の城跡	17
3 早稲田神社と早稲田地籍の古字・古社寺・及び中世遺物出土地について	23
(1) 早稲田神社について	23
① 鱧 口	25
② 木彫薬師如来立像	25
③ 古 銭	25
(2) 早稲田地籍の古字、城跡・古社寺と中世遺物出土地	26
① 古字に見える早稲田地籍の様子	26
② 早稲田地籍の中世遺物出土地	29
4 大山田神社旧鎮座地(伝承)と寛文期の深見の池の様子	31
(1) 大山田神社旧鎮座地山田について	31
(2) 寛文期の深見の池の様子	34
III 調査の結果	38
1. 早稲田遺跡の位置とその概要	38
1) 早稲田神社周辺	38
2) 南東扇状台地	39
3) 台地先端の遺跡	39
2. 調査区の設定	39
3. 遺構と遺物	43
(1) 縄文時代晩期の竪穴	43
(2) 平安時代の住居址	44
(3) 中世の竪穴	45
(4) 中世の掘立柱建物址	47
(5) 中世の石垣遺構	48
(6) 中世の柱穴群	50

(7) 中世の石列	51
(8) 中世の火葬墓	52
(9) 中世の工房址	53
IV 調査のまとめ	61
1. 早稲田遺跡(宮下地籍)発掘調査の意義	61
2. 早稲田遺跡の特長	63
〔表目次〕	
表 1 大下条遺跡一覧	9
表 2 大下条古墳一覧	10
表 3 大下条城跡一覧	10
〔挿図目次〕	
第1図 大下条遺跡分布図	11
第2図 早稲田遺跡周辺地形図	37
第3図 調査区(A地区)グリッド設定図	40
第4図 A地区遺構全体図(1)上面	41
第5図 A地区遺構全体図(2)下面	41
第6図 縄文時代晩期竪穴	43
第7図 平安時代住居址(第1号住居址)、中世掘立柱建物址1	44
第8図 B地区中世竪穴1, 2	46
第9図 中世掘立柱建物址2	47
第10図 中世石垣遺構	49
第11図 中世柱穴群	50
第12図 中世工房址	53
第13図 中世石列1, 2, 3	54
第14図 中世火葬墓1~8	55
第15図 A地区中世陶器片・古銭出土地点分布図	57
第16図 A地区掘立柱建物址・石垣遺構写真測量原図	59
付 図 早稲田地籍古字図	27
〔図版目次〕	
図版 1 早稲田遺跡全景(航空写真)	65
図版 2 発掘調査前の宮下地籍	66
図版 3 竪穴と住居址	67
図版 4 B地区中世竪穴	68
図版 5 B地区中世竪穴1	69
図版 6 中世掘立柱建物址1	70
図版 7 中世掘立柱建物址2	71
図版 8 中世掘立柱建物址2	72
図版 9 中世石垣遺構と掘立柱建物址2	73
図版 10 中世石垣遺構	74
図版 11 中世柱穴群と中世工房址3)	75
図版 12 中世工房址	76
図版 13 中世石列	77
図版 14 中世火葬墓	78
図版 15 中世竪穴1の遺物	79
図版 16 写真測量風景	80
図版 17 調査団と発掘風景	81

例 言

1. 本書は、昭和56年度に飯田建設事務所と阿南町教育委員会との委託契約に基づいた、国道151号線大下条早稲田地籍改良工事に伴う早稲田遺跡宮下地籍の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の性格により古字調査にも力を入れ、早稲田地籍とその周辺に残る文化財、歴史的背景を推測する伝承地等を紹介するのに力を入れた。写真は、新葉社北林・唐木氏に委託し、解説は松沢が担当した。
3. 本書の資料作成にあたり、現場での計測・記録図は、酒井・鋤柄が当り、地形図、石群を中心とした全体図の作成は長野写真測図KKに業務委託した。写真は新葉社へ一部業務委託したほかは、酒井・今村が担当した。遺物整理・拓本撮りは、酒井麻里子の協力を得て酒井が、遺物計測・整図は酒井が地区内の遺跡一覧作成は松村が担当した。
4. 報文執筆は、大下条の遺跡は松村、早稲田地籍の古字、周辺の歴史的環境については松沢、調査結果については酒井が、調査経過と調査のまとめは今村が担当し、全体編集は酒井・今村が担当した。
5. 出土遺物・測量原図等関係資料は一括して阿南町教育委員会事務局が保管している。

I 調査の経過

1. 早稲田遺跡(宮下地籍)の発掘調査

国道151号線改良工事が大下条地籍へ進んで来たので、阿南町史編纂のための分布調査も兼ねて、昭和54年5月、早稲田神社前を訪れた。境内地のほか、前側の傾斜地から中世陶器片を多く表採した。縄文晩期土器片も含まれるし、早稲田神社関連遺構も予想されることから、試掘調査の結果を見て、本格的な保護協議することに、県教委文化課と飯田建設事務所で話し合われた。

試掘調査は同年8月から11月にかけて実施した。用地未買収のため地権者の協力を得て、乗株間のグリット抗法を主とした調査であった。上段境内地をB地区、下段地域をA地区とし、穿たれたグリットは40c程に及び、そのうち30cほどのグリットから縄文時代晩期土器片や、平安時代、中世遺物が出土した。B地区は中世堅穴が見つかり、片口2cが出土した。下段において中世遺物を包含する礫群がひろがり、縄文時代晩期、平安時代、中世の遺物が集中、重複し、相当濃厚な複合遺跡であることがわかり、昭和55年2月に報告書を刊行している。

昭和56年に入って用地買収も進んだので、県教委文化課と飯田建設事務所との現地協議が行われた。礫群が広範囲であること、遺構の重複があることから、写真測量を条件とした発掘調査の契約が、昭和56年5月に結ばれた。阿南町教育委員会は、別記のような調査団を結成し、6月28日に調査を開始した。先ず試掘調査で確認された礫群の調査と、耕土の深いA地区北側の、重機による表土排除を実施した。礫群は用地幅の80%、長さ10m以上に及ぶことがわかった。規則性はないが、所によって石の大きさが違い、包含された遺物は大部分が中世、焼土があったり、鉄滓も含まれる。所々に、大きめの石による、列状又は方形配石があること、東側と北側にL字状に構築された石垣遺構があることから、下層に中世遺構の存在が予想された。A地区北側では、表土の礫まじり砂層下に、黒褐色土の遺物包含層があり、配石を伴う火葬墓群があり、焼土や灰混りの土層が広く、焼土、焼石混りの石列や配石等も多い。縄文晩期の遺物も多い等、複雑な遺構の重複が予想されるので、上層の写真測量に踏み切った。

上層遺構の全体測量は、8月に長野写真測図研究所に委託し、写真測量を採用した。この方法は長野県下では、中央自動車道用地内、諏訪郡原村阿久遺跡を嚆矢とし、本遺跡を二度目とする画期的なものである。先ず測量範囲内に測量基準マークを10数か所設定し、ここではクレーン車によって大型立体カメラを10数mの高さに釣り上げ、連続写真を撮影する。その写真を図化機にかけて整図されたものが、3図の遺構全体図(上面)である。その後9月に入って、A地区礫群下層の遺構を撮影、図化されたものが、4図全体遺構図(下面)である。

8月夏休みを待って、B地区の堅穴の検出作業に入った。約40cmほどの表土を排除したが、西側を除いてプランは、礫まじりの砂質土中の浅いピットと、わずかに残る陶器片を手がかりに検

出作業を進めた。北隅に一括出土した片口、杯、碗、小形の花瓶と鉄製「罍」は、プラン設定の基盤になったばかりでなく、この堅穴の性格規定資料になった。東隅にはやや小振りの2号堅穴が検出された。両堅穴共、生活焼土が存在しないことも、この遺構の性格づけに暗示を与えている。

A地区上面の写真測量の終わったあと、南側の礫群下層面、北側一帯の諸遺構の検出作業を並行している。礫群を順次取り除くと、石垣遺構によって基壇状に構築された所は、石も大きく、平伏石も所々にあるが、規則性はなく判断に苦勞した。方形配石状の所や、石の配列の予想される所には、焼土を含む露地があり、中世陶器片や古銭の出土が続き、土壌に4個の大形平伏石が並び、遺物の出土も多かったので、重機によって西側上段畑の表土を排除した。その結果は、上段の傾斜面は急角度に削り取った形跡があり、斜面には大形礫が積み重なるように堆積している。礫間は黒色土が介入していることから後世の所産かと思われる。それを取り除いてみると、4図全体図下面のように、配列がやや不規則ではあるが、大形掘立柱建物址が検出され、その前には地山に残る石列があり、前面の石垣遺構によって基壇状に構築されている。確証はないが、堂址と推量した所である。8月下旬には、A地区南側の写真測量が行われ、石垣遺構の側面の写真測量も行われ、石垣遺構の側面の写真測量も終わった。第4図の遺構全体図がそれである。

A地区中央部は、北部と共に礫群下層面検出と同時に調査を進めている。中央部では、石垣遺構がL字状に曲るあたりから礫群は急激に落ちこみ、北へ行くにつれて礫まじりは減少していることがわかったが、下層には礫も多く、縄文時代晩期土器片の集中がありそうで、中層は中世陶器片の出土も続くので、何回も何回も少しずつ掘り下げることを繰り返された。掘立柱建物址が検出されたり、積石状遺構の上や周辺に焼土や多くの鉄滓を伴出するものがあり、工房址の一つと判断した。掘立柱建物址に附随すると思われるピット中から、柄の実の炭化物と共に小形の花瓶が出土し、1号堅穴の陶器等一括出土と似かよった出土状態で、宮下地籍の中世遺構の一つの暗示が与えられそうである。中世遺構の部分を残して下層へ掘り下げると、礫群に近いあたりは黒色土まじりの礫層の中から縄文時代晩期の土器片、石器が多く出土する範囲があった。堅穴、焼土の発見がないので、土器集中区と報告されている所である。そこから北側は砂礫まじりの土層を掘り下げると先の掘立柱建物址によって切られる住居址があり、検出の結果、中世遺構に相当破壊された平安時代のもので、この地籍唯一の平安時代の遺構となっている。

A地区北側は、第1次写真測量のあとから掘り下げを続けているが、雨のあとは泥土、乾けば固い土層で調査のし難い状態が続いた。しかも、数多い柱穴群、焼土群、石列、配石列があってその関連づけに苦勞している。しかも近世に穿たれたピットさえあって、その判別が難しかった。元来、中世の遺構検出は難しいものであるが、堅穴、墓地以外の遺構は尚更である。この検出作業中数このふいご羽口が発見され、ふいごと似たものもあり、柱穴群や、焼石混りの対の石列との結びつきを試みたが果たし得ず、厩治工房址としたが、先に検出した火葬墓群のほか、何種類かの遺構が重複した所と考えられる。台地の北端に近い所にも焼土まじりの固い層の下に浅い方形の堅穴の一部が検出された。相当量の縄文時代晩期の土器片があり、検出例の少ない縄

文時代晩期の竪穴遺構を検出することができた。

9月の中頃に現地の検出作業を終り、詳細、断面測量等をつけ、9月25日に現地の作業を終了している。その後、長野写真測図に委託していた航空写真の撮影、地形図の作成等が行われた。2図の地形図がそれである。それとは別に、今村、松村は、大下条地籍の遺跡分布をより正確にするための地域調査を進め、新遺跡も二つほど発見している。松沢は、新葉社や小林好治氏の協力を得て、城跡、社寺、歴史・伝承地やそこに残る文化財の写真撮影を進め、大下条の歴史ものがたりの報文作成を進めた。酒井は、酒井達男・菅沼有味・酒井麻里子の協力を得て、遺物整理図面整理を進め報告作成の作業を進めた。ところが、今村は転任等学校事情の変動があったり、酒井は、他教委からの発掘調査の委託が多く、整理作業の遅れが目立つようになった。とくに、中世遺構は多くの場合包含層が浅く、自然後世の攪乱を受け易いこと、遺構が種々重複する例が多いこと、中世遺構の発掘調査例が少なく、比較資料の少ない事等も遅れを来す理由の一つでもある。現在のように、発掘調査の要請が多いのに、担当者の少ない状況の中で、慣例的な単年度契約の場合は、どうしても整理作業が遅れがちであることから、発掘調査と遺物整理作業や報告書作成作業の契約を別にする必要を感じている。

2 調査団組織

(1) 調査団

団長	今村 善 興	売木小学校教頭 (日本考古学協会員)		
調査主任	酒井 幸 則	豊丘村林里 (日本考古学協会員)		
調査員	松村 全 二	阿南第一中学校教諭		
"	松沢 英 男	追手町小学校教諭		
"	鶴柄 俊 夫	同志舎大学学生		
調査補助員	森田 健一	桜井 広人	酒井麻里子	菅沼 有味

(2) 阿南町教育委員会事務局

佐々木 忠 次	(教育委員会教育長)
佐々木 吉 輝	(" 係長)
松 下 厚	(公民館主事)

(3) 協力作業員 (順序不同)

小林 好治	勝野 竜夫	佐々木忠夫	伊藤 博照	松下 智直
伊藤 真澄	中村勇太郎	酒井 達男	松下 好治	伊藤 長治
伊藤 安明	沢田いと子	玉置 郁子	村松 晴一	森岡 静夫
熊谷 近子	滝脇 欣寿	沢田 照彦	松下 好宏	中島 清人
村松 昇	伊藤 徳逸	小林 正人	三浦 克彦	奈川 邦彦
木下 辰夫	村山 康教	伊藤 孝弘	小林 博幸	田口 寿彦
熊谷 弘紀	熊谷 雅治	伊藤 安明	佐々木 正	林 和
金田 稔				

Ⅱ 大下条の環境

1. 大下条の遺跡分布

阿南町は、旧富草村・大下条村・和合村・旦開村の4か村が昭和32～34年に合併してできた町である。大下条村は、江戸時代は前項のように14か村に分かれていた。

大下条は、北は富草、西は下条山脈の南端をはさんで和合、南は和知野川を境にして、天龍村長島・神原、東は天竜川の狭い谷をはさんで泰阜村に接している。西は下条山脈の西峰八尺山、(1218)の支脈が屏風の如くそそり立ち、そこから流れ出る河川は、富草地区を流れ下る大沢・門原川、南は天竜村境を流れる和知野川が大きく、その間に早稲田・深見を流れ下る千木沢があって、その支流も数多く、夫々が深い浸食谷を作っている。国道151号線が南北走する辺りには大きな断層線があり、そこから西高東低の尾根状台地がいくつも東走し、やがて天竜川へ急に落ちこむ地形を示している。この傾向は富草地区に著しく、大下条では川田・神子谷・御供地区のような川岸に広めの台地を持つ所もある。台地といっても、川田・御供あたりを除いては、山あり、谷あり、小河川ありで、起伏に富んだ複雑な所である。東西に走る道路もそうであるが、南北を連ねる道路はつづら折の上り下りの多い道路ばかりで、地形が大きく通行の妨げになっている。これは、富草・大下条を中心にした第三紀中新世の地層が広く分布しており、この地層は比較的軟かい岩石からできているため、崩れ易く河川に浸食され易いからである。

この第三紀層は「富草群層」と呼ばれる地層で、化石の多く含まれる地層で知られている。層序表によれば、大下条地籍の場合、和知野層(最下層)、御供・中谷地区の温田層、早稲田・深見地区の大下条層、田上・平久両面に見られる栗野層等によって構成されている。この地域は各所に第三紀層の露頭が見られ、凝灰岩塊が地表面に露出する小台地も多い。地形的に見れば、遺跡立地が良さそうな所であっても、凝灰岩の露出する所では、古い時代の遺物は殆んど発見することができなかった。

現在の生活舞台の中心は、標高400m～600m位の所で、いずれもが第三紀層の岩石の風化によって生じた土壌であって、肥沃であり、水田耕作には適していると言われる。各所に東走する台地上や、南面する傾斜地は、肥沃かつ気候温暖もあって人々の生活は多い。この地方は、温帯樹と暖帯樹(カシ・ツバキ)が自生していて、植物分布上でも注目すべき温・暖帯植物の混生する地域として知られている。(暖帯樹の北限ともいわれている)

このように起伏の多い地形の複雑な所ではあるが、土質や気候に恵まれた地域でもあり、又、先進文化のすぐれた東海地方に近い地域でもあるため、古代文化の栄えた所と考えられるが、国道151号線の改修も遅れ、主要地方道路の改良も不十分で、近代産業の発展し難い開発のおくれた後進的な地域の一つであるように、複雑な地形と相俟って地域調査も遅れがちである。考古

学の調査は一部の地域を除いては、飯田盆地周辺に比べると余り進んでいなかった。古くから地区内各地籍から土器・石器が見つかり、散布地も多い割に発見された遺物が散逸したり、紛失等もかなりあって、実態がなかなか把握できない地域である。わけても、学術調査例も余りなされていないため、考古学の面では未開の地域と言えよう。昭和54年頃から実施された町史資料の地区内分布調査の結果、予期以上に土器・石器の出土数の多いことがわかりつつある。とくに大下条地区には特長の多い遺跡が見つかる。時代的に見ると、出土の量は多くないが、縄文時代早・前期の遺物もあり、縄文時代の中期の遺跡も多い。表1の遺跡一覧でわかるように、縄文時代後・晩期の遺跡の多いことがわかりつつある。とくに後述の、和知野遺跡や早稲田遺跡の東海地方の影響の強い櫻王・水神平系の条痕文土器、早稲田遺跡の宮下・日カゲ地籍の堀之内式土器や、晩期の条痕文土器の発見はその例である。弥生時代前・中期の土器は和知野の他は発見されていないが、天竜村の例から推してその発見には期待がかけられる。弥生後期のものは各所にある。古墳時代の土器は、古墳から出土したものが大部分であるが、土器片は各所から出ている。大下条は富草と共に、阿南地方では古墳の多い所で、富草と同様七墓と多い。構築法に三河系手法が用いられている所に特長がある。奈良・平安時代の遺物出土地も調査の度に増加している。中世中葉から後葉の遺物出土地は多い。一覧表でもわかるように21遺跡中9遺跡に及び、早稲田遺跡に至っては、全地域から各種陶器片の出土が見られる。この事は、早世田神社がこの地に存在したこと、大山田神社が古くはこの地にあったと伝えられること、三河地方からの古族の移住とこの地への拠点化、それに伴う集落・城跡の存在等々、今後の調査に期待される分野の多い地域の一つとして注目される。

当大下条地域の遺跡群を、遺物の分布状況や、遺構、地形等からいくつかまとめてみると、次のような特徴として概括することができる。

(1) 和知野地籍の遺跡

和知野地籍は、大下条の最南端にある。下条山脈が和知野川（上流は和合川・赤木川・浪合川等）によって東北に切られて終る部分の南面傾斜地にあつて、和知野川によって深く浸食を受けた第三紀層の低い河岸段丘の崖縁台地上にある。大下条から新野へ向かう国道151号線の見名地籍から見ると、ずっと低い谷底に見える位置にあつて、標高320mほどの所にある。和知野川を境にして天竜村に接し、洞底状の南面台地にあるため、当地方では平岡と共に最も暖かく、冬雪は降っても、積雪を見ることは殆んどない所である。

この遺跡は大正頃から知られていて、大下条の主要遺跡の一つである。大下条には数少ない縄文時代早前期のほか全期と、弥生・古墳時代のものも多いとされていた。とくに昭和31年頃、大下条小学校和知野分校の拡張工事中発見された縄文時代中期末葉の住居址を第1号址とし、昭和53年には、旧分校跡地を和知野区老人クラブの方々を整備作業中、1号住居址の近くから、2・3号住居址が発見されて、地域の人々の脚光を浴びている。其の後の分布調査、耕作等で発見、

保管されている遺物調査の結果、平安時代灰釉陶器片や、中世青磁片をはじめ、各器種陶器片の出土の多いことがわかってきた。とくに、縄文時代中期の相当規模の集落存在は前記の通りであるが、縄文時代後晩期の遺物が多く、とくに東海系の条痕文土器片の発見の多いことがわかった。このことは、下伊那地方南部県境地域に分布する条痕文土器出土地と関連するものであり、新野地区や、天竜村満島南遺跡からの土器とも類似しており、南部の縄文時代晩期の拠点遺跡の一つとして注目されよう。水神平系・貝田町系土器もあり、中島式土器の発見もあって弥生文化の変遷を知るにも重要資料の提示できる遺跡であろう。古墳時代・平安時代の遺物もあること、更に中世中・後葉の遺物発見の多いことも見逃せない。遺跡内に塚谷古墳があったこと、対岸山中には関氏最後の居城「権現城」があり、城の眼下にあるこの台地は何らかに使われたであろう。落城にまつわる伝承の地も多く、中世遺物出土地は更に増えるものと考えられよう。平久や早稲田にかかる上方傾斜面には日影林遺跡もあり、縄文後期の遺跡であることから、この他にも小遺跡の発見も予想されそうである。

(2) 古墳を中心とした遺跡

表1の遺跡一覧表のように大下条地籍には7基の古墳があったが、和知野に1、西条・小野平久に4基、北条の川田・大平に2基である。和知野の1基を除くと立地が共通し、一つの群をなしている。下伊那でも竜西阿知川以南は古墳が少なく、全部で30基余、下条の17基を除くと富草大下条に14基である。和知野の塚谷古墳を除くと小野・平久のグループ、富草の上栗田を含めた北条のグループに分かれる。いくつかの共通点をあげると、第一は立地が低山地の中腹、ほぼ標高500mほどの位置に点在すること、第二は、それらの古墳前方には、三ヶ月状低湿地又は湧水利用の水田地帯に面していて、古代水田の面影を残している。第三は、その近くから僅かな古墳期の遺物発見はあるものの、集落と思われる遺跡は見つかっていない。第四は石室の残されているものは富草の上栗田古墳を含めても4基であるが、この地方特有の粗粒砂岩で、風化されやすい岩石を用いた横穴石室である。第五は、全部ではないが、横穴石室内部構造は羽子板状、天井部はアーチ形、中には二室に分かれているような形跡が見られ、構築技法が多分に三河系古墳に類似している等である。或いはこの他に古墳の存在も予想されるが、今の所はっきりしない。古墳築造の人々の集落、水田耕作等の生産地を物語る遺物出土地等の発見もなく、今後に残された課題の大きい遺跡群である。

(3) 早稲田・深見地籍の遺跡群

前述した第三紀層の風化土による肥沃、耐水性の土壌と、深見の池等の豊富な湧水によって、起伏・傾斜の多い地形でありながら、古くから有数な米作地帯で知られている。又松沢の報文にあるように、古代・中世文化史上特色のある地域である。即ち、早稲田には国史現在社の式外社

和世田神社（現早稲田神社）があり、摂社・末社、神宮寺等があったと思われる。深見山田地籍には、延喜式所載の「大山田神社」（現下条村鎮西）の最初の鎮座地と伝承される所がありながら考古学的には余り調査が進んでおらず、早稲田遺跡は、現在の興亜電工工場敷地あたりから、東方斜面に位置する日カゲ地籍を呼んでいたと思われる。早稲田神社前宮下地籍の発掘調査の結果は予想外に大成果をあげ、関連して実施した分布調査によると、遺跡一覧、とくに早稲田地籍別表にあるように、早稲田地籍全域にわたって遺物分布のあることがわかった。時期別濃淡についてははっきりしないが、和知野遺跡に次ぐ有力遺跡であることが実証された。縄文時代早・前期のものはごく僅かである。同中期のものも大量発見はないが、興亜電工敷地（ハネ、日カゲ）から久保畑あたりかと考えられる。縄文時代では晩期のものが主で、日カゲ地籍で拾える土器片や石器の量が多く、宮下地籍でもこの時期の生活面が確認されている。弥生時代では前期の水神平系土器が発見され、後期のものもある。古墳期のものも見られる。平安期になると量を増し、出土の範囲も広い。中世陶器に至っては早稲田地籍全域に亙り、量も種類も多く、早稲田神社や関氏諸城に関連する城館址、集落の存在を如実に物語り、下伊那郡下における中世期の重要遺跡の一つとして注目されている。

深見地籍では、深見池周辺の台地上で、弥生・平安・中世の遺物が発見され、小野地籍の旧吉沢家跡（青ナシ）、田中・山田地籍では、古墳須恵器、平安灰輪や土師須恵器片のほか、各種の中世陶器片の発見が続き、古伝承を実証する重要な発見となっている。元々傾斜の強いこの辺りの地形であるので、僅かなテラス状小台地からも今後の発見が期待されることと思う。

（4）戦国の武将、関・下条氏にまつわる遺跡

古墳期から平安末・中世文化の発展に伴い、この大下条地籍は、阿南地方の古代・中世文化の中心地であったことは明瞭である。伊勢を本拠とする戦国の武将関氏が新野へ拠をかまえ勢力が増すにつれ、この温暖で肥沃な大下条地区に目を向けないはずはなく、だんだんと早稲田・深見地区へと勢力を拡張してきている。この関氏より少し前に、富草地区の古城に拠を構え、早稲田深見地方へも勢力を伸ばして来ている下条氏との間に抗争が始まるのは当然の事で、永正の頃以後、関氏・下条両氏の激しい当地域の争奪戦が展開された。この抗争の拠点となった城跡・見張り台（のろし台）・砦等が、早稲田や深見を見おろす周囲の高台の各所に作られたであろう。これらの場所が数か所現存するのも大きな特徴の一つといえる。これらの城跡等は山林内にあるため遺物包含の調査が進んでいないが、今後、遺物の発見も期待されるであろう。城跡があれば、城主や家臣団の居館址もあるはずで、小野青ナシ遺跡周辺のように、旧家老館址から中世陶器片多量出土の例があるように、新事例が増加すると思われる。

（この項については、松沢の報文参照。）

(5) 中谷・御供の遺跡群

深見の池の北上方に立つ半僧山の東側に不規則な段丘状地形を作りながら天竜川に落ち込むあたりに御供の台地がある。川の浸食によって二分された形になっている。阿南高校のある羽根平遺跡は、この地区唯一の先土器時代のポイントが出土し、古墳時代の土師・須恵器が出土している。県道早稲田・温田線を間して、急崖の上の阿南高校第二グラウンド造成地はイナバ遺跡で、ハマイバの名前もある。尾根状地形の先端部にあたり、眺望もよく砦としての立地は優れている。先端部の発掘調査の結果、城郭を徴証する遺構は確認できなかったが、丘腹には何条かの帯曲輪状の地形があり、台地の尖端をとり巻く石積があったこと、僅かながら中世末の陶器片の出土もあって、この周辺も詳しく調べてみたい所である。

川の北に広がる御供集落地は、宅地造成の進んだ所で、空地や、僅かな畑地での表面分布では遺物は発見されていない。御供・神子谷の地字名は、早稲田神社の祭祀にまつわる地域名と伝承されることもあって注目したい所でもある。

南宮峽上流で東へ大きく湾曲し始めるあたりの河岸段丘上の小台地が神子の谷である。水田も多く遺物は探しにくかったが、一部の畑で、古墳・平安期の土師器、須恵器片が発見されたことは収穫であった。

(6) 川田地籍の遺跡

川田地籍は天竜川に面する下平から何段かの段丘地形が形成され、地形的には段丘面も広く立地条件は整っているが、下平を除いては水利の便はよくないためか、遺物の分布はまばらである。縄文時代中期の散布地とされているが、今回の調査結果も同様であった。下平の段丘崖では数点の石器が採集されている。天竜川に面する最下段においては、遺物の採集はできなかったが、平岡ダムの影響により、往古よりは相当の水位の上昇が考えられるので、秦草村温田遺跡のように水没又は、泥かぶりの遺跡があらうかと思われる。(松村)

表1. 大下条遺跡一覽

地区番号	町内番号	登録番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代					弥生時代			古墳時代		平安時代		中世	近世	備考
						草創	早期	中期	後期	晩期	前	中	後	土器	須恵	須土器	瓦			
1	28	2928	川田天泊社	大下条 北条 川田				○							○					古墳有
2	28	2926	川田原	" " "				○												
3	30	2927	下 早	" " "				○							○					
4	31	7357	柳 沢	" " "				○												
5	84	2929	神子谷	" " 神子谷				○	○					○	○			○		
6	85	2940	大 早	" " 大早				○						○						古墳有
7	36	2930	柳 供	" " 柳供	○															
8	35	2932	羽根平	" " 中谷										○	○					土師型穴
9	34	2931	中 谷	" 東条 中谷				○												木製品
10	86		イナバ	" " "						○								○	○	
11	41	2933	深 見	" " 深見				○					○				○	○	○	
12	87		田 中	" 西条 小野										○	○	○	○	○		
13	88		山 田	" 東条 深見										○	○	○	○	○		
14	38	2936	中 島	" 西条 田上				○	○	○			○							
15	37	2935	上 垣 外	" " "				○					○	○						
16	39	2939	郡 本 畑	" " 井戸										○					○	
17	40	2934	早 稲 田	" " 早稲田				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(高麗瓦)
18	89		大 畑	" " 小野				○	○										○	古墳有
19	90		大 園 土	" " 平久				○	○											古墳有
20	47	2937	和 知 野	" 南条 和知野				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	壙穴住有
21	91	2938	日 影 林	" " "						○										

No.	郡 名	遺跡名	町村番号	登録番号	先土器	縄 文 時 代					弥 生 時 代	古 墳 時 代					平安時代	室 倉 町	近 世	備考
						草 創	早 期	中 期	後 期	晩 期		土 師 型	須 恵 型	須 土 器	灰 土 器	青 銅 器				
17	早稲田	早稲田	40	2934																
(1)		寺 尾																	○	古 銭
(2)		三 島 山																	○	神社境内 壙穴
(3)		宮 下								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	壙穴、竈址、工所址
(4)		森 下																	○	
(5)		新 道 下																	○	
(6)		宮ノ前																	○	
(7)		寺カイト (古銅カイト)						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
(8)		日カゲ						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
(9)		ハ ネ																	○	
(10)		久保畑						○	○										○	
(11)		門 前																	○	古 銭
(12)		持主畑																	○	
(13)		モモ畑																		
(14)		滑 水																	○	

表2 大下集古墳一覽

No	部落	古墳名	町村番号	登録番号 古	立地	外形	内部施設	副葬品	現状	備考
22	川田	堤林	27	2941	丘陵南面中腹			直刀、須恵器、同片	消滅	
23	大平	大平	33	2942	丘陵南麓	円 5.4×11.6 0.6	横室	須恵器片、刀子、鉄鏃、 金属片、土師器片、須恵器	半壊	室露出
24	小野	大畑	42	2943	丘陵東南中腹	円 9.8×9.8 3.1	横室	勾玉、須恵器片		室天井部アーチ、二室 牙石
25	平久	大関上	44	2944	丘陵南面中腹				消滅	
26	"	八幡社の塚	43	2945	丘陵南面中腹	円 8.5×8.5 1.5		鏃刀、土師器片、須恵器 同片		
27	"	種田塚	45	2946	丘陵南面中腹	円 17.8×17.6 3.4	横室			室天井アーチ、牙石
28	和知野	塚谷垣外	46	2947	河岸台地				消滅	

表3 大下集城跡一覽

No	部落	城跡名	町村番号	登録番号	立地	支配者	構造(残存)	備考
29	深見	磐山 (取手山)	(92)		山腹	下条氏		
30	井戸	矢草、城	(93)		山頂	関氏	本郭 曲郭 空濠	
31	早稲田	八幡城	(94)		山腹	関氏		仮城?、八幡社
32	小野	上田城	(95)		山頂	関氏	本郭 曲郭 空濠	関三社、八幡社
33	和知野	権現城	(96)		山頂	関氏	本郭 ^一 、 ^二 郭 空濠 (保存状態良好)	関氏遺跡の居城 関氏遺跡、関三社、八幡社



1 圖 大下条道跡分布圖

2. 阿南町大下条地区の歴史的背景

1. はじめに

国道151号線で飯田から天竜峠を経て、阿智川を越すと下条氏の居城地であった下条村に入る。縦に長い下条村を縦断するようにして、南はずれ近くまでくると、一直線に改修された国道は、吉岡城跡を真二つに掘り割り、さらに、そこから5分たらずで古城の脇を一気に走り抜ける。古城は現在、阿南町になっている旧富草村にあり、さらにその南が旧大下条村である。飯田から大下条のほぼ中心である阿南町役場所在地まで約40km、車で1時間足らずのところであるが、かつてはこの地一帯が「下条」といわれていて、今でも愛知県側へ行くとき一般のあいだでは「大下条」と「下条」を区別せずに、ただの「下条」で通っている。

大下条という呼称がいつ頃から使われていたのか、はっきりしたことはわからないが、文献では明治5年に、筑摩県飯田出張所に差出された書類に「大下条22ヶ村惣代」という書付けがあり、正法寺過去帳に「明治5年6月初めて大下条となる」という記載があって、その頃から表に出てくるようになる。この呼称が何によるものか定かではないが、ある人は下条氏発祥の地とされる甲州韮崎・下条の近くに大下条という地籍があるといい、ある人は名古屋を中京というように、下条氏居住地を中下条とし、それに対してこの地を大下条としたのだともいう。いずれにしても中世末にこの地を治めた下条氏にとって、本拠地に近く、温暖で肥沃な米作地帯として下条領の中でも最も重き置かれた地域であったことは間違いないところで、下条(氏)とつながった呼称であることも確かなことである。

大下条は、東に天竜川、西は下条山脈、南は和知野川と自然地形に区分され、地形的にも行政区画としてまとまりやすいが、各部落に残る年間行事、風習、盆おどり、祭事などをみても、昔から風土、習慣、人情、宗教的に結びつきが強かったことがうかがえる。

とくに、式外社としての式格を持つ早稲田神社は、現在では早稲田部落の氏神として祭られるにすぎないが、その昔はこの地域に広く信奉されていたことがわかっている。熊谷家伝記、郡史4巻でもあげられているが、平久・井戸・池島・千木・御供・神子谷などの部落名は、この早稲田神社の祭事に関係したものであるといわれている。これらの部落が早稲田神社をほぼ中央に置いて、これをとり囲むように位置しており、この地を領した関氏・下条氏がともに早稲田神社を厚く信奉し、祭事も盛んに行われたことからみても、この神社を中心とした宗教的結びつきはかなり強いものであったことをうかがうことができる。

さて、大下条地区の歴史的背景であるが、この地に関氏・下条氏が進出してくる室町時代になると、ある程度文献によってその姿を知ることができるが、それ以前のごとくとすると平安時代の国史に、式外社として早稲田(和世田)神社、式内社として大山田神社をうかがうことができ、早稲田神社には、鎌倉期の県宝・鰐口(正応3年=1290=の銘)が残されているが、他にはほとんどみるべき文献資料が発見されておらず、考古学分野の調査に待つところが多い。先史時代、

古墳時代については別項でふれているので、ここでは、この地の歴史を特徴づける関氏と下条氏の興亡史、さらに式外社早稲田神社と早稲田地籍の古字・古社寺などについてと式内社大山田神社の旧鎮座地と伝承される深見部落のことについてふれながら、この地域の大まかな歴史的風土を紹介することにした。

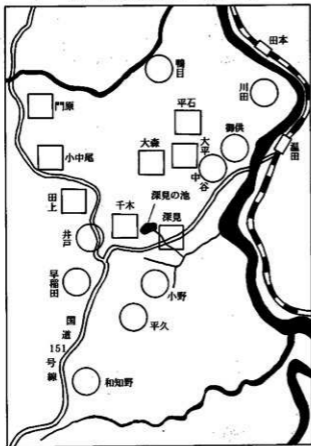
2 関氏と下条氏の興亡

(1) 関氏の進出

関氏については「関伝記」が残されている。「熊谷家伝記」で知られる坂部(天竜村)の熊谷直暹が著したもので、関氏滅亡後230年を経たものであり、記述内容に奇抜とも思える説話もみられて、信ぴょう性を欠くところがあるが、関氏考察には欠かせない貴重な文献である。

これによれば文安5年(1448)に、平氏の流れをくむ伊勢国関氏の一族・関盛春が戦乱を逃れて流浪し、阿南町新野に来て、土地の住民に推されて領主となり、新野に日差城を築いたこと

関氏・下条氏の勢力分野 (大永の頃)



○ = 関方 □ = 下条方

から始まる。いわゆる関郷といわれた地域は、関氏がこの地に来てからのことで、関氏古本領とされる5ヶ村は、新野と向方・福島・長沼(いずれも天竜村)、それに大下条の和知野である。関氏はこの地の開発に力を入れ、次第に勢力を伸長する。新野は千石平、米どころとして知られるが、標高700mを越す冷涼な高地であり、天竜村は平地の少ない山間地である。関氏が力を貯えてくると当然のことながら領地拡張の鋒先は温暖肥沃な米作地である大下条地域に向けられるようになる。ここに、同じく進出しようとしていた下条氏との間に確執を生ずることになった。大永5年(1525)、早稲田において下条氏と戦い、これに勝った関氏は早稲田を領有し、この地に矢草城を築き、さらに、井戸・御供に一族を配して、大下条への進出を確かなものとした。

(2) 下条氏の進出

一方、関氏と対峙することになった下条氏については、佐々木喜庵（大下条千木の住）によって著された「下条記」がある。下条氏滅亡後120年を経たものであるが、記述は資料に忠実に早くから中央に認められ、諸書に引用されるなど信頼の置ける文献として知られている。

これによると、応永元年（1394）に、甲州より武田氏の流れをくむ下条頼氏が、戦乱を逃れこの地に流れ来て、里人の案内で大沢の地に居住した。今の阿南町富草の古城といわれるところで、「以後5代76年間はつつがなく大沢の城に安住す」とある。この地が地理的に不便なところで、したがって他からの侵略を受けることもなく、平穩のうちに山間の地域を徐々に開発して勢力を拡張していったのであろう。

下条氏は5代で血統が絶え、文明2年（1470）に松本深志城主小笠原政康の子康氏が迎えられている。康氏は下条家中興の祖といわれる人であるが、下条村吉岡に城を築いて移り、鈴岡小笠原氏と深い関係を結んで、これに対立した松尾小笠原氏としばしば戦い、阿知川を越えて、立石・中関・駒場・屋神辺まで進出して、勢力を大いに伸長させた。古城の城は、康氏が伴ってきた母方の伯父、佐々木帯刀に譲っている。

ようやくこの頃から関氏が勢力を拡張して大下条地域に進出し、下条氏をおびやかすようになった。関氏の北上に対して防備の必要から、佐々木帯刀の四男・佐々木将監を千木に住ませ、砦を築いて警備にあたらせた。



小野・上田城跡より千木部落を見下ろす
現在は電々公社、阿南町役場など近代ビルが建ち並び
阿南町の中心の観を呈す。うしろの山が「とりで山」

(3) 関・下条両氏の抗争と関氏の滅亡

大下条争奪戦ともいえる両氏の抗争は大永5年、早稲田での戦いで関氏が勝ちをおさめ、この地に地歩を築いてからいっそうはげしいものとなった。当時の勢力分野は図でみるように複雑に入り組んでいる。千木には「将監畑」という字名が残っているが、ここは将監館址と考えられ、その附近の丘陵を「とりで山」と呼んでいるが、これは砦山の意である。関氏の勢力はこの千木を馬蹄形に取り囲んだ形をしており、逆に下条方からいえば、将監を千木に配したことは関氏勢力の真中へ楔を打ちこんだことになり、関氏の築いた矢草城・上田城から見ると、千木を眼下に見おろす形となって、当時の緊迫した様相をうかがい知ることができる。

両氏はしばしば小ぜり合いを起こし、井戸に下条氏が攻め入って、近辺を荒らし、急を聞いて矢草城から兵が出向くとすでにひきあげたあとというようなことが重った。このため、矢草城からでは、かん急の際おくれをとることから、関氏は小野に上田城を築いて移った。しかし、ここも防ぎょに不安があるということで、在城2年足らずで和知野川を越えた要害堅固の地に和知野城を築いた。わずか13年の間に三つの城を築いたのである。

このような関氏の備えに対し、危機感をつのらせた下条時氏は、ついに天文10年(1541)、和知野城へ攻撃をかけた。大永5年に次ぐ大きな戦いであったが、この時も関氏の守備は固く、かえって逆襲されて敗走し、追撃を受けて、佐々木帯刀が守備していた大沢古城に引きあげて、かろうじてことなきを得た。この戦いに勝利を得た関氏は、深見・千木・田上など大下条全城と富草の大半を領有することになり、一口に関領三千貫文といわれる全盛時を迎えた。

深見・千木・田上などが関領になったことについては、この戦いで関氏のものになったとする



矢草城を望む 正面の山頂に広い平坦があり、これを本郭としてところどころに帯曲輪、石垣の跡をのこす。山城であるが規模は大きい。関氏は上田城に移るまで11年をここに住す。

説と、その以前に雨乞いを願うために関氏に降りていたとする説がある。関伝記によると深見板巻善右衛門・千木佐々木出羽・田上村松太郎左衛門等は元来下条氏の忠臣であったが、関国盛が勇猛果敢で、雷を組みとめ風雨を望み次第にするという風説を聞いて、折から早ばつで下民の苦しむのを見かねて関氏に降参を願いだした。とこ

ろが、それは表向きで
 実は国盛を油断させ、
 高慢心をつのらせ、家
 臣に疎ませようとした
 下条側の策略であった
 というのである。事実
 彼等は3年後の天文13
 年(1544)に関氏を
 滅した夜襲に下条方の
 討手の大将として参戦
 している。しかも戦勝
 の褒美として「眼の前
 の敵を主として敬い、
 よく堪忍して成功させ
 た」とそれぞれに領地
 を給わり、あるいは加



見名から和知野部落をのぞむ 段丘上の集落には縄文早期
 をはじめ各期の遺物が出土し、考古学的に注目される。
 和知野川をはさんで右手の山続きの急峻な山頂に和知野砦
 がある。帯川のえん堤で取水されるため水量が少ないが、か
 つては天然の強固な防備線となっていた。

増されているのである。領地の安堵、加増は確かな事実であるから、陰謀説の方が当たっているように思われる。

和知野城は、要害堅固な城で、尋常な手段で落とすことは容易ではなかった。関伝記によれば下条方が間者を使って、領主と領民の間を離反させようとした事例をいくつもあげているが、真偽の程はともかく、謀略戦法は戦国時代の常套手段であり、そのような陰謀は当然あったであろう。

天文10年の戦いに勝って全盛時を現出した関国盛は、しだいにきょう慢な振舞いが多くなり、老臣、宿将等いずれもこれに対して不満を抱くようになった。あいつが築城に領民も労役に悩み



和知野城(権現城)の本郭の後方にまつられる三基の墓
 関盛経夫妻と国盛の墓と言われる

領内の人心はしだいに関氏を離れ、筆頭家老吉沢伊予までも、こうした関氏を見限って下条氏に内通する。かくして、この情況を読みとった下条氏は天文13年8月、月見の宴で酔い痴れていた和知野城を一挙に急襲した。虚をつかれた関方はこれを防ぐいとまもなく、城主国盛は混乱の中に討死し、城兵の多くが討死、あるいは四散して関氏はいよいよ滅亡するにいたった。

これを知った一族の新野日差城も、御供の関大隅も早急に下条方に対し、敵意のないことを通じて、ここに阿南一帯下条氏に帰した。

余談になるが、この戦さに不思議な話が残っている。関伝記にも下条記にもでている。

関氏を討ちとった翌日、討手の者共は吉岡城に揃って、首尾を報告し、よろこんだ城主から各人が褒美をあたえられた。この中に大那木の惣十郎という中間がおり、額にコブがあったので、皆からコブと呼ばれていたが、このコブなかなか力が強く、前夜の戦いで、関国盛に初太刀をあげさせた。その功によって米10俵を拝領し、得々として皆と一緒に帰途についた。ところが途中から狂い出し、小中尾の花の木沢の前まで来ると、急に大声をあげて「おのおの、油断めさるな、あれに関新蔵（国盛）殿来たる」と叫んだ。みると道上の草むらの中から一匹の山犬がおどりで、コブののど笛をただ一口に食い切ると、あっという間に山の中に走り去ってしまった。皆おどろいて近寄ってみると、すでにコブは息絶えていた。初手を自分が討ったと思う心のまよいで山犬が関殿に見えたのであろうか。あるいは殿の亡魂が山犬になって現われたのであろうかと、数十人の目の前で起ったことにおそれおののいたというものである。関伝記では、小野の惣十郎の侍で犬坊という国盛に可愛いがられた小者で、当夜恩を忘れて裏切ったものであり、山犬は国盛が手馴れさせていた飼犬であったとしている。

室町時代の初期から信州南端の関郷に雄を誇った関氏も、ついに下条氏に滅ぼされ、以後下条氏はこれまで関氏の領有していた地域も加えて、急激にその勢力の拡大をみるにいたった。

大下条もこれ以後、下条氏が家康によってとりつぶされる天正15年（1587）まで、下条氏の支配下におかれる。下条氏の滅亡は関氏滅亡の43年後のことであった。

(4) 大下条の郷主と関氏の城跡



小野・日比原にある吉沢伊与の供養塔 享保18年の建立、後方の田んぼは伊与の屋敷あとと言われ、田を掘るとき中世陶器片が多数出土された。水害のため吉沢宅は見名に移ったとされている。

【郷主】

当時、各村には郷主と呼ばれる有力者がいて、関・下条両氏のいずれかに属して働いたことが知られているがその中から両氏の抗争に重きをなした郷主について、2、3ふれておきたい。

吉沢伊予 関氏きっての重臣で、小野に住した。大永5年の戦いで小野が関領になっ



見名・吉沢宅に伝わる関氏ゆかりの品々



坂巻長玄（善右衛門）の墓 享保14年建立のものである。旧阿南町役場裏の旧道脇に盛土をして、その上に建てられている。

坂巻善右衛門（長玄） 深見の郷主で、下条百騎に入っており、豪勇で知られた。天文10年に千木の佐々木出羽と共に、関氏に降りる。早ばつが続き雨乞いを願うために関氏に下ったとされているが、実は下条方の策謀であったようで、天文13年の夜襲のときは下条方の討手の大将として活躍している。この戦功で、新たに平久の内大窪を給わった。深見は下大条の中でもとりわけ大きな村で、自然湧水による肥沃な水田地帯を持つだけに、近隣の郷主の中でも有力な郷主であった。

深見の正法寺は天正16年に坂巻善右衛門の創建になるものである。嫡子が早世したために、所有していた田畑・家財を残らず法体とし、自らも僧となって永元と称した。現在下大条の大部分が、正法寺の檀家である。寺内に水月堂と呼ばれる観音堂があり、十一面観音像を祀る。

佐々木将監 千木に将監畑という地目があり、将監館址と考えられる。この一帯をとりて山と呼んでいるが、これは砦山であり、今もわずかに人工のあとが見られる。

将監は周囲を関領にとり囲まれた中で、下条方の最前戦の重要な役割を負うて千木に住した。将監の父帯刀は古城をまかされた人であるが、祖父は近江国佐々木六角大膳太夫高頼で、帯刀は高頼が深志城に逗留したときにできた子で、康氏が下条に迎えられるときに付添ってきた。帯刀は康氏にとっては母方の伯父にあたる。

たときに、家臣になったとする説もあるが、関氏が伊勢の国から流れてきたとき、供をしてきたのが先祖で、初め新野に住し、その後小野に移ったとするのが定説である。忠勤にはげみ、関伝記にしばしば登場する。矢草城より小野に城を移すよう進言したのも伊予であった。

領主の高慢な振る舞いに老臣・宿将の心が離れ、領民の苦しむのをみて、度々諫言し、下条氏と和平を結ぶことに懸命になるが、かえって国盛の怒りをかい、国盛のために討たれようとする気配を察して下条氏に内通した。関氏滅亡の大きな役割をになったのである。その行動には同情的な見方が多い。

天文13年に関氏滅亡後、伊予は小野の所領を安堵され、下条百騎の中に数えられた。屋敷は小野日比原にあったが、水害のために移住し、今は屋敷あと近くに供養塔が立っている。屋敷あとは水田になっているが、水田をつくるとき多数の陶器片が出たといわれ、つい最近も畦地から中世陶器片が見つかっている。

天正16年坂巻長玄（善右衛門）の創建による正法寺、曹洞宗・虚空蔵菩薩を本尊とする。大下条の大部分は正法寺の檀家である。



正法寺境内にある観音堂別名水月堂とも言われ、十一面観世音菩薩を本尊とする。創建は正法寺より古く、永録の頃にみられ、大下条八景の一つに数えられる。



千木・佐々木家累代の墓 佐々木将監を祖とする



「下条記」の著者、佐々木嘉庵の墓
料室から数えて6代目、近在の大庄屋をつとめた

将監は千木佐々木の祖となるが、二代目は坂場（愛知県豊根村）村松氏から養子に入った佐々木出羽である。出羽は深見坂巻と同じく、和知野城夜襲のとき討手の大将となり、戦功によって、松島・長沼を給わり下条百騎の一人となっている。佐々木家六代を継いだのが、下条記の著者、喜庵である。

関 大隅 三代盛経の弟で、関氏最後の城主国盛には叔父にあたり、御供に館を構えていた。国盛の不行跡にしばしば諫言したが用いられず、次第に遠ざかって引籠りがちだったという。下条氏夜襲のとき急の知らせを受けたが、御供からでは間に合わずとみて、援軍をあきらめ下条方に敵意のないことを早急に通じた。下条氏からはその行い神妙であるとして、御供・中谷の安堵と富草白須を加増された。その後、南島治郎左衛門と改名して御供に土着したといわれる。

仁善寺（新野一庵寺）を修築しており、新野八幡城に在城したこともうかがえる。また下条氏に降りてからは栗野に屋敷を賜わった

とも言われる。居住地については諸説あるが、和知野城落城の際に御供にいたことは確かで、御供には大隅にまつわる由緒も多い。

【城跡】

大下条には関氏の築城による城跡が四つある。早稲田を中心に、とりまくように三つの城跡と、最後の居城となった和知野城である。それぞれについて簡単にふれると、

八幡城跡 早稲田西方の字風越木平の北方山頭に約10aあまりの平坦部があり空堀の跡をとどめている。関氏がこの地方に進出した際に築城を試みたものとみられ、矢草城を築くまでの仮城であったともいわれている。築城年代及び在城期間等についてははっきりしない。近くに関氏の祀れる八幡宮のあととみられる小祠があり、この付近一帯が八幡城といわれている。

矢草城跡 井戸部落字本城きさかにあり、家古沢とも言われている。大永5年(1525)に築城され、上田城に移るまでの11年間をここに居住する。移転後は同族が守った。純然たる山城で、山頂に広い平坦があり、これを



井戸より城山(上田城跡)をのぞむ
中央のくぼ地が、から堀になっている。築城後、
わずか二年で和知野に移っている。



早稲田神社の拝殿と神木の大杉
神社の歴史を証明するかのよう^にに樹齢1000
年を越し、周囲約10mの太さに圧倒される

本郭として、その下方に数段の帯曲輪が設けられている。

上田城跡 小野部落の字城山の地にある。城山の山頂丘陵の突端部に構築されている。眼下に深見部落を一望し、天竜川をへだてて、赤石連山を眺めることができる。旧村八景の一つとされた景勝地である。城の構築は単純で、本郭のほか三つの郭があり、東西に二条の空壕がつくられている。天文5年(1536)に築城し、わずか2年で、要害堅固にあらずとして、和知野権現城に移っている。

和知野城 権現城とも呼ばれる。関氏最後の居城で大下条の南境を流れる和知野川の南岸であり、標高520mの険しい山の頂き、字城山の地にある。和知野川の河岸より急峻な坂を約100m登ると、城平という緩傾斜地があり、これより60m登って城址に達する。城址は北面し、東西は深い渓谷で、後は山つづきとなる。極めて要害の城である。城址の本郭の後方に三基の墓があり盛経夫妻と国盛の墓といわれる。その近くに熊野権現社があり、その裏に空壕がある。この城を権現城というのは、熊野権現を祀ってあるからであろう。天文7年以後の居城であり、天文10年の下条氏の来襲には難なくこれを退ぞけたが、人の心の乱れに内から崩壊した形で、天文13年、下条氏の夜襲にあえなく落城し、滅亡するに至った。

3. 早稲田神社と早稲田地籍の古字・古社寺・及び中世遺物出土地について

(1) 早稲田神社について

早稲田神社は式外社(国史現在社)である。平安時代の国史・日本三代実録に貞観15年(872年)5月、正六位上和世田神社が位一階を昇して従五位上に叙された、という記事が載っている。延喜式神名帳に記載された神社を式内社といい、神名帳に記載はないが、続日本紀以下の国史に見える神社を式外社、又は国史現在社という。伊那地方には式内社として阿智神社(阿智村)と大山田神社(下条村)、式外社として早稲田神社の三社が知られている。地域の広い伊那地方に式内社・式外社が合わせて三社だけということ、しかも南部山間地のみに片寄っているのはどうしてであろうか。阿南地方は第三紀層で地味が肥え、温暖で水田耕作に古くから適していたというだけでは説明できないものがあるが、しかし早稲田神社が平安時代に中央政府に認められるほどの神社であったことは間違いないところである。

早稲田神社は下伊那郡阿南町西条の字三島山208番地に鎮座する。拝殿の南側に神木の杉があるが、目通りで周囲約10m、樹令は千年を越しているといわれ、威厳をもってそびえている。また、拝殿の北側には柗樹が植えられているが、これも太さ約2m、千余年を経過した古木とみられ、神社の古さをうかがわせる。

早稲田神社の創立は、前述の貞観15年より以前であることは明らかであるが、社伝によると、それより23年前の仁寿元年(851年)としてある。神祇官から位を授けられる程であったから、近郷近在の総鎮守として、崇敬者が多く、かなり盛んであったことは推測に難くない。西部神道説の流行した時代であるから、神宮寺があったことも当然考えられ、麴口など神宮寺につながる



早稲田神社社宝の鐺口
 県宝に指定され、鎌倉期のもの、岩倉寺
 八王寺宮とあり、岩倉寺は早稲田神社の
 神宮寺とみられている。



木彫薬師如来立像
 観音堂内の中央に安置されている、痛み
 はひどいが鎌倉時代のもたとされ、神宮
 寺の本尊であったとも言われている。



小野・上田城趾北麓の向上観音堂の内部 中央に薬師如来立像を安置する。この観音堂
 は、かつては早稲田神社境内にあり、一時宇・大日に移され、その後現在地に移された。

遺物も残っているが、その位置の推定などについてはあとの古字のところでふれることにしたい。

三代実録では和世田神社とされているが、古来・早田・和勢田などいろいろな字があてられていたようで、文化7年に神祇管領の吉田家へ社号の允許を出願したときに「早稲田神社」として統一し、以後早稲田神社として今日まできている。

遺物としてはつぎに挙げられるものなどが残されている。

① 罽 口

鎌倉時代に鑄造された郡下最古の罽口で、県宝に指定されている。径20.1cm、陰刻の銘文に「岩瀬寺 八王子宮、正応3年5月23日」とある。社伝によると、岩瀬寺は早稲田神社の神宮寺で、同寺内の鎮守八王子宮に懸けてあったものとされている。神社境内に最近まで末社として、八王子宮の小社があった。

② 木彫薬師如来立像

境内にあった薬師堂の本尊である。神宮寺の本尊であったともいわれる。高さ71.6cm、檢造りであるが、いたみがひどく、腐蝕している。奈良美術院主事新納忠之介先生は鎌倉時代のものと鑑定された。この薬師像は現在、小野の上田城址北麓の向上観音堂内に移されている。

③ 古 銭

昭和9年、神社裏手、現国道の上の畑より素焼のつぼに収めた古銭一万一千余枚を発掘した。畑は現在は私有地となっているが、もともと神社域にあったもので、この古銭は容器と共に、早稲田神社の宝物となっている。万年通宝一文をのぞいては全て支那銭であったが、

永楽銭が一文も入っておらず、そのことは埋蔵年代が永楽以前つまり、室町期より前であることを示すものである。

これらのものから推しても、早稲田神社は平安から鎌倉時代にかけて地方屈指の歴史を持つ神社であったことを知ることができる。

室町時代に入って、この地を支配した関氏・下条氏も共に早稲田神社を崇敬したことが神社記録に残っている。関氏は早稲田神社を領内関郷の産土神として信奉し、春秋の祭礼には、御供村よりの御供米・供物を神饌とし、御手洗い井は井戸村にあり、造営の用材は千木村より伐り出し、池の島より川



昭和9年に神社の裏山より発見された古銭と素焼の古つぼ
神社の社宝となっている。埋蔵は室町期以前とみられる。

魚を献上し、田上村は斎田のあったところで、平久は神饌を盛る瓶を奉り、神子谷の少女は巫子となって神事を勤めたと伝えられる。これらのことからその祭祀がいかに盛大であったかを知ることができる。これらの村々は現在も大下条地区の部落名として残っている。関氏を滅して、この地を領有した下条氏も、神社を崇敬することにおいては関氏とかわることはなかった。皇典講究所の神祇全書には、早稲田神社は往古下条22ヶ村にて祭祀を司り、神饌を供進した、と記載されている。

江戸時代になると早稲田神社には朱印地がなく、専属の社家もなくて、最寄りの神職を頼んで神事をとり行う状態となり、あまり社運振わず、順次衰えていった。

(2) 早稲田地籍の古字、城跡・古社寺と中世遺物出土地

① 古字に見える早稲田地籍の様子

付図の古字図は早稲田地籍のうち、早稲田神社とその周辺、及び国道151号線ぞいに発達した街並をはじめ、部落の主要部のほとんどが含まれている。このほかに「大日峠」に南面する斜面に集落が一部と、西側に半僧山、弁当山など下条山脈に連なる山地が広がっている。古字図に示された区域はこの山地の東山麓に形成された扇状台地にあたる場所である。「一里塚」より南西は「入板」あたりから南沢による扇状地形をなすが、北はほぼ151号線を境に東面して、ゆるやかな傾斜となる。山麓から台地端まで、ざっと450mの帯状傾斜面がこの部落の主たる生活地域をなしている。部落の北側は井戸沢を境に井戸部落と接し、南東は南沢を経て小野部落と対面している。いずれの沢も東に流れて千木沢に合流し、千木沢の東には「深見の池」で知られる深見部落がある。

古字図作製はこの地域広範に中世遺物の出土が予想されるため、出土地を図表に正確に記す必要があること、式外社として古い歴史を持つ早稲田神社なので、遺物と古字の関連から、太古の神社存在の様子を探ることができるかも知れないという期待からであるが、以下、現在の調査時点で古字図から読みとれるものをひろいあげてみると、

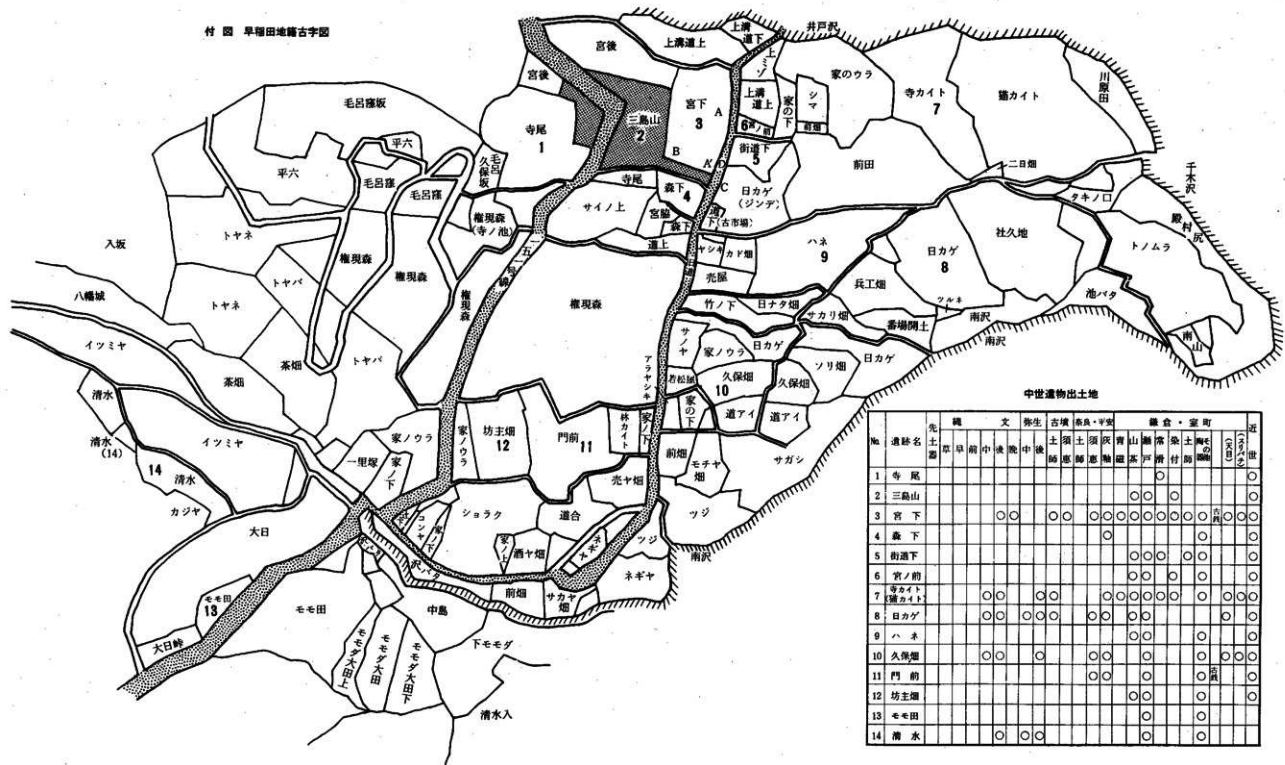
ア) 早稲田神社周辺の古字と摂社、末社について

早稲田神社の社域は「三島山」である。かつての祭神「三島大明神」とつながるものであろう。神社の裏山には「宮後」、前方には「宮下」「宮ノ前」、南側に「宮脇」と周囲に神社と結びつく字名がみられる。神社前の「日カゲ」のあたりは「神田」ともいわれ、「道下」あたりから東南にかけての帯は「古市場」ともいわれていた。門前市が開かれたのはここあたりであろうか。

摂社、末社についてはかなり多かったことが知られている。その主なものとして、下伊那史にあげられたものに、大山祇社(字風越木=「入板」の西山地)、天伯社(字寺尾)、富士浅間大神(字大日山)、熊野三社(字権現森)、金山彦(字久保畑)、若宮八幡宮(字モチ屋畑)、天照皇大社(字社久地)、おくわ様(字三島山)などがあり、これらは明治末にことごとく本社に合祀されている。

イ) 古寺の推定にかかわる古字

村 田 早稲田油籠古宇田



中世遺物出土地

No.	遺跡名	種												近世遺物出土				
		先土器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	鎌倉	室町	徳川	幕末	明治	昭和					
1	寺尾																	
2	三島山																	○
3	宮下			○		○												○
4	森下																	○
5	街通下																	○
6	宮ノ前																	○
7	寺カイト 猫カイト	○		○		○												○
8	日カゲ	○		○		○												○
9	ハネ																	○
10	久保畑	○		○		○												○
11	門前																	○
12	坊主畑																	○
13	モモ田																	○
14	清水																	○



字・門前・坊主畑より早稲田神社の森をのぞむ
 字名、出土遺物からみて、神宮寺の推定地として最も有力
 視される位置から神社の森をうかがった。

早稲田部落には寺は現存しないが、神社に鎌倉時代の駒口が残されており、それに「岩嘉寺」の銘文がきざまれている。早稲田神社の神宮寺ではないかと推測されているが、その寺跡を推定する手がかりとなる字名として北に「寺尾」「寺カイト」があり、「権現森」の中に「寺の池」と通称されるところがあり、さらに「権現森」の南

に「坊主畑」「門前」などがある。この中で「坊主畑」「門前」からは、平安から中世にかけての陶器片や古銭が採集されており、市村成人先生もこの地を推定されたが、「寺カイト」にも寺僧のものといわれる墓が残っていて、もう少し有力な手がかりのほしいところである。

ウ) 古字にみえる古い民家の位置

早稲田神社には無形文化財の人形芝居が伝わっている。日下部新一先生の調査報告書「早稲田人形芝居」があるが、これによると、いつ頃より始められたのか定かではないが、天保年間に上演されていたことは確実である。この人形芝居を演ずる役者は、浄るり、三味線、立役、女形とそれぞれ家筋によって代々役柄が決まっていたとのことであるが、現在あるいは先代まで受けつがれてきたという家々の位置をほとんどこの古字図にみることができる。つまり、北より「上溝」「島」「壳屋」「佐野屋」「久保畑」「新屋敷」「林垣外」「鉾屋」「一里塚」「泉屋」「桃田」(他に「久保屋」は地名がなく、「横山」は大日峠に南面する集落にある)で、いずれも旧道に面しているか、その近くにあり、周囲に「家ノウラ」「家の下」「前田」「前畑」などの字名を持つ、古い家柄の家々である。これらの家並の中に「祢宜屋」という家があるが、この家の墓地が神社域に接して在り、祢宜職であったこと、部落で最も古い家柄とされていることから、古くはこれらの家並が部落の中心であったことは間違いないであろう。これらの旧家が神社東南方の比較的低い段に集まっていること、さらに部落のはずれに多くつけられる「サイの上」が、神社に近いところにあることから、神社は集落のはずれ、北側上段に位置し、従って神宮寺もこれと平行する位置にあったと考えるのが妥当ではないだろうか。

② 早稲田地籍の中世遺物出土地

早稲田地籍の遺物分布調査は6月に1回、8月に2回行った。悉皆調査とはいうものの、人数

時間に制約があって、まだ全域にわたっての調査がすすんでいないので、今後、まだ出土地が増えるものと思われる。分布調査の結果については、Ⅲ調査結果の1のところに詳しく記述されているので、ここでは簡単にふれておきたい。

出土地は現在のところ、古字図に数字で示されている14ヶ所で、遺物状況については同図右下の図表を参照されたい。

遺物分布地を大きくまとめると、①早稲田神社周辺（寺尾・三島山・宮後・宮下・森下・上溝街道下・宮ノ前）の一群と、②東に下って「寺カイト」「日カゲ」などの台地先端部、③国道予定地内の「久保畑」、④その上段で神社と等高線上にある「坊主畑」「門前」、⑤さらに南西によって「清水」「桃田」の傾斜面と、5ヶ所にまとめることができる。

このうち、とくに遺物が濃密だったのは「日カゲ」（遺跡番号8）で、相当の傾斜面であるが縄文から中世までを含む複合遺跡である。調査の折は雨が降りという好条件もあったが、多量の採集で、特長あるものを選び出して持ち帰る程だった。東面するこの地が「日カゲ」となっているのも首をかしぐところであるが、地元の人話では上段にこれより日照時間の長い「日ナタ」があり、それに対応してつけられたのではないかとのことである。旧来早稲田遺跡として登録されているのは、この地を指すものと思われる。隣接する「寺カイト」は平坦の桑畑で、寺僧のものといわれる墓が残っており、古寺を探る上で関心の持たれる地であるが、遺物も相当量採集され、同じく縄文から近世のものまで各時代のもが含まれている。

早稲田神社周辺は中世遺物の濃いところで、調査の際、神社に向う道筋で「街道下」に山茶碗の底部、「宮下」で天目茶碗の口縁など、中世のもの数点がみつかり、一躍この地の中世遺物に着目させるきっかけとなったところである。

久保畑は平坦な畑地であるが、上下二段に区分される畑地のうち、下段に縄文遺物が多く、上段には須恵・灰釉から中世陶器片が集中している。ここから「日ナタ畑」「ハネ」へかけての一带は有力な遺跡である。

「坊主畑」「門前」はひと続きの緩傾斜面で、平安期の須恵・灰釉もみつまっているが、瀬戸・常滑など中世陶器片の多いところである。調査の折、案内してくれた土地所有者が、耕作中によく古銭をひろうと話してくれたが、その話の最中に足元で古銭が見つかった。北前方に「権現森」の水田をはさんで、神社の森が迫り、この地が神宮寺の跡地として有力視されるのも、ここに立ってみるとうなずけるような気がする。

「清水」「桃田」は南沢による扇状地形の同じ傾斜面にある。上方の「清水」からは縄文と弥生の土器片が採集されているが、共通して中世陶器片がみられる。「清水」にあるプールを作る際にかんがりの遺物が出たということであるが、今となっては真相はわからない。

以上、分布地の様子に大まかにふれたわけであるが、調査したところからはほとんど遺物が見つからない。調査は畑作地に限られるので、「権現森」「前田」「社久地」など、比較的広い平地の水田地帯からは、遺物は発見されていないが、周囲の状況からみて、これらにも遺跡が予想

される。大胆な言い方をすれば、早稲田全域にわたって、濃淡はあっても分布地であるということが出来るかと思う。

4 大山田神社旧鎮座地（伝承）と寛文期の深見の池の様子

(1) 大山田神社旧鎮座地山田について

早稲田の隣り部落に、天然湖としては伊那地方最大の「深見の池」（周囲716m）で知られる深見部落があり、深見の内、山田地籍に大山田神社旧鎮座地と推定されるところがある。



大山田神社旧鎮座地とされる山田地籍 ぼつんと残された小屋は現在、深見神社に合祠された山田地明神社の祠られていたあと、神社跡の前には水田がひろがり、須恵器などの遺物がひろえる。



山田から深見部落を望む 下方の水田は耕地整理で大きな田んぼに変わったが、深見の池の湧水を利用する古水田地帯であり、深見七瀬の一つとされる「シダナのふち」もこの一画にあった。

大山田神社は阿智神社と並んで、伊那地方の式内社二座のうちの一つであるが現在の鎮座地は下条村陽阜字宮の腰にある。室町時代下条氏によって造営された重要文化財指定の社殿をはじめ、鎮西の森といわれる杉や松の大木が鬱蒼としげり、盛観をなしている。

しかしながら、この大山田神社は、種々の記録からみて、最初からこの地にあったものでないことが明らかとなっている。慶安2年（1649年）に家光から鎮西八幡宮領として、10石の朱印地を給わっているが、このときの本宮は八幡神、摂社は諏訪明神であり、大山田神はまだ祭られていなかった。神主家鎮西氏によって神祇管領吉田家に願い出されて、大山田神社として承認されたのは元文6年（1741年）のことである。鎌倉以後、久しく人々の記憶か

ら遠ざかっていた大山田神社は吉田家の承認を得ることによって、鎮西野に復活したのであった。

では大山田神社の最初の鎮座はどこだったのかということになるが、諸説ある中で、最も有力なのが、この深見山田説である。

山田は深見本部落からは離れており、千木沢溪谷をはさんで相対した位置にあるが、もともとは山田の方が本村であったとも言われる。うしろ南側に山を負い、前面は北に傾斜してはいるが肥沃な水田の多いところである。あたりには山田という屋号の、かつて神主家にあたる旧家が一軒だけみえる。

ここには最近まで古池大明神社があったが、現在、祭神は深見諏訪社に合祀され、物置となった拝殿に絵馬が残り、周囲の景観が往時をしのばせるだけである。山田古池大明神社がいつごろからあったかは不明であるが、慶長年間に存在していたことは旧記によって知ることができ、室町時代と推定される獅子頭も残っている。神社所在地が山田であり、祭神が大國主命であることから、ここを大山田神社の古地にあてようとするのである。古老の話では、山田池明神にあった大山田神社の古記録類は、故あって鎮西の神主家に譲られ、その後、大山田神社が式内社として鎮西に移し祭られたものだと伝えている。

明治初年につぎのような大山田神社の本案争いがあったことが知られている。明治2年、太政官により、延喜式神名帳記載の諸国大小の神社は勿論のこと、廃絶したものについても詳細にとり調べ神祇官に届けるように通達があった。深見村神主・松沢左近は、自分の奉仕する山田古池大明神は、もと湖水（深見の池）より三町上の森の中に、大山田神社と号し、建御名方命を祀る諏訪神社と相並んで崇敬していたが、何時の頃よりか今のところへ遷し祭った。それより地名を山田と呼ぶことになった。従って式内社大山田神は現在の古池大明神より外にない筈、と竹佐役所へ出願した。当然、元文年間に吉田家の承認を得ている鎮西大山田神社と懸り合いになり、双方共にこれを証拠だてる資料に欠き、いずれとも決定

することができなかつた。ところが、改めて神祇官に訴え出ることになると莫大な費用を要するので、仲に入り、鎮西側より深見の左近に酒料として、金拾五両を差し出し、左近が願い下げをすることで妥結したといういきさつがある。

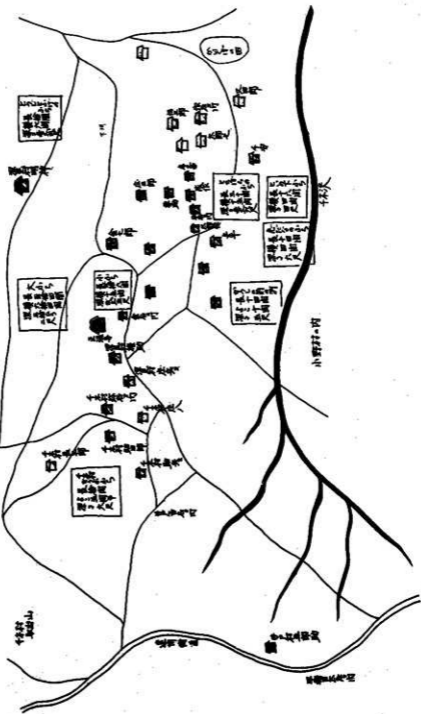
結局、式内社大山田神社は鎮西鎮座で落ちついたのである。



深見の池 周囲716mの伊那地方最大の天然湖、温水貯め池の役を果たし、古来より周囲の田は反当収量の多いことで知られる。池の右上手に大下条小学校があり、その裏にみえる山が城山（上田城跡）、山田は写真左手奥の山の手に一軒はなれてみえるあたり。

深見 千木村図 (寛文年間)

1750-1752



千木・深見村図 (年代不詳)

千木・佐々木家に伝わる古図をもとに書き直したもの (写・松沢)

池山田というのは深見全域をさし、池山田の池という地名はそこに豊富な湧水、水溜りがあったことを意味するから、それはとりもなおさず深見の池をさすものであり、この地域には湧水灌漑の古水田地帯で早くから開けていたのであるから、池山田神社は一時は相当に盛大であったことが推測できる。最近、この山田を考古学的に見直してみたいと調査してみたところ、水田の土堤で、山茶碗底部が採集され、この地の古くは神主家であった松沢享氏が水田耕作中や敷敷の周辺で発見した遺物が保管されていて、その中に須恵器片・山茶碗片・天目碗片・瀬戸系陶器などが多数含まれていた。このことからみても、この地がただならぬところであったことがわかる。

(2) 寛文期の深見の池の様子

深見とは深海、又は深水の転化したものであろうといわれる。何れにしても深き清水に起因することはいうまでもない。現在の深見の池は寛文10年の地震による大地殻変動によってできたものであるが、その時の大変動の様子を伝えるエピソードとして、天竜川対岸の我科にあった桜の古木は、池端にあったのが押し出されていったものという言い伝えがある程である。もともとこの地は地すべりの起こりやすいところだった。

このときの大変動によって、七つの淵ができたといわれ、一口に「深見七淵」といわれているが、現在に残るのは「深見の池」と呼ばれる大淵のみである。(土地の人はフチと呼んでいる)あとの淵は、2、3を除いて面影は勿論、位置すら不確かになっているが、当時の様子を伝える古地図が、千木・佐々木家に残っており、作成年代不明(寛文年間と推定)であるが、深見七淵のようすをうかがい知ることができる。図は古図を書き直したものであるが、これによると淵はつぎのようである。

大ふち	長 114間	横 64間	深さ 30ひろ2尺
小ふち	長 26間	横 15間	深さ 2丈 5尺
セウブぶち	長 10間	横 5間	深さ 6尺
かうしの前のふち	長 14間	横 10間	深さ 5尺
志だなのふち	長 14間	横 4間	深さ 6尺
とうじとうげのふち	長 10間	横 6間	深さ 1丈 2尺
とちぼらのふち	長 30間	横 15間	深さ 1丈 9尺
といの下ふち	長 16間	横 4間	深さ 4尺

大淵を入れると八淵になってしまうが、数え方に違いがあるのだろうか。大淵の大きさは現在とそれほど変わらないが、深さは現在では最深9mであるのに対し、30ひろ(40~50m)もあったことに驚かされる。

これらの淵を古字図・古老の話などで照合していくと、大淵より北東上段に「とうじとうげのふち」(字トウジ)があり、西南上段に「セウブぶち」(字セウブ池)がある。あとは東南方天竜川に向かって、深見の池の湧水を利用する水田地帯に集中している。大淵に隣接して「小ふち」(字ヒエヌマ)、その下方に「とちぼらのふち」(字トチボラ)・「志だなのふち」(字シダナ)があ

る。この「志だなのふち」の東側に「といの下ふち」、西側に「かうしの前のふち」があるが、この二つについては位置がはっきりしない。これらはふち田とも呼ばれ、いずれも地ぎょうの深い沼田であった。ごく最近になって「志だなのふち」は改良工事で様相を一変し、「セツブふち」は埋め立てられて、役場の庁舎となり、小ふちも道路の拡張ですっかり小さな水田と変わってしまった。

寛文期の地殻変動以前の深見の池にまつわる伝説としては、天正15年に下条氏が没落した際、家老の下条志摩一族は討手に追われ、逃走中に自害するが、それを聞いた志摩の老母が、深見の淵に身を投げたという話が残っている。妙令の美姫が尋ね来て、蛇となり入水すると、にわかに晴天かき曇り、猛然と雷雨が起って、たちまちにして大淵となったという伝説ともつながるものであろう。地殻変動以前の深見の池については、小さな淵だったといわれるだけで、その実相を知ることにはできないが、このことからある程度の大きさをもつ湧水池であったことはわかる。

大変動で七淵が生じたように、この地は古代から湧水の多いところであり、大山田神社が早稲田神社同様に田の神・農業神であったことを考えると、かなり早くからの地に水田が開かれていたとみることができる。当然弥生時代の遺跡があってよいはずであるが、今のところ先年池端の字ハネで弥生土器片一片を拾ったのみである。地殻変動で遺跡がこわされてしまったのであろうか。

地殻変動の際、深見一帯の様相はかなり変わったと思われるが、池の端東南方一帯（字フチバタ字イケのハタ）からは、中世の須恵器片・灰釉片・山茶碗片、などの他、近世陶器が多量に採集



深見の池に埋没したために現在地に移されたとされる深見神社 今も池山田
明神も合祠する。右側の石柱に藍圖祭・賦無形文化財指定の文字がみえる。



深見の祭り 例年7月24日が宵祭り、戦時中でも花火を絶やしたことがなかった。池に筏を浮かべて神事を行う。池に花火が映え、筏から笛や太鼓の音がひびいて、夏の夜に風情をかます。県無形文化財の指定を受けている。

されている。池の北方一帯は日向きもよく、やや急斜面ながら居住地に適する所であるが、ほとんど遺物はみつからない。地殻変動で北側の池端にあったお宮が池に埋没してしまい、附近に字スワノミヤの地名を残しているが、北側の方が変動が大きかったであろう。

諏訪神社は深見の池より北方上約300mの山腹に移され、夏の例祭には、深見の池に筏を浮かべて神事を行い、池端から打ち上げる花火が四方にこだまし、水に写る。県無形文化財に指定され、深見の祭りとして近在に知られている。

(松 沢)

参考文献 下伊那郡史 4巻, 5巻, 6巻

伊那史料叢書(四)

関伝記

下条記

大下条村誌



2 图 早期都城规划图

Ⅲ 調査の結果

1. 早稲田遺跡の位置とその概要

早稲田遺跡は、下伊那郡阿南町大下条西条にある。下条山脈の南東端に位置する弁当山(981m)の東山麓に形成された崖錐状の扇状地上にある。山麓から千木沢右岸を通り小野・深見の低地にかけて相当の傾斜地形で続いている。その先端は、南沢とその支流によって細長い扇状台地が二つに分かれている。国道151号線上方の山麓扇状地から二つに分かれた台地端まで有力な遺物包含地である。標高は山麓でやく600m、台地端は510mを測り、水平距離450mで80m以上の比高を持った傾斜のきつい扇状台地であることがわかる。別の見方をすると、北は田上から半僧山へ続く丘陵、西は弁当山に続く風越木の山地、南は大日山から城山へ続く丘陵状の山地によって三方を囲まれ、東は傾斜しながら深見の低地へ開口している。

地籍の北側山麓下、井戸沢右岸のテラス状台地に、国史現在社である式外社早稲田神社が位置し、その東に急傾斜地をはさんで続く扇状地や、南側の扇状地には早稲田神社に関連する摂社・末社があったことが伝えられ、「神宮寺」の存在さえ推量されて、その古跡を物語る古字も多い事は、松沢の報文にある通りである。

早稲田部落を三方から取り囲む様に立地す山々の丘陵には、早稲田地籍や深見の里を見下す様に西北から矢草城・八幡城・上田城の城跡が弧を画いて並び、北東には、深見半僧山の山麓には誓山と呼ばれる所がある。多くは関氏に関連する古跡であるが、下条氏にまつわるものもある。東側へ細長く開口する所は低地で、そこに深見池もあり、自然湧水、温水利用の肥沃な水田地帯を控えている。地形的に恵まれた所ではないが、気候は温暖、地味肥沃、水量豊富で水田耕作に恵まれた条件が多く、古くから開けた重要地域の一つで、下伊那史第四巻では詳しく取り上げている。それに反して考古学的には殆んどなされていなかった。信濃考古総覧によるとこの地域の出土遺物は、縄文時代中・後期から弥生後期、平安時代の遺跡と記録されている。この範囲ははっきりしないが、現在の興亜電工阿南工場敷地からその東の傾斜面に続くヒカゲ地籍が包蔵地とされていたと考えられる。今回の発掘調査と共に実施した早稲田地籍全域にわたる表面分布調査の結果は、大下条の遺跡分布、調査の経過にある様に、遺跡の範囲は早稲田地籍の殆んど全域に広がり、時期別遺物は、縄文時代前・中・後・晩期、弥生時代中・後期、古墳時代後期、平安時代、中世の各期にわたり、その中で、特に縄文時代晩期と中世期の遺物の特に多いことが明確になっている。表1の遺跡一覧表17の早稲田遺跡内地籍別出土遺物表のように各期の遺物の多いことがわかる。三地域に分けて説明すると次の通りである。

- 1) 早稲田神社周辺(寺尾、三島山、宮後、宮下、森下、上溝、街道下、宮ノ前)

古字図によると、早稲田神社の裏山は寺尾、神社境内は三島山、北側は宮後、東側の緩傾斜面（試掘地域、発掘調査地域）が宮下、旧道から現県道までが上溝、宮の前、街道下、南側が森下で、どの地籍からも中世を中心とした遺物の発見が多い。神社を境にして後は急傾斜、前側は寺垣外にかけて緩傾斜地形と変わり、遺跡の中心のひとつである。この中で遺物量の最も多い所は宮下で前述のとおりである。寺尾で発見された古銭は、以前市村威人先生によって学界紙に報告されている。（五銖銭から至大通宝まで）現在古銭はその一部を除いて、常滑焼の容器と共に早稲田神社の倉庫に保管されている。他地籍からの表採遺物の時期、種類は、遺跡一覧表（第1表）、早稲田地籍古字図を参照されたい。

2) 南東扇状台地（清水、モモ田、坊主畑、門前、久保畑、日ナタ畑、ハネ）

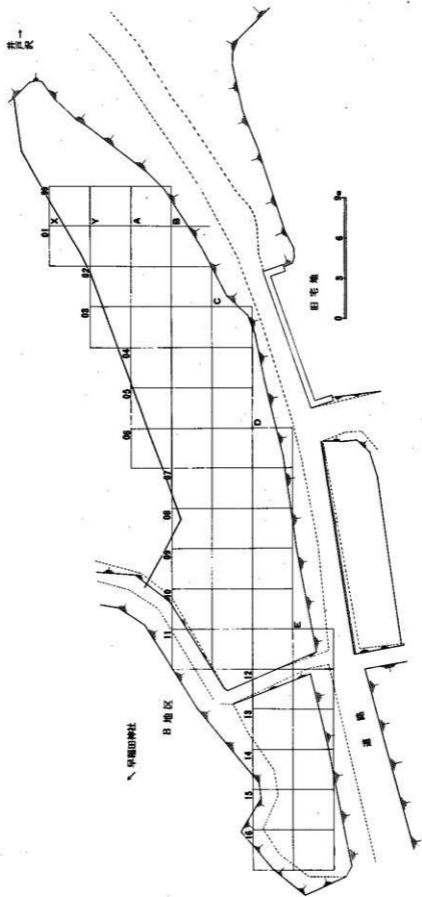
この地域は、早稲田神社の南、現在の151号線の上下から、その下方県道並いと南沢に接する一帯で、広い範囲で、早稲田部落の主要部分を占めている。上方は北東に向けて相当の傾斜を持ち、国道下はだんだんと緩傾斜し、東向きの台地となって南沢に臨んでいる。古字図を見ると、旧街道が曲がりながら通過し、古い集落の中心部と想定される一帯である。表採される遺物の種類は多く、縄文時代中・後期、弥生時代後期、平安、中世、近世にいたる範囲で量も多い。これらの地籍のうち、出土量の多い所は、ハネ、久保畑、坊主畑、門前で下方の台地端に近い所である。国道151号新路線は、この台地を横切するため、先述の早稲田神社前のほか、ハネ、日ナタ畑、久保畑等有力な遺跡地帯にかかっていることに注目したい。久保畑では上記遺物のほか、縄文時代中期土器片、石鏃、鏃石、弥生時代土器片、中世陶器片も多く、北側の興亜電工の造成地に続く日カゲと共にこの地域の有力な包蔵地の一つとなっている。なお、県道上に権現森の水田地帯が現存する。早稲田神社と坊主畑・門前に関する緩傾斜面で遺物の存在が予想されるが不詳である。ここを中央の低地として、早稲田神社周辺は東南向斜面、南側は北東斜面であることに、注意が必要である。

3) 台地先端の遺跡（寺垣外、猫カイト、日カゲ）

大きくは、北の井戸沢、南の南沢にはさまれた早稲田神社前から緩傾斜で続く扇状台地の先端部に当るが、中央に前田等の水田地帯があって、二つの細長い台地に二分されている。北は井戸沢右岸の寺垣外、猫カイトであり、南は南沢の支流左岸のハネ、日カゲである。両地域とも縄文時代中後期から、弥生・古墳・平安時代・中世と幅広い遺物散布地である。

2 調査区の設定

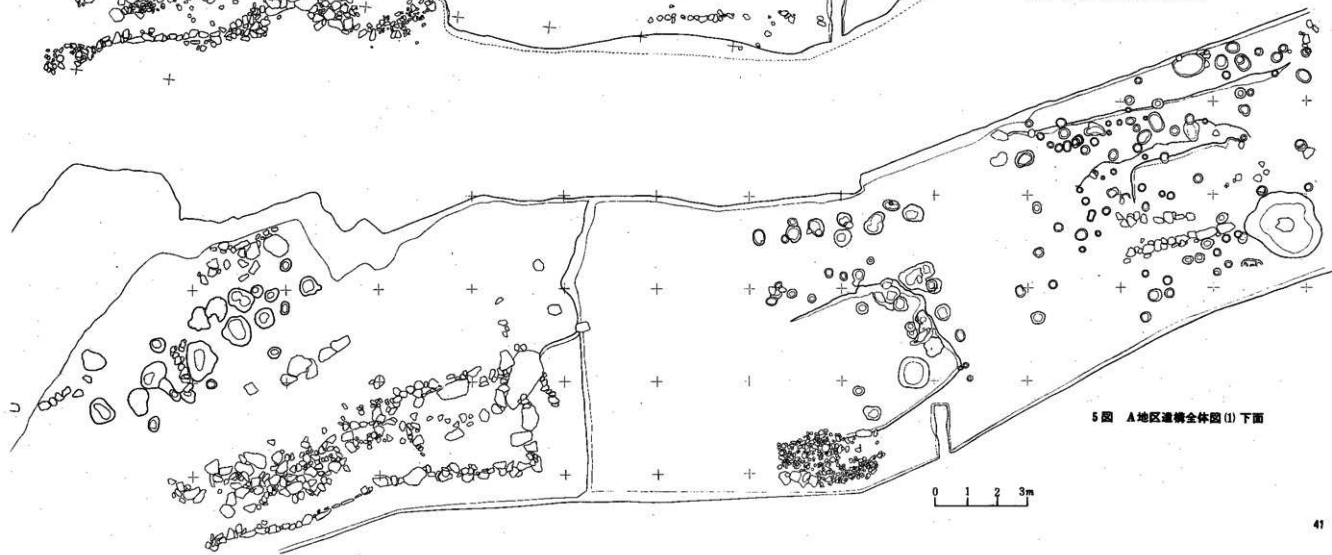
神社前の上段をB地区、下段をA地区としてグリッドは南北に添って3mで設定した。（第3図）第4・5図はA地区遺構全体図の上・下面である。



3 図 調査区 (A地区) グリット設定図



4图 A地区遺構全体図(Ⅰ)上面



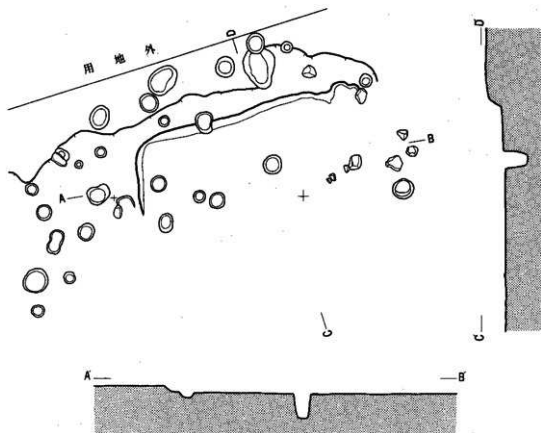
5图 A地区遺構全体図(Ⅰ)下面

0 1 2 3m

3. 遺構と遺物

(1) 縄文時代晩期の竪穴

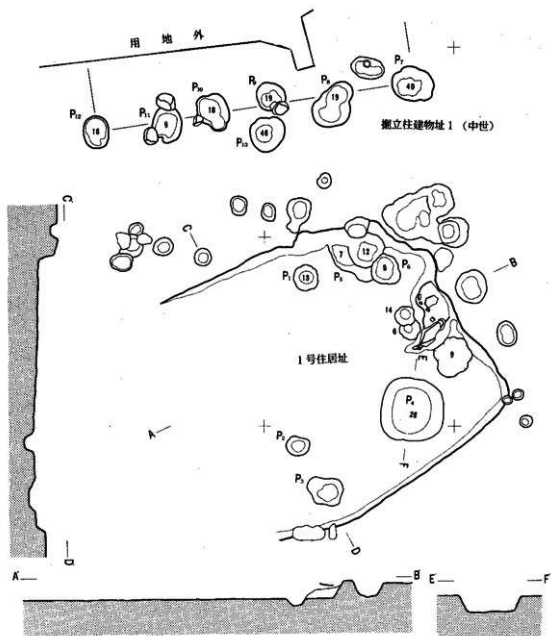
縄文時代晩期の竪穴はA地区北下層にあるが、西壁と南壁一部の検出で炉址などの検出もなく住居址として把握するに至っていない。覆土中に条痕文土器片・石器類の分布がみられ、該期の何らかの生活遺構と考えられるものである。竪穴プランは不明であるが、西壁部は3.6m余の長さを測り、壁高は20cmで小規模な竪穴であったことが窺われる。床面は平坦で良好、壁面もしっかりしている。床面および周囲にある柱穴が本址に伴うものかは不明である。飯伊地方では検出例のさわめて少ない縄文時代晩期の遺構として注目される。



6 図 縄文時代晩期竪穴

(1 : 60)

(2) 平安時代の住居址



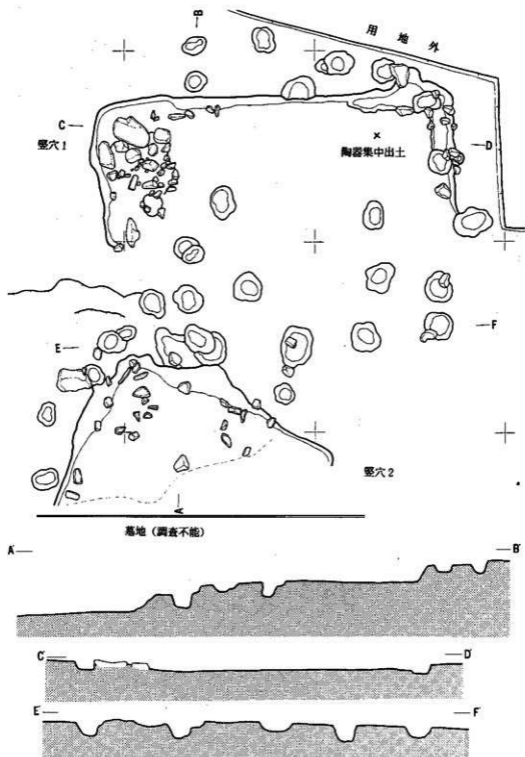
7 図 平安時代住居址 (第1号住居址)、中世掘立柱建物址1

(1 : 60)

平安時代の1号住居址はA地区中央下層にある。本址は礫を多く含んだ地山の黄色砂質土に掘りこまれた竪穴住居址であるが、南壁については検出できなかった。規模は東西4.3m、南北4.4m余の不整形プランを有し、主軸線は南北方向より30度西へずれている。壁高は東西北壁それぞれ12cm、20cm、19cmを測る。壁・床面は地山の礫が露出し不良である。柱穴状のピットは7個ほどがあるが、いずれが本址に伴うものか、また柱穴となり得るのか不明なものが多い。北壁中央にはカマドがあるが潰れており、焼土と袖石一部の残存である。カマド南東床面にある小竪穴状の大形ピット(P4)は本址に伴うものである。本址からはカマド上部より出土した無文の土師器壺の他、土師器坏、須恵器坏、灰釉陶器小片が出土している。出土遺物からみて平安時代中頃、9世紀代の住居址と推察される。

(3) 中世の竪穴 (8図)

中世の竪穴はB地区にあり、早稲田神社の境内で参道に隣接した位置である。竪穴2基(1・2)が重複した状態にあるが、新旧状態ははっきりしない。竪穴1は西上部にあるもので、西壁と南・北壁の一部の検出であり、竪穴の全プランは不明である。南北幅は5.8mを測る。壁面や床面には地山の礫が露出し不良である。北コーナーには周溝状の浅い溝があり、南コーナーには一定範囲に集石を伴うかたまりがある。カマドなどの施設や火床はない。本址の周囲や床面上には多くの柱穴状ピットがあるが、本址に伴うものか、またどのように対応するのかは不明である。竪穴2との間にある5個のピットは南北に直線状に並び西壁と平行し、その長さは5.5m、ほぼ3間を示す。これに北壁下の4個のピット(3.8m、2間)がかろうじて直交する程度である。北コーナーに近い部分から完形および破損品の陶器類を集積させた部分があり、瀬戸系の片口鉢をはじめ山茶碗・六器・花瓶などの中央に鉄製の「磬」(けい、仏具)が置かれていた。これらの下部には栃の実の炭化物、鉄礫が置かれており、何かの事情で埋納あるいは遺棄された様相を示した。鉄製磬の出土は全国的にも稀で、早稲田遺跡の重要性をさらに高めるに至っている。磬は形態より室町時代のもので、陶器類の多くは室町時代でも若干古い南北朝期の所産と考えられ、竪穴はこれ以降のものとなる。早稲田神社に関連する何らかの建物が存在したものと推定している。竪穴2は1の東に接し、西コーナーと北・西壁が検出されている。東半部は墓地のため調査不能である。北壁は3.7mを測り小形の竪穴である。覆土からは中世陶器片や古銭等が出土しているが、西コーナーによった床面直上より平安時代の土師器坏の完形品が伏った状態で出土しており、伝世ということも考えられるが平安時代住居址の可能性もある。



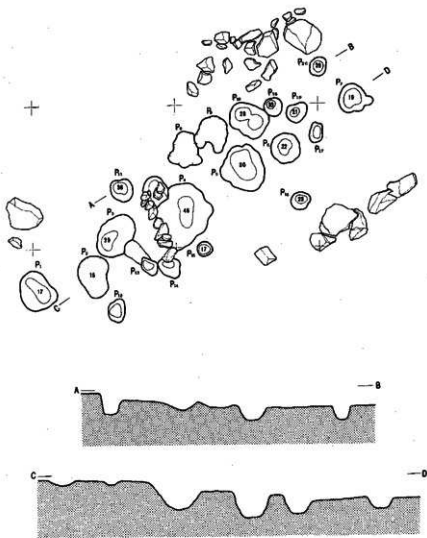
8图 B地区中世竖穴1·2

(1:60)

(4) 中世の獨立柱建物址 (7・9圖)

獨立柱の建物址とみられるものはA地区中央(下層)に一枚(獨立柱建物址1)と、A地区南の石垣遺構上に一枚(獨立柱建物址2)ある。

獨立柱建物址1は平安時代の1号住居址西にあり(7圖)、礫を多く含んだ地山の黄色砂質土層に軸線をほぼ南北にして直に5.5m(梁行3間)の間に6個の柱穴を掘り込んでいる。本址は西の用地外へのびているようであり、桁行の規模は不明である。柱穴は周囲にある他の柱穴より



9圖 中世獨立柱建物址 2

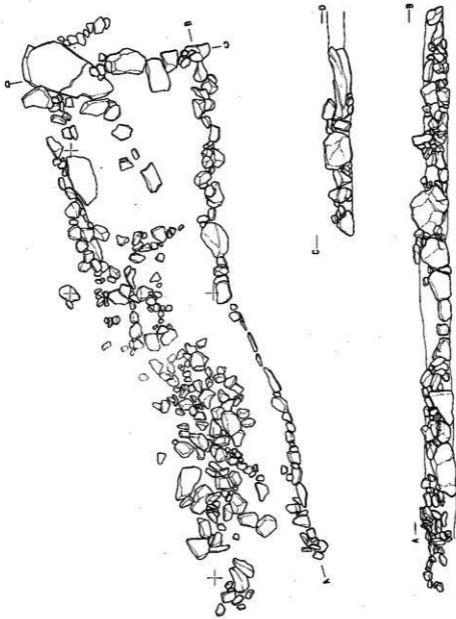
(1:80)

平面規模も大きく比較的そろっている。深さは9~40cmと一律でない。本址の北端の柱穴は40cmと最も深さがあるが、この中より花瓶と炭化種子(栃の実)が出土した。花瓶は灰釉がかかり、三筋が刻まれ、これはB地区の中世堅穴1号から特異な状況で検出された陶器群のなかの花瓶2点と全くの同一品で、同一窯製品と考えられ、またこの陶器群も下面に栃の実の炭化物を伴っていた事実からしても両遺構の間にはきわめて密接な関係が求められる。B地区の堅穴遺構ともほぼ同時に何らかの建築物が存在したことを示し、ほぼ15世紀代の遺構と推察される。

掘立柱建物址2は後述するA地区南の石垣遺構上にある。本址も地山の礫を多く含む黄色砂質土層に掘り込まれている。建物址1に比較してピット個々に斉一性がなく、配列も不明である。最も大きな規模をもつP4はその掘り方の南縁部に9個の礫を意図的に直線状に並べている。本ピットのみ内部より陶器片(甕片)が1点出土しており、このピットはあるいは柱穴外の用途を考えた方が妥当かもしれない。本址は石垣遺構上であり、検出した柱穴の東方向は石垣を積んだ部分への埋土となっており、柱穴状のピットは地山部分にしか検出することができなかった。石垣遺構が基壇状の性格を有する点から、規則性には欠けるがこの上に何らかの掘立柱建物址の存在を想定した。

(5) 中世の石垣遺構

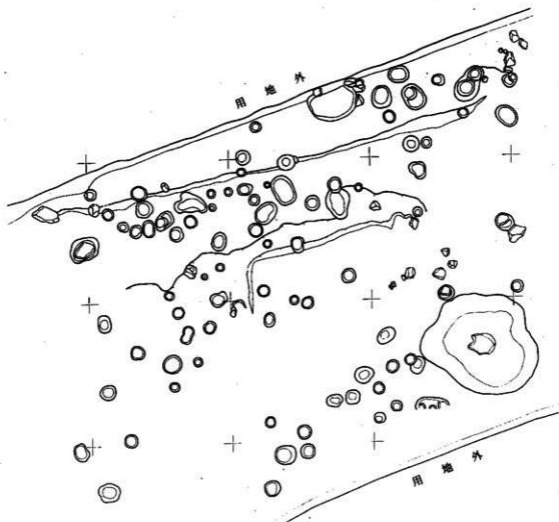
石垣遺構はA地区南にある。本遺構北半部の上層(耕土下)にはおびただしい小礫が集石され、この下部にやや蛇行する石垣遺構が南北方向に11mにわたって検出され、この面の東側を南北に通っている古道と平行している点も注目された。石垣遺構の北部はL字状に折れ、西方向へさらに4mほど続き、全体的に基壇状の平坦面が構築されている。残存する石垣の高さは65~80cmであるが、部分的に石が抜かれている部分もあるようである。整った石垣とは言えないが、大小様様の石を巧みに積み重ね素朴ながら力強い石垣をつくっている。基壇状の面には掘立柱建物址の他、礫群や巨石が存在し、相当規模の構造物が存在したことを示している。礫群は却土の折投げこまれたものと考えられるが、割られた巨石は礎石ともあるいは何か特殊な目的のため置かれた状況を呈している。最も大きな割石は2.5×1.4mもの大きさがある。上部礫群から基壇状の面までの間からは多くの遺物が出土している。陶器関係では灰釉平碗・天目碗・皿・播鉢・片口鉢等室町時代のものがあり、他に古銭・火打金具・硯なども出土している。なお、この地区から縄文時代中期中葉の土器片4点も出土している。



10圖 中世石垣遺構 (1:80)

(6) 中世の柱穴群

A地区北半部下層にある無数の柱穴状の小ピット群である。地山に掘り込まれた径10~30cmほどの比較的整った円形の浅いピットが多いが、直に通るものや、これらに対応しあうものはなく、どのような性格の柱穴であるかははっきりしない。柱穴群の上層には木炭粒を多量に含む黒色砂質土層で、多量の鉄滓や陶器片が分布し鍛冶工房址の存在が推定されているが、本柱穴群の多くは工房址に伴った可能性が強い。何回も建て替えられた簡単な作業小屋のような建造物が想定される。本址周囲より出土している陶器片・古銭等からすれば15世紀代の遺構と考えられる。



11図 中世柱穴群

(1:80)

(7) 中世の石列

石列とするものはA地区北半部にある。石列の語句については問題もあらうと思われるが、本遺跡の場合便宜的に礎を重ね合わせず平面的に直線を意図して並べたものを石列とし、一定の範囲に礎を重ね合わせて集めたものを集石としている。

石列1はA地区中央の耕土直下に認められたもので、本遺跡では最上層の遺構である。工事直前まで使用されていた早稲田神社前から井戸沢へ向かう小道に面する桑畑(A地区)の東側土手に平行する形(ということはこの古道に平行している)で、正確に南北方向を指して5.8mの間に直線状に礎を並べ、これから西へ1.2~1.3mの間隔をおいて、これと平行する形でいくつかのブロックに分かれた石列があり、さらに西には5.2×1.5mの範囲に礎を平面的に置いている。礎ののっている土層は木炭粒を全く含まぬ黄色砂質土層で、石へいくとこの層はなくなり、石列部分に限り却土されたことが知られる。石列1について想像たくましくすれば、前列の直線状のものは雨落ちの一部、これと間をおいたブロック状のものは礎石のグリ石の一部ともみられ、古道と平行している点も考慮して、何らかの建造物一屋敷址とも考えられる。遺構面が耕土直下と浅いため礎の多くは耕作時に抜きとられたものともみられる。上部耕土からはガラス片などとともにわずかな近世陶磁器小片および唯一点寛永通寶銭が出土しているが、石列面および礎の間からは灰釉平碗・天目碗・灰釉鉢・摺鉢等の陶器片や古銭(渡来銭)が多く出土し、これ等の遺物からみておそらくは近世に至らない時期、ほぼ室町時代終末期の建物址と考えることができる。

石列2はA地区中央の下層にあり、平安時代の1号住居址南上部に一部のり、石列1の却土より間層をおいて下面にある。本址は地山の上に南北方向におよそ6×2mの長楕円形の範囲に小さな角礎を主体として平坦に礎を並べたもので、石畳状を呈している。東縁部には大きき礎が並べられている。礎下部には特別な施設は認められず、どのような施設なのかは不明である。礎の間からは少量の中世陶器片(甕)が出土している。

石列3はA地区北の中層にある。平板礎を主体に南北方向に並列させた石列で、東側石列は長さ3.8m、西側石列は2.6mを測る。両石列の間隔は等しくなく、南側が70cmと広く、北側は30cmとせまい。東西両石列とも礎面は同一レベルで、礎のなかには火熱を受け風化したものもある。東側石列の南東部下層にはきわめて硬く焼け締まり、レンガ状を呈した焼土塊が二ヶ所あり、これにフィゴが羽口を伴っているところからすれば、本址も工房址の一施設の可能性もある。石列間や周囲からは灰釉平碗・天目碗・皿・茶入・摺鉢・甕などの陶器片と、古銭(渡来銭)・鉄洋・骨片が出土している。遺物の大部分は15世紀代、室町時代のものである。

(8) 中世の火葬墓

火葬墓群とみられるものはA地区北部の上層にあり、集石部より骨片を出土したものの6基（火葬墓1～6）、素掘りの墓坑内より骨片を出土したものの2基（火葬墓7・8）の合計8基である。

火葬墓1は2.0×1.3mのほぼ楕円形の範囲に比較的小ぶりな礫を密に集石するもので、礫のわきより微量の骨片を出土している。集石の長軸は正確に東西を示し、礫は特に火熱を受けた痕跡はない。礫下部は木炭粒を多く含む黒色砂質土層であり、この層の中に下部施設を認めることはできなかった。礫中からは磁石片が、周囲からは骨片の他陶器片・古銭が出土している。

火葬墓2は火葬墓1の西およそ2.5mにあり、小ぶりな礫を1.4×0.8mの楕円形の範囲に集石し、これをとり囲むように西側と東側にそれぞれ大きめの礫を置いている。1同様に長軸は東西を示している。集石下部に墓坑のような施設はない。骨片をはじめ陶器片・磁石などが出土している。

火葬墓3～6は小さな単位に小礫を集石するもので、ともに集石は接しあっており、不定形な形状である。集石各々の規模は、3が0.8×0.6m、4が0.8×0.8m、5が0.9×0.6m、6が1.03×0.5mほどである。ともに集石はまばらで密ではない。火葬墓3の西には大きな礫が4個ほど置かれてあり、この部分からはやや多めの骨片が出土している。礫の間や周囲からは骨片をはじめ各種の陶器片と磁石・硯・古銭・石製品が出土している。

火葬墓7は素掘りの墓坑で1.02×0.73mの楕円形を呈し、深さは40cmで底面は平坦でなく東側が高くなっている。墓坑の長軸は南北方向より多少西へふっている。縁辺西・北側には礫5個が置かれている。墓坑内からは骨片に伴って古銭6点と陶器片1点が出土している。古銭はすべて中国渡来銭で、6点の出土は六道銭の慣習を表わしている貴重な資料として注目される。

火葬墓8も素掘りの墓坑で1.20×0.69mの楕円形を呈し、深さは55cm、底面は平坦ではなく、西側が一段低くなっている。墓坑の長軸は東西方向より多少南へふっている。縁辺西側には礫が置かれている。墓坑内からは骨片と古銭、わずかな陶器片が出土している。

火葬墓1～6には埋葬施設が認められないところから墓とするよりは最近検出例が増してきた火葬場とした方が妥当かもしれない。7・8出土の骨片は火葬骨であり、共伴した古銭からして墓坑であることは疑いない。火葬墓群より出土している陶器には灰輪平碗・天目碗・皿・揺鉢・片口鉢・甕・中国青磁などがあり、近世陶器の出土はなく、ほぼ15世紀代のものと考えられる。

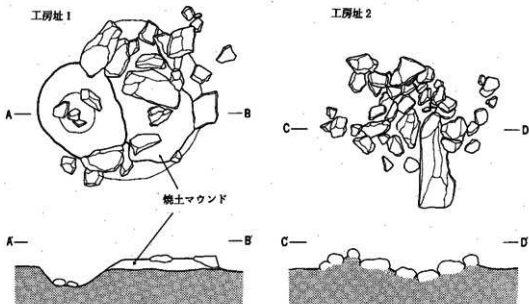
(9) 中世の工房址

A地区全面に鉄滓が分布し、調査区全体が工房址の性格をも有しているものとみられているが、このなかでも特に集石を伴う遺構は鉄滓の分布も濃厚で、フィゴの羽口片等の鍛冶製鉄の性格をもつ遺物分布からして、A地区北半部分が工房の中心部ではなかろうかと推察している。

工房址1は規模110×70cm、厚さ10cmの焼土マウンド上に角礫による集石部と、その南側に75×63cm、深さ16cmの楕円形小墜穴を伴うものである。礫や小墜穴に特に焼けた痕跡は認められない。焼土マウンド上やその周囲から鉄滓・フィゴの羽口片が出土し、鍛冶製鉄に関する工房の一施設と考えられている。周囲からはこの他茶壺の蓋をはじめ各種陶器片・古銭が出土している。

工房址2は工房址1の南3mにあり、1よりややレベルは下がるもやはり角礫を集石させている。本址の場合地山に直接礫を集石させ、焼土マウンドや小墜穴は伴っていない。1同様鉄滓の出土は多く、下部遺構も認められないため工房址1に関連する遺構と考えている。

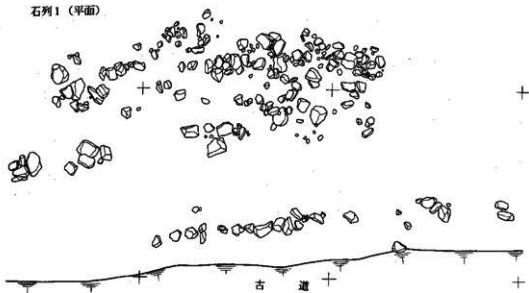
これら集石遺構の東側には硬くレンガ状に焼け締った焼土塊が存在し、工房址1・2、焼土塊を結ぶ一帯にフィゴの羽口の出土が多かった点や、調査区全体に焼土や木炭粒が分布している点等から、鉄製品の出土はほとんどないがほぼ15世紀代に相当規模の鍛冶製鉄に関わる工房が営まれていたことが予想される。
(酒井)



12図 中世工房址1・2

(1:30)

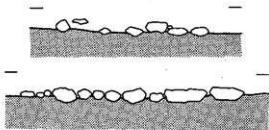
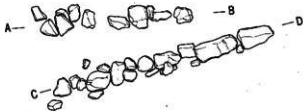
石列1 (平面)



石列2 (平面)

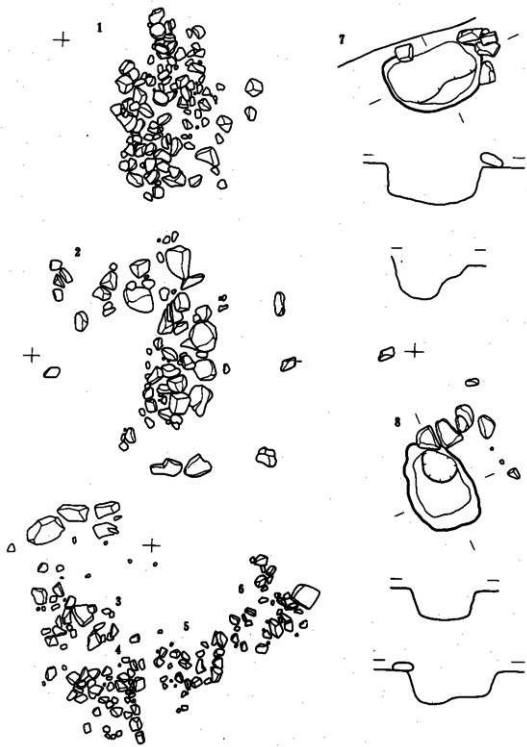


石列3



13圖 中世石列1・2・3

(1:60)

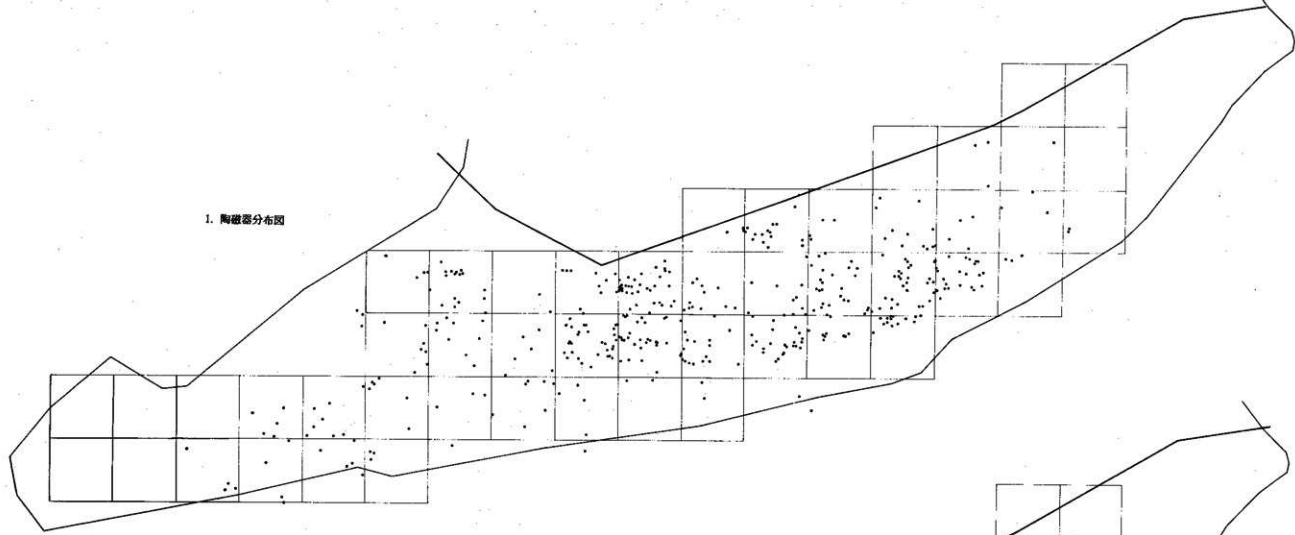


14图 中世火葬墓 1~3

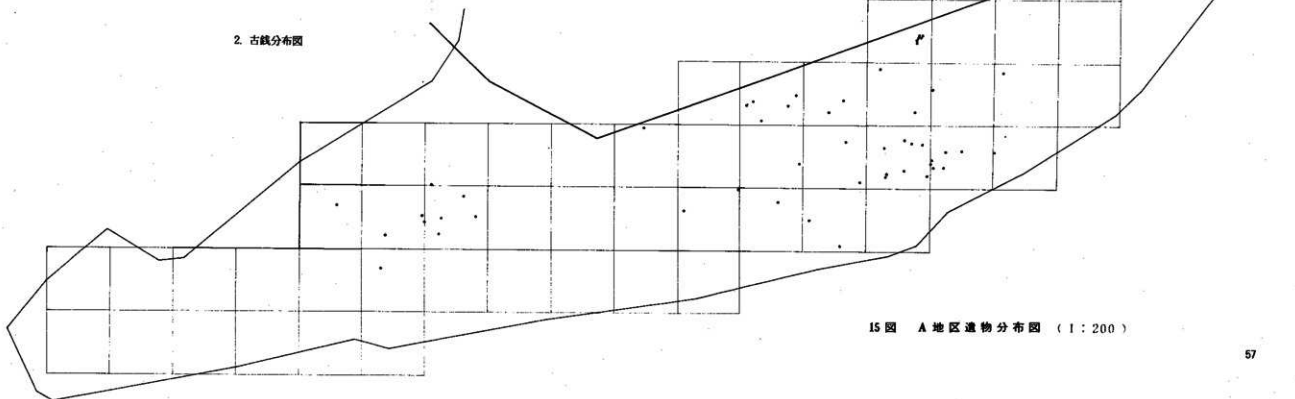
(1:40)



1. 陶磁器分布図

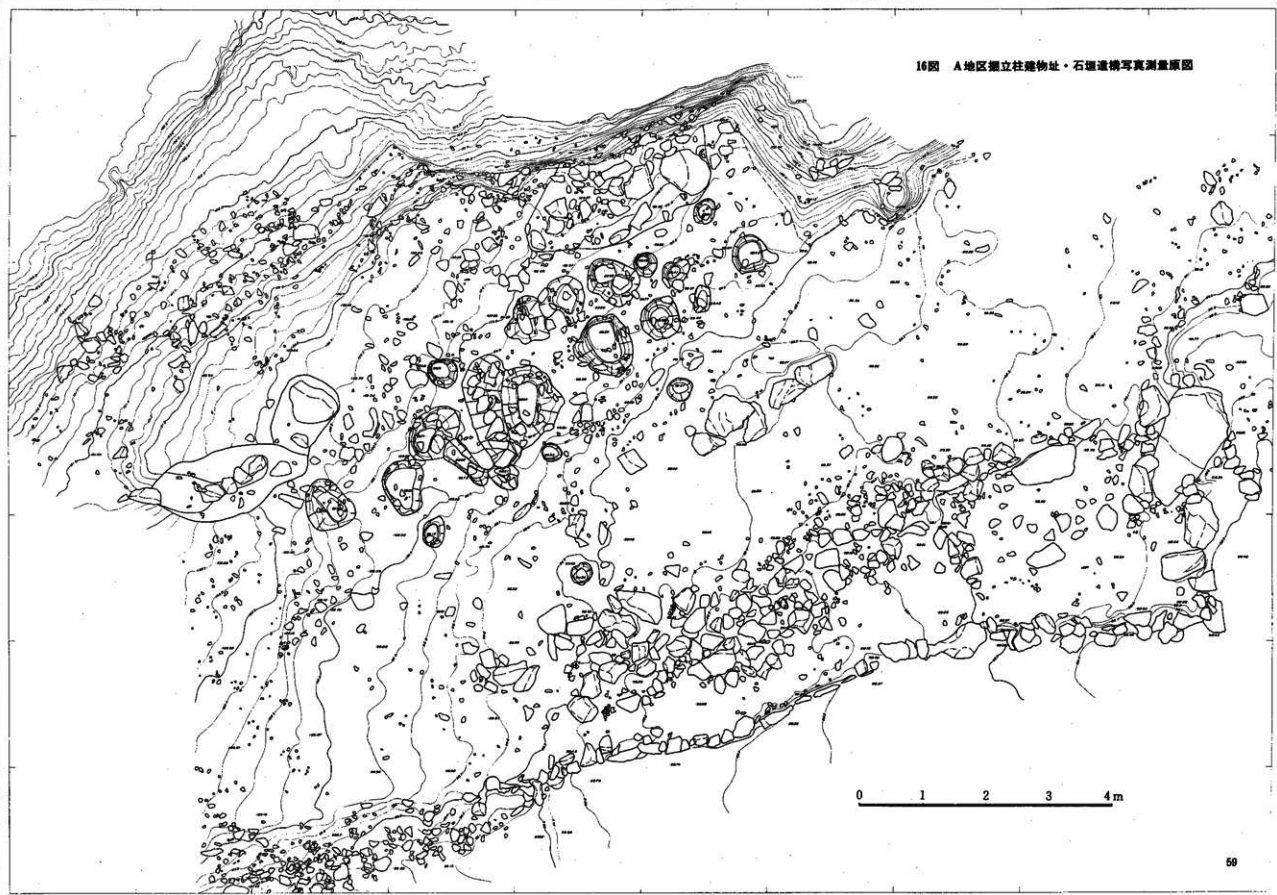


2. 古銭分布図



15 圖 A 地区遺物分布図 (1:200)

16图 A地区独立柱建物址・石垣遺構写真測量原图



IV 調査のまとめ

1. 早稲田遺跡(宮下地籍)発掘調査の意義

宮下地籍の発掘調査の結果は、前述の報文の通りであるが、時期別遺構をあげると次の通りである。縄文時代晩期の竪穴がA地区北部に、土器集中区がA地区の中ほどで検出された。共に上層の中・近世遺構による攪乱もあって不明確な所が多いが、伴出土器は条痕系土器が大部分である。弥生時代のものは殆んどなく、次の古墳時代のもは、須恵器の高坏および短頸壺片が出土してはいるが、遺構は確認されていない。平安時代の竪穴住居址が一軒、A地区の中程の地で検出されている。灰軸陶器片はA地域各所から出土して、用地外、そう遠くない所にこの期の遺構があると予想される。遺跡の中心は中世期のもので、遺物も遺構も多い。B地区(上段)の竪穴2基、A地区南部の石垣状遺構、掘立柱建物址、その上層を覆う群葬、中央部にあった掘立柱建物址と、建物礎石のグリ石と雨落ち溝と思われる建物址の一部(石列)、焼土や多くの鉄滓を伴出する石積み遺構、北側一帯には、焼土や灰層、鉄滓群、焼石を含む配石や石列遺構と、数多くの柱穴群が複雑に入り組む遺構群があって、工房址と名付けている。「ふいご」の羽口が数枚、焼け固った凹地等の発見もあって、鍛冶工房址と推量した所がある。更に北側には、人頭大の配石を持つものと、浅い土壌を穿った火葬墓8基と、瀬戸灰軸の瓶子と古銭出土地等、墓地群が発見されている。更に土壌内に柄の実の炭化物と共に御神酒徳利状の花瓶の出土した土壌等多岐に互っている。遺物については、青磁片(中国陶磁)、山茶碗、瀬戸灰軸の片口、坏、皿、瓶、瓶子、花瓶、天目碗から播鉢等種類も多く、土師質、須恵質の鍋、甕、鉢、坏等も含まれ、中世遺構の重複が想定される。

これら諸遺構の中で特筆されるものは、縄文時代晩期の遺物多量出土と竪穴の発見、中世遺構の中のB地区の竪穴2基と、A地区南側の石垣遺構と掘立柱建物址、その上層の群葬、その北側で検出された、建物址の一部と想定される石列と雨落ち溝の石列と、その西側に並ぶ掘立柱建物址である。縄文時代晩期土器片多量出土は、この宮下地籍だけでなく、同遺跡ヒカゲ地籍では、後晩期土器片の表採が多く主要地区の一つと考えられ、或いはその地続きのハネ地籍も多いと思われる。やがて実施される久保畑地籍と共に発掘調査に大きな期待が持たれよう。土器の種類は、条痕系粗製土器が主体であって、東海地方の権王式と水神平式土器に類似するものが多い。大下条では早稲田のほか、和知野遺跡にも多く、阿南町では、和合や新野にも多い。特に、新野には10遺跡ほどが数えられ、南隣の天竜村には、満島南遺跡のように、後晩期各時期のほか、弥生時代前中期の土器の多量出土地があり、福島地区の北垣外、向方の上の平遺跡があげられる。この範囲は更に広がり、南信濃村の和田の数遺跡、泰阜村大畑遺跡が知られ、西部へ行って、売木村にも、根羽村にもこの期の遺跡が多く、下伊那南西部泉地地域の縄文時代晩期遺跡の広がり

が、近年の大きな話題となっている。この事は、東海系の文化の伝来を物語る事象で、やがて始まる弥生時代の稲作を主体とする農耕文化の先進要素の移入経路を推測する遺跡群となるわけである。同じ晩期といっても、新旧諸形式の文化があるわけで、天竜・矢作川を遡った経路、奥境に並ぶ峠越えによる文化移入の経路等々究めたい途は広いが、この課題を探る重要資料の一つとなり得ることであろう。

次の問題は、調査例の少ない中世諸遺構が多く発見されたという事だけでなく、国史現在社の早稲田神社の境内又は境内隣接地から、早稲田神社そのものの遺構でないにしても、1,2号竪穴、石垣遺構と堀立柱建物址、石列と堀立柱建物址は、中世期末における早稲田神社に関連しそうな重要遺構と考えられることである。1,2号竪穴は早稲田神社の境内地で、しかも現在の参道に隣接する位置にある。1号竪穴は5.8×3.5の方形プランでこの期の竪穴としては特に大きい。大きいために、壁外と壁直下に2こ対の柱穴が並び、屋内には柱穴を持っていない。覆土下層に焼土塊が僅かにあったが、生活を証する火床がない。完形又は一括遺物は、ほぼ中央部の片口完形2こと、北隅の片口、環、碗、小形の花瓶と鉄製「罎」の一括出土である。一括出土した場所は、浅く掘り込まれた凹みの中に柄の実の炭化物が充満し、その上一括置かれていたもので、特殊な建物の様相を示している。「罎」は仏具、片口が5個体、御神酒徳利状の花瓶2こ、のほか環、碗はあるが、日常雑器はごく僅か、しかも柄の実の炭化物が気になる。A地区下層にあった堀立柱建物址Iのピット又は土壌から出土した柄の実の炭化物に混って出土した同型の花瓶の例もあり、神社にまつわる要素が濃いと考えたい。陶器の多くは瀬戸灰釉系のものであるが、瀬戸・美濃焼としては胎土が柔かく或いは地元産かと思われるが、立証の根拠はない。覆土中から出土した皇宋通宝から推して室町時代後期の所産と考えている。2号竪穴はやや小振り、時期は同じ頃と思われる。この竪穴にも焼土は見つかっていない。神社の関連性の究明は、南隣りに位置する参道（道路用地内）の調査結果が重要な鍵を握っていると考えられる。

A地区（下段）南部、10m×20mの範囲は、東面傾斜地で、早稲田神社境内から階段状に耕作地が造成されていた所で、南側は、砂礫混りの北面傾斜地で、参道脇の近世の観音堂址と伝えられるテラス状小台地の近世建物址の他は、遺物も少量で、中世遺構はなかった。ここから北側一帯は、大きなものは1m以上に及ぶ平状石の積み重ねが見られ、北へ行くに従って人頭大石から拳大石の累石が並ぶ所で、北は急激に落ち込んでいた。上面を礫群と呼称している。この礫群内には、山茶碗、天目碗、そのほか瀬戸系陶器・常滑系陶器片等の出土が多く、土目の多い所には焼土があり、古銭出土も20枚ほどに及ぶ。石垣遺構は東側に長く、北側はL字に折れ曲って基壇状地を支えている。L字状に構築された中側（南側）は、傾斜も緩やかで、石は大きめで、黒褐色土の露出部が多いこと、この露出部に所々焼土がある。焼土周辺から古銭出土が多い。大型石の中には平状のものが目立ち、中には大石を割ったものが数mを隔てた位置にあるものも4こが数えられ、何らかの目的による人為的加工があったと考えられる。平状石も規則的といえ切れないが、かと言って全く不規則でもなく、配列をうかがわせる。東側の石垣に平行して1mほど内側に（西側）石列が並んだり、やや大形の石が周囲に残り、中の石が取り除かれたと思われる所もあ

ったので、上面の群礫を取り除くと、石垣遺構悉いの石列は、地山に密着する礫塊であり、西側にテラス状の広場があり、その奥に大形礫石の堆積がありそうなので、西側を排土したのが、第4図の下層面の遺構図の通りである。

西側は急傾斜で落ち込む地形であるが、斜面には起伏が少ないことから、意図的に削り取られた様で、この急崖の上に、先述の1・2号竪穴が位置をしている。急崖下には、やや規則性を欠くが梁行5.5mやく3間(桁行不詳)の堀立柱建物址があり、北々東に面している。その前に2mほどのテラス、その前に基盤密着の列状石群があり、石垣遺構に続いていた。確証は無いけれど、石垣遺構に取り囲まれた範囲は南北14m、東西10mあり、一連の遺構群と見られることから、堂址又は早稲田神社関連遺構と想定したいわけである。早稲田神社が平安の昔から現在の位置にあったとすれば、その境内は更に広いであろうし、摂社、末社、古寺の存在を推量する松沢の古字考にある如く、各所に古社寺の所在を考えてよい筈である。又、早稲田神社に関連はないにしても、夫々の中世遺構の規模は大きく、遺物も逸品揃いであることから、只単なる庶民生活の諸遺構ではなかろうかと思われ、関氏一族との関連も考えてみたい所である。

この中世遺構の性格究明は、やがて実施される「ハネ」、「久保畑」地籍の発掘調査のみならず、その結果によっては、重点地域を決めて総合学術調査が望まれる所で、阿南町行政当局の英断も期待したい所である。

2 早稲田遺跡の特長

早稲田地籍全域の分布調査の結果、急崖の山地帯、小河川の走る凹地を除く早稲田地籍のほぼ全域が遺物散布地であり、確認された縄文時代中・後・晩期、弥生時代中・後期、古墳時代後期の遺物出土もさることながら、宮下地籍の発掘調査結果と同様、平安時代後葉、中世、近世初頭の遺物散布の量も多く、範囲も広いことである。その場所が古字とも関連があり興味深い。

早稲田地籍の地形は、中央部権現森地籍の水田地帯からその下方の南沢支流域を低地として、南北の二つの台地に分かれ、早稲田神社等古社寺地域と、古い集落の中心がそれぞれ分かれて立地する様に思えるが、今後の調査に俟つこと大である。平安時代からこの地に連絡として鎮座される国史現在社がある以上、神宮寺があったであろうし、摂社・末社があったであろう。明治末年に早稲田神社へ合祀されたという各社の旧地の調査も不可欠になるわけである。いつの日にかと言わず早急な調査ができないものかと常々思っていることは、独りわたしだけではないであろう。

又早稲田地籍を取り巻く山地の山頂又は山麓には、この早稲田や深見一帯の温暖且肥沃な所を拠点とし、夫々居城期間は短いとは言いつら、関氏の居城として順次所を替えた矢舟城跡・八幡城跡・上田城跡があり、それを支える庶民の旧集落があったであろうし、上級家臣団や城主一族の居館址があった筈である。その場所を早稲田の地に求めるとすると、早稲田遺跡内に中世・近

世初頭の遺物の多い事もうなづける訳である。宮下地籍に大規模な鍛冶工房址のあった事も、或いはと思える要素にもなるわけである。又、早稲田神社に残される銚口の銘に刻まれる「岩齋寺」の古跡はどこにあるのか、この地区の草分けの人々が生活した所はどこであったのか、究明したい課題が数多い中で、ほんの僅かな面に接した宮下地籍の発掘調査結果ではあるが、果した成果は大きかった。中世遺跡は各地にあるが、考古学調査が実施された例はそう多くない。遺構のあり方も複雑で集落にしても、工房址にしてもまだまだ未説明のものが多い。ましてや、古社寺に関連する遺構、城郭や居館址にまつわる遺跡の調査は稀である。そのためにも、諸条件の揃ったこの早稲田遺跡をどう生かしていくかは、独り阿南町だけの問題ではなく、下伊那全体の大きな課題であろうと思う。

そのためにもやがて実施される「森下」「ハネ」「久保畑」地籍の発掘調査は調査範囲も広く、表探資料も多岐に亘る。しかも旧集落の一面でもあり、近くに神宮寺さえ想定される所があるので、この調査の持つ課題は大きいと言えよう。

(今 村)

図版1 早稲田遺跡全景（航空写真）



図版2 発掘調査前の宮下地籍



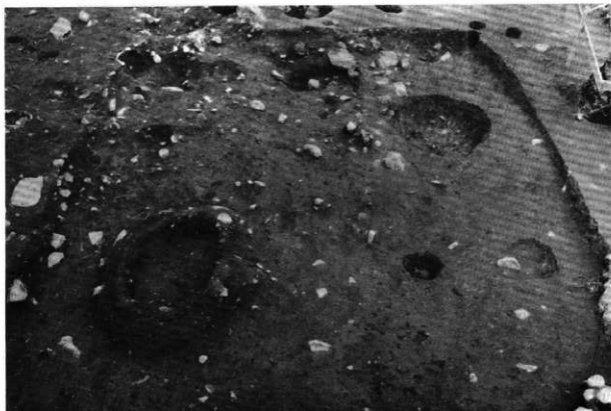
1. 北から



2. 南から



1. 縄文時代晩期竪穴（中央）

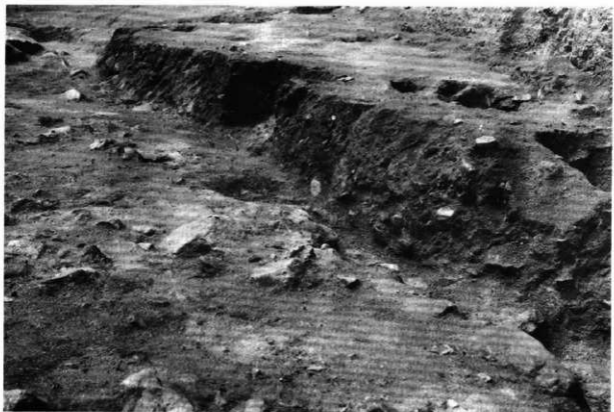


2. 平安時代住居址（1号住居址）

図版4 B地区中世整穴



1. 中世整穴 1(上方) 2(下方)



2. 中世整穴1の西側壁とピット

图版5 B地区中世整穴1



1. 陶器群出土状况



2. 片口



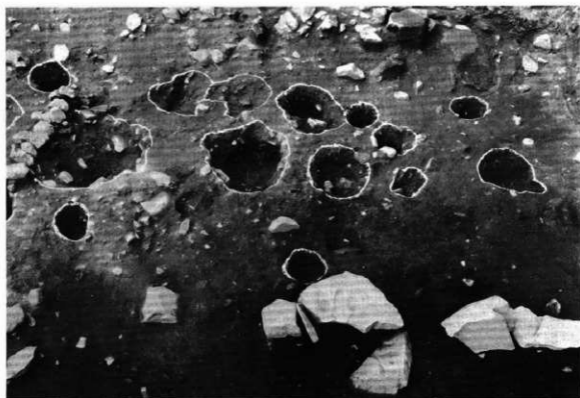
1. 中世掘立柱建物址



2. 小形花瓶の出土状況



1. 真上から



2. 東方から



1. ピットとピット上の配石

2. ピットと配石拡大





1. 石垣遺構と上面礎群



2. 石垣遺構と下面遺構



1. 東・北面



2. 東側面

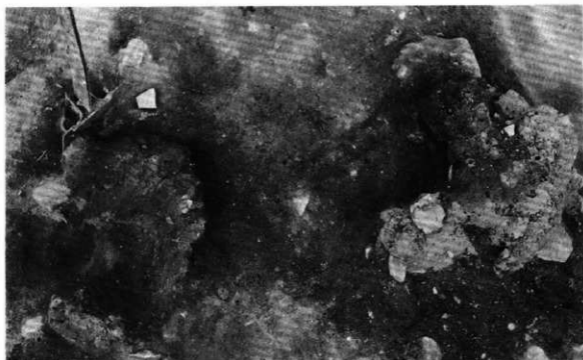


3. 東側の石積

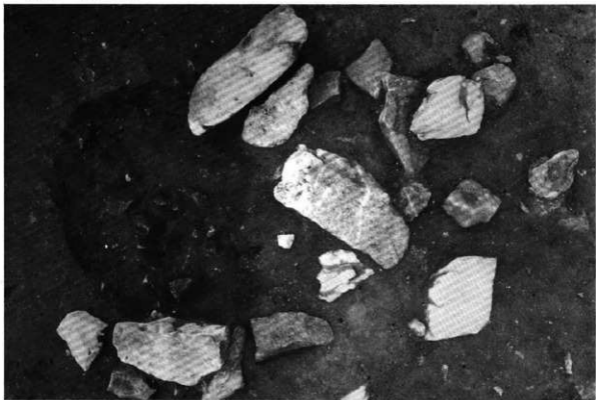
図版11 中世柱穴群と中世と工房址



1. 柱穴群、工房址、石列



2. 工房址 3



1. 工房址 1



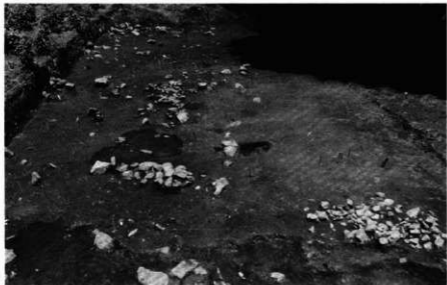
2. 工房址 2



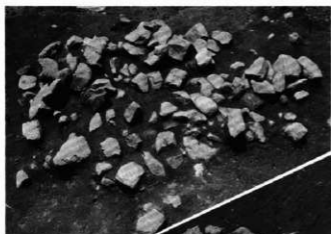
1. 石列 1.2



2. 石列



1. 火葬墓群



2. 火葬墓 1

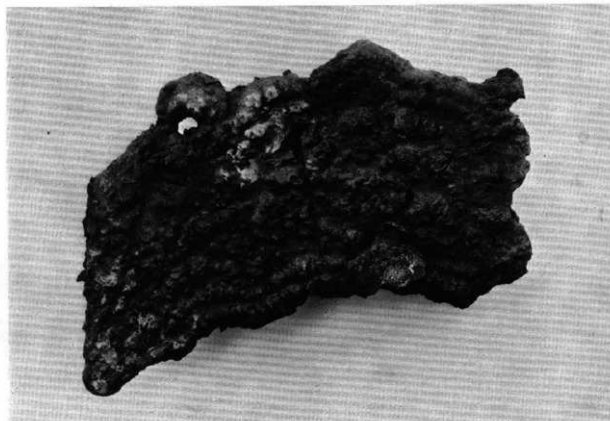
3. 火葬墓 2



4. 火葬墓 3



1. 片口と花瓶



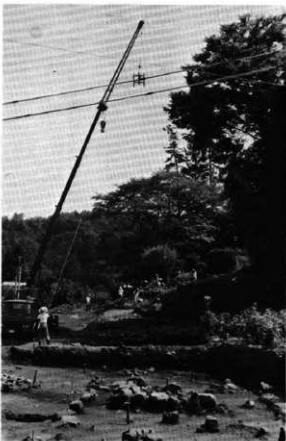
2. 罍



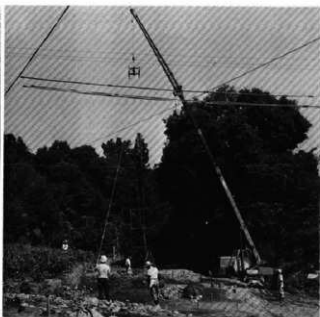
1. 立体カメラ



2. 立体カメラ



3. クレーンでつりあげて撮影



4. クレーンでつりあげて撮影

図版17 調査団と発掘風景



早稻田遺跡出土遺物

早稲田遺跡出土遺物

目次

1. 土層と遺物出土概況	85
(1) 土層 (2) 遺物出土概況	
2. 縄文時代の土器・石器	90
(1) 縄文早期末?土器 (2) 縄文中期土器 (3) 縄文後期土器 (4) 縄文晩期土器 (5) 縄文時代の石器	
3. 古代の土器・陶器	97
(1) 須恵器 (2) 土師器 (3) 白瓷	
4. 平安時代住居址出土土器・陶器	99
(1) 須恵器 (2) 土師器	
5. A地区出土中世・近世陶磁器	104
(1) 白瓷系碗 (2) 常滑系壺・甕 (3) 青磁碗 (4) 古瀬戸瓶子 (5) 鉄軸天目碗 (6) 灰軸平碗 (7) 灰軸皿 (8) 灰軸茶入れ蓋 (9) 灰軸・鉄軸壺 (10) 鉄軸水滴 (11) 器種不明 (12) 灰軸花瓶 (13) 灰軸おろし目皿 (14) 鉄軸香炉 (15) 鉄絵皿 (16) 白瓷系練り鉢 (17) 鉄軸振り鉢	
6. 中世竪穴1出土陶器	120
(1) 灰軸花瓶 (2) 灰軸碗 (3) 白瓷系碗 (4) 灰軸片口鉢 (5) 灰軸行平鍋	
7. 中世竪穴2出土陶器	124
(1) 土師器坏 (2) 灰軸平碗 (3) 鉄軸天目碗 (4) 灰軸灯明皿 (5) 鉄軸皿 (6) 鉄軸碗	
8. B地区出土中世・近世陶器	126
(1) 鉄軸天目碗 (2) 鉄軸豆天目 (3) 灰軸皿 (4) 灰軸片口鉢 (5) 灰軸練り鉢 (6) 灰軸行平鍋 (7) 常滑系壺 (8) 灰軸おろし目皿	
9. 中世竪穴1出土鉄器・鉄鏡	128
(1) 鉄器 (2) 鉄鏡	
10. 早稲田遺跡出土古銭	135
11. 早稲田遺跡出土鉄製品・石製品他	138
おわりに	141

1. 土層と遺物の出土概況

(1) 土層と遺構 (第1図)

A地区は北東面する傾斜地であるが土層は比較的明瞭であった。A地区の層位をその北部、中央部、南部でみれば次のようになる。なお、各土層の厚さは傾斜地のため一定していない。

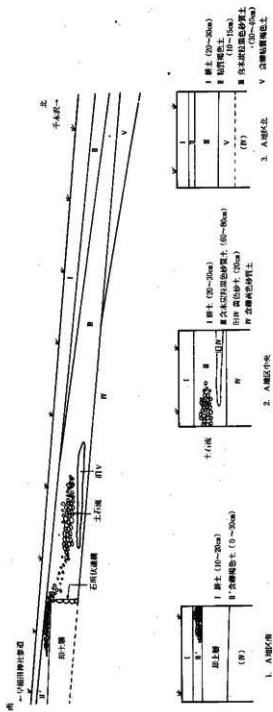
A地区北部においては、耕土層(Ⅰ層、20~30cm)→粘質褐色土層(Ⅱ層、10~15cm)→含木炭粒黑色砂質土層(Ⅲ層、30~40cm)→含礫粘質褐色土層(Ⅴ層、地山層相当)の順で、Ⅲ層中に各時代の遺物が集中した。火葬墓群はⅢ層上面に礫が集石されていたが、火葬墓7の墓墳がⅤ層中に検出されたのを除くと他の火葬墓はおそらく堆積の厚いⅢ層中に墓墳が掘られていたものと考えられ、精査にもかかわらず集石の下部施設を検出することはできなかった。中世とみられる鍛冶工房址や柱穴群はⅢ層中位からⅤ層、晩期竪穴としたものはⅤ層からの検出である。

A地区中央部においては、耕土層(Ⅰ層、20~30cm)→含木炭粒黑色砂質土層(Ⅲ層、60~80cm)→黄色砂土層(旧Ⅳ層、20cm、Ⅲ層中に人為的に却土されたものか)→含礫黄色砂質土層(Ⅳ層、地山層)の順で、Ⅲ層がきわめて厚く、遺物もこの層に集中した。用地西側のⅢ層中には平安時代の1号住居址および中世の掘立柱建物址を覆う土石流の末端と考えられる礫層(Ⅲ'層、土石流)が認められ、また東側には石列3の下面のⅢ層中におそらく中世以降に人為的に却土されたとみられる黄色砂土層(旧Ⅳ層)が認められた。黄色砂土層直下には1号住居址を一部覆う石列2がⅣ層面にある。平安時代1号住居址、中世掘立柱建物址1はⅣ層の地山面に於ての検出である。

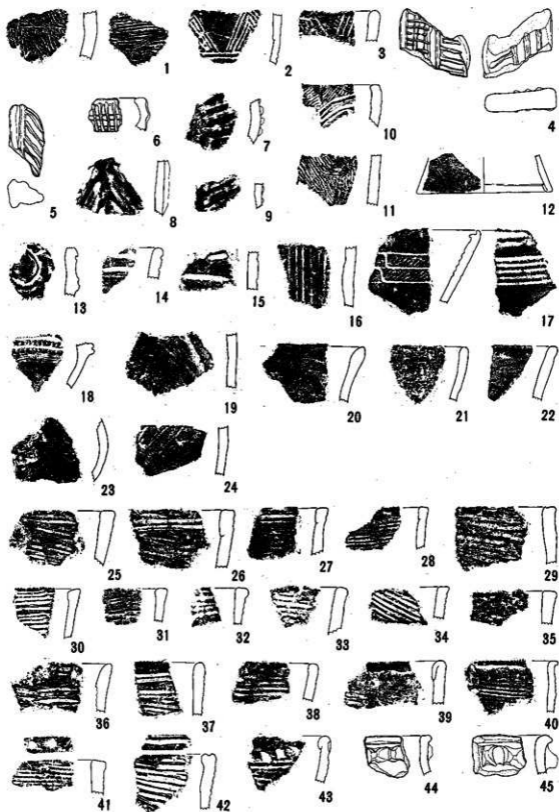
A地区南部においては、耕土層(Ⅰ層、10~20cm)→含礫褐色土層(Ⅱ'層、0~30cm?)→礫層(Ⅳ'層、0~30cm、土石流?)→却土層(Ⅳ'層、最も厚い部分で80cm余、石垣状遺構に却土された人為層)→以下未掘層(地山層)の順による。なお、A地区南部は5m余の比高差でB地区と接しており、近世に至ってであろうが石垣を積んで土手としていた部分を調査したところ、この下面において過去に地山を相当削りこんで傾斜をなだらかにした造成面が確認され、石垣状遺構の背後を広くする意図が窺われた。新しい土手下から造成面までの間は礫の多い砂質土層(地山層に近い)や後の却土であったが、この中より比較的多くの陶器片の出土があった。

B地区の層位はきわめて単純であった。耕土層(Ⅰ層、20~30cm)の直下は含礫黄色砂層(Ⅳ層、地山層)となり、Ⅳ層面に中世竪穴1・2が構築されていた。

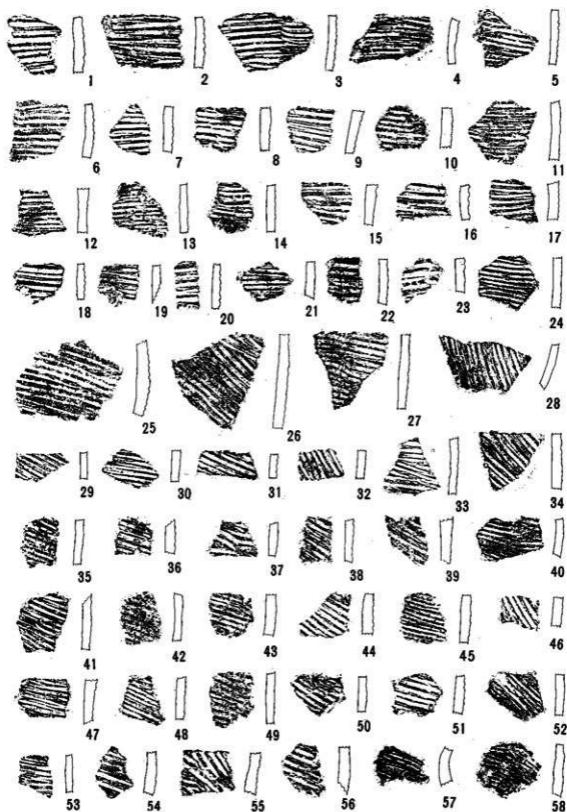
A地区におけるⅢ層(含木炭粒黑色砂質土層)は広く分布し、その厚さも50~80cm余におよびこの層位に中世とみられる多くの遺構が存在した。Ⅲ層中に焼土の検出は少なかったが、きわめて細かい木炭粒のために砂質土層が黒色化したかに観察され、この地で相当の火が燃されたことを検出されている工房址および多量の鉄滓、あるいは羽口等によって示している。



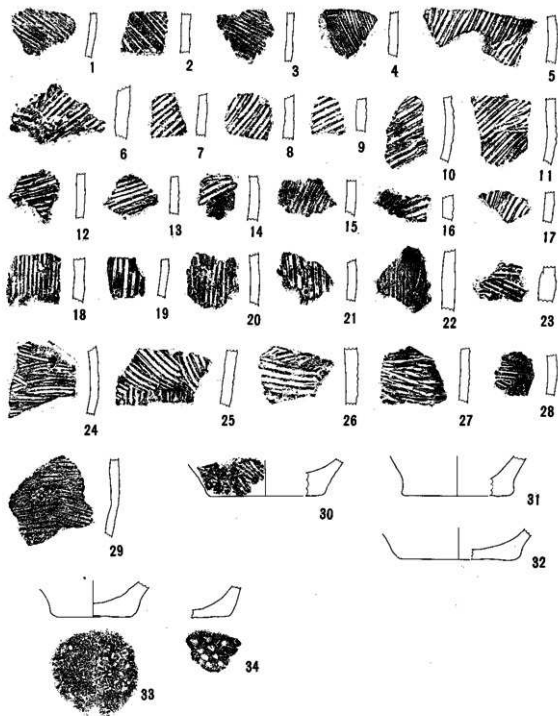
第1图 A地区土层模式图



第2图 A地区出土绳文式土器(1:3)



第3图 A地区出土繩文式土器(1:3)



第4图 A地区出土绳文式土器(1:3)

(2) 遺物出土概況

A地区においては30~80cm余と厚く堆積した単純なⅢ層(含木炭粒黒色砂質土層)中に多量の遺物が含まれ、以下旧Ⅳ層(人為的な却土層中世以降)からⅣ層の地山層およびⅤ層の地山相当層上面にまで遺物が分布した。縄文時代以降、各時代の遺物は主にⅢ層という同一層位内でその上下関係なく一括混在出土し、遺構に伴なう状況で出土したものはきわめて少ない。住居址覆土や竪穴、あるいは柱内、墓境内という限られた出土状況のものを除けば、以下大部分Ⅲ層やⅡ層(石垣状遺構を覆う)を主体とする包含層出土としか扱えられない不都合さがあり、そういう意味では本資料に層位的な共存関係等、必要とされる事項に欠ける難点がある。個々の遺構に近くまたレベルも近いものをある程度その遺構に伴なったものとして扱えたものもあるが確認に欠けることを明記しておきたい。

遺物とりあげにあたって、垂平・垂直分布を示すデータ、層位等記録しているので、今後できる限りのデータ分析によって少しでも資料に有効性をもたせる努力を課題とするものである。

2. 縄文時代の土器・石器(A地区)

A地区の包含層から縄文時代の土器片・石器が多量に出土し注目されたが遺構として扱えられたものは晩期竪穴とした一基のみである。石垣状遺構より北の部分には2ヶ所ほどに晩期土器片が比較的集中して分布する地区が認められたため地山層まで精査したが明確な遺構の確認はなく平安時代から中・近世の陶器片に混じて縄文時代晩期の土器片が出土したにすぎない。晩期竪穴としたものでさえ、一帯に土器片の分布がみられ、浅い覆土中からも少量の遺物が出土したため一応該期の遺構として扱えたが、床面遺物はなく、確実性に欠いている。よって本稿ではA地区から検出された縄文式土器を一括して扱うことにする。検出されている土器には早期末?、中期後期、晩期がある。

(1) 縄文早期末?土器(第2図1)

表裏両面に浅い貝殻痕をもつ厚手の土器(第2図1)である。繊維の混入はみられない。1点のみの出土ではっきりとはしないが早期末の可能性のあるものである。

(2) 縄文中期土器(第2図3~13)

3はまばらな縄文地文上に沈線をもつ口縁部破片、10・11はともに短く密な縄文原体より地文に斜縄文を有し、10には竹管による深い平行沈線がある。これらは中期初頭に位置するものであろうか。12は台付土器の台部とみられる薄手の土器で、わずかに縄文施文が認められる。

4~9は石垣状遺構上面から出土したが、基壇状の面を構築する際に移動したもので現位置を

保っていない。いずれも細い粘土紐貼布がみられ、4～5は把手部、6は口縁部、7～9は胴上部の破片で同一個体片と考えられる。中葉末の土器片である。

13は深い沈線のわきが微隆起伏にもり上がり、14・15は幅広い凹線を横位に深く施文する。16は浅い凹線が縦位に施文される。ともに中期最終末の土器片である。

(3) 縄文後期土器 (第2図17～24)

17はA地区中央部より単独出土した鉢形土器の口縁部破片で、外面には段落としの平行沈線内に磨消縄文を施文し、内面には深い凹線を横位に引いている。18・19はともに磨耗しているが細い隆線上に縄文が施文されている。20～22は粗製土器の口縁部破片である。23は精製土器の胴部片、24は器面を板状器具で整形した粗製土器片である。いずれも包含層から出土した。

(4) 縄文晩期土器 (第2図25～45、第3・4図)

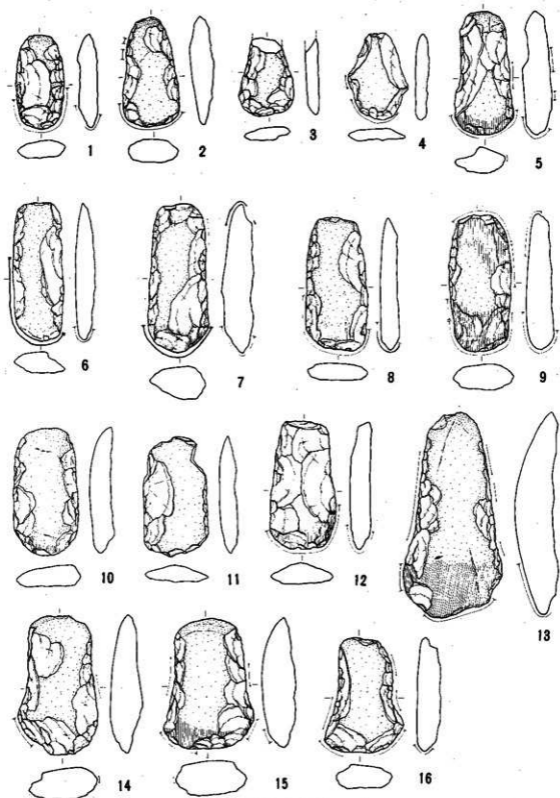
A地区石垣状遺構より北の包含層より多量の条痕文土器の出土があった。グリッドでみればA08Cグリッドを中心とする部分、A99Yを中心とする部分に比較的破片の集中する傾向が認められたが、明らかに該期の遺構として扱えられたものはないが、A地区北の壑穴は晩期の生活址としての可能性をもっている。晩期の土器片はいずれも小破片で、接合可能なものはほとんどなく、もとの器形を復元できるものは皆無である。

第2図25～45は口縁部破片を一括した。アナダラ属の貝殻腹縁による条痕文を横位に施文するものが多く、斜位(右下がり)に施文するものは一点(34)のみである。条痕施文は強く深いものが多い。口縁端部を観察すれば、端部がやや肥厚し平縁状になるものが最も多く、このなかには端部を内側へ折り返しているもの(26～28)も認められる。口縁端部が外に折れるものは1点のみ(40)であり、この土器片に限って薄手で他の土器片と異なっている。端部の平縁部に刺突を加えるもの(41)、深い沈線を加えるもの(42)もある。43は口縁上部外面に刺突を加えている。44・45は口縁直下にラフな押捺を加えた粘土紐を貼り付けている。

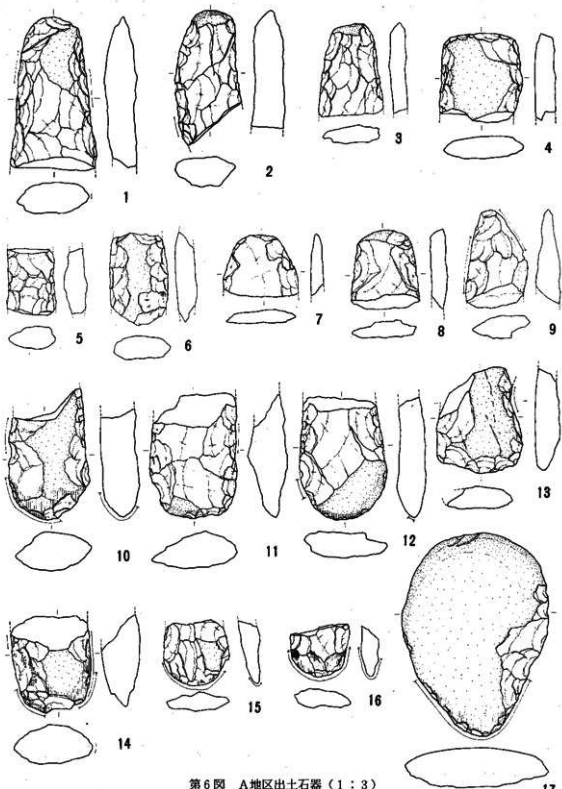
第12図および第13図1～29は条痕文土器の胴部片である。胴部とみられる破片の条痕文の施文方向には、横位のもの(第3図1～24)、右下がりの斜位のもの(第3図25～58、第4図1～4)左下がりの斜位のもの(第4図5～17)、直に下がるもの(第4図18～22)、その他(第4図23～29)がある。このうち、右下がり斜位のものが多い。横位の上ものは口縁部に近い部分と考えられる。その他のものにはラフな羽状のもの、あるいは稜形状のものなどもみられ、これらは底部に近い部分と考えられる。条痕施文は強く深いものが多く、少量ではあるが幅がせまく浅く細かいものもある。

第4図30～34は底部片である。30は底部まで条痕が施文されるが、31～34は無文である。33の底面には種子状の圧痕が、34には網状圧痕が認められる。

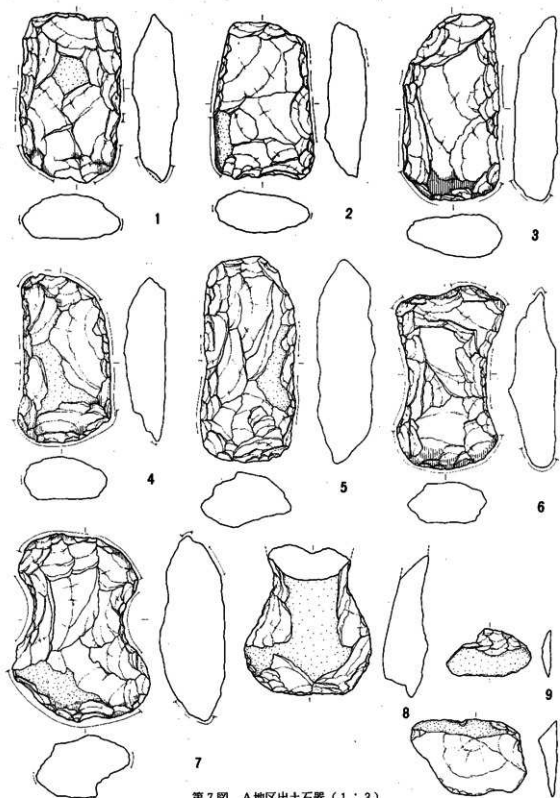
貝殻条痕文土器の胎土は砂質でありあまりしまりがなく、石英粒を含むものが多いが、総じて焼成は良好で硬い感じのするものが多い。器肌は雑ではあるが条痕によってよくしめられている。色



第5图 A地区出土石器(1:3)



第6图 A地区出土石器(1:3)



第7图 A地区出土石器(1:3)

調は明るいものが多い。条痕文土器は比較的単一の様相を示しており、当地方には比較資料に欠けるが東海地方にみられる壘王式に近似するものが主体で、少量水神平式を含む可能性を有している。

(5) 縄文時代の石器 (第5～7図)

A地区全域から縄文時代の打製石斧が出土した。分布域は晩期条痕文土器と同様であるが、包含層のなかでも中位以下、即ち含木炭粒黒色砂質土層(Ⅳ層)中に最も多く、以下含礫黄色砂質土層(Ⅳ層・地山層)上面にまで認められた。出土状況においては特筆すべきものはなく、包含層のなかから中世陶器や晩期条痕文土器に混じて漫然と出土したにすぎない。石器は二点の横刃形石器を除くすべてが特徴ある打製石斧である。

第5図は短櫛形ないしは撥形を呈する比較的小形の打製石斧の完形ないしは略完形品である。短櫛形のなかでも1・2・3などはごく小形のものといえる。總体的にみて短櫛形のは器体の長さの割合に横幅が広い傾向があり、当地方に多出する例えば中期の短櫛形打製石斧とは若干異っている。厚手でずんぐりとした打製石斧であるが、刃部には土ズレによる摩耗が著しく残されている。撥形のものも短櫛形同様に小形の傾向があり、両側縁の抉入は弱く、横広でずんぐりとし、かなり厚手という特徴を示している。

第6図1～16は破損品を一括した。比較的大形の打製石斧とみられるものが多く、総じて分厚で成形もラフであり、一見すると当地方弥生時代にみられる石鎌(大形の短櫛形ないしは撥形の打製石斧)に近いものが多い。刃部を欠くもの(1～4)、頭部・刃部の両端を欠くもの(5・6)頭部破片(7～9)、頭部を欠くもの(10～12)、刃部破片(13～16)がある。17は分厚な一次剥片の先端部に調整が加えられた横刃形石器状を呈するものであるが、先端部に土ズレ状の摩耗痕が残っている。打製石斧とは異なるものであろうか。

第7図1～5は特徴ある大形厚手の打製石斧である。器体の長軸に比較して直交する横軸の幅がきわめて広く、大割なラフな調整ですこぶる厚手、刃部に鋭利さのないずんぐりとした石器である。長軸の一端が刃部とみられ、土ズレによる摩耗痕が残る。通例みられる打製石斧とは趣の異なるものである。

第7図6～8は分銅形石器とみられるものである。6の抉入は浅く、8は一方を欠損している。6・7には長軸両端に土ズレの摩耗痕が残る。当石器の製作も大割で、きわめて厚手である。

9・10は横刃形石器で2点の出土である。刃部には細かい使用痕が残る。9は1次剥片を、10は調整剥片を用いている。

今次検出された石器(打製石斧・横刃形石器)は100多が硬砂岩により、その硬砂岩も灰色ないしは青灰色を呈するものである。当地方では縄文時代でも、とりわけ中期以前の硬砂岩製石器はその色調が白っぽいものが多いのに対し、それ以降、特に弥生時代の硬砂岩製石器の色調は灰色および青灰色を呈しており、明瞭に区分可能と言われている。これは硬砂岩剥片の風化作用に起因すると説明されることもあるが明らかでない。しかし、傾向としては一般に信じられている。

当遺跡の石器が白色の硬砂岩によっていない点、一部の異時期の土器片を除けば晩期に限定し得る可能性をもっている点、また製作が共通してラフでいくつかの特徴をもつグループに分類可能な点等からすれば、大部分は同一時期に製作使用されたものとみられ、縄文晩期における石器の特徴を示しているものと考えられる。

表1 縄文時代石器一覧

(単位 cm)

図番号	器種	出土地点	層位	長さ	刃部幅	厚さ	石質	備考
5-1	打製石斧	A09B	Ⅲ下レキ	7.5	3.5	1.4	硬砂岩	極小形、刃部摩耗
2	打製石斧	A07A	Ⅲ上	8.9	4.5	1.8	硬砂岩	小形、刃部摩耗
3	打製石斧	A02A	Ⅲオチ	(6.2)	4.5	1.0	硬砂岩	極小形、頭部を欠く
4	打製石斧	A03B	Ⅲオチ	6.8	4.0	1.0	硬砂岩	ラフな成形、小形、刃部摩耗
5	打製石斧	A08	Ⅲ下レキ	9.7	4.6	2.2	硬砂岩	刃部摩耗
6	打製石斧	A08C	Ⅲ下レキ	11.0	3.7	1.5	硬砂岩	刃部摩耗
7	打製石斧	A10C	Ⅲ	11.7	4.7	2.3	硬砂岩	刃部(上・下両端)摩耗
8	打製石斧	A99A	Ⅲ・Ⅳ?	10.4	4.8	1.3	硬砂岩	刃部摩耗著しい
9	打製石斧	A08C	Ⅲ下	10.7	4.3	2.0	硬砂岩	器体両端に刃部、刃部著しく摩耗
10	打製石斧	A06B	旧Ⅳ	10.0	5.0	1.7	硬砂岩	刃部摩耗
11	打製石斧	A01B	Ⅳオチ	9.5	5.0	1.3	硬砂岩	扁平
12	打製石斧	A06D	旧Ⅳ	10.2	5.0	1.5	硬砂岩	刃部摩耗著しい、大割な調整
13	打製石斧	A08B	Ⅲ下レキ	16.3	7.8	3.0	硬砂岩	断面くの字状で厚い、縁辺取打による潰れ、刃部摩耗著しく、刃先は丸くなる
14	打製石斧	A05F		11.0	6.3	2.3	硬砂岩	分厚、左縁辺挟入状
15	打製石斧	A08	Ⅲ下レキ	10.2	7.1	2.7	硬砂岩	ずんどう形、縁辺に挟入、分厚刃部摩耗
16	打製石斧	A02A	Ⅲオチ	9.0	6.2	1.8	硬砂岩	縁辺に挟入、刃部若干摩耗
6-1	打製石斧	A10C	Ⅲ	(12.0)	—	2.1	硬砂岩	刃部方向を欠く、調整入念、被熱により赤色化
2	打製石斧	A08C	Ⅲ下層	(10.7)	—	2.3	硬砂岩	刃部を欠く、分厚
3	打製石斧	A02Y	Ⅲ上	(7.3)	—	1.0	硬砂岩	刃部方向を欠く、扁平
4	打製石斧	A03B	Ⅲオチ	(7.0)	—	1.5	硬砂岩	扁平、頭部破片
5	打製石斧	A03A	Ⅲ下	(5.3)	—	1.8	硬砂岩	両端部を欠く
6	打製石斧	A08B	Ⅲ下	(7.2)	—	1.7	硬砂岩	両端部を欠く、下部に摩耗
7	打製石斧	A07B	Ⅲ	(4.8)	—	—	硬砂岩	頭部片、薄手
8	打製石斧	A06D	旧Ⅳ	(6.2)	—	—	硬砂岩	頭部片、扁平
9	打製石斧	A08C	Ⅲ下レキ	(7.7)	—	—	硬砂岩	頭部片、ラフ
10	打製石斧	A06B	Ⅲ	(10.3)	6.4	3.7	硬砂岩	器体上半部を欠く、分厚、刃部摩耗
11	打製石斧	A10A	Ⅲ下~Ⅳ中	(9.8)	6.9	2.3	硬砂岩	器体上半部を欠く、分厚、刃部比較的鋭利
12	打製石斧	A10C	Ⅲ	(9.8)	6.7	1.9	硬砂岩	上半部を欠く、刃部に若干の摩耗
13	打製石斧	A08C	Ⅲ下層	(8.5)	6.8	1.6	硬砂岩	上半部を欠く、右縁辺に挟入部あり、ラフ
14	打製石斧	A08	Ⅲ下レキ	(7.6)	6.0	—	硬砂岩	分厚、刃部に一部摩耗
15	打製石斧	A03B	Ⅲオチ	(5.0)	5.2	—	硬砂岩	刃部破片、刃部摩耗
16	打製石斧	A06D	旧Ⅳ	(4.5)	4.5	—	硬砂岩	刃部破片、刃部摩耗
17	打製石斧?	A06C	旧Ⅳ	16.1	8.3	3.1	硬砂岩	1次剥片の先端部に摩耗(土ズレ状)、打製石斧とは異なる
7-1	打製石斧	A06C	旧Ⅳ	13.3	7.5	3.6	硬砂岩	分厚、刃部若干の摩耗

図番号	器種	出土地点	属位	長さ	刃部幅	厚さ	石質	備考
2	打製石斧	S B 0 1	ビット中	12.3	7.9	3.0	硬砂岩	分厚、左縁辺摩耗、右縁辺敲打潰れ、中世建物址ビット中出土
3	打製石斧	A 0 7 B	Ⅲ	14.7	7.6	3.3	硬砂岩	分厚、刃部摩耗
4	打製石斧	A 0 5 C	Ⅳ上	13.3	7.3	3.2	硬砂岩	分厚、刃部に一部摩耗
5	打製石斧	A 0 6 B	上部レキ中	16.4	7.2		硬砂岩	分厚、ラフな調整、縁辺敲打潰れ
6	分銅形石器			14.7	(8.7 8.0)	3.4	硬砂岩	分厚、上下両端部摩耗、挟入部敲打潰れ
7	分銅形石器	A 0 9 C	旧Ⅳ	14.9	(9.5 10.9)	4.7	硬砂岩	きわめて厚手、上下端部の縁辺摩耗、挟入部は敲打潰れ、調整ラフ
8	分銅形石器	A 0 7 C	Ⅲ下	(12.0)	10.0	—	硬砂岩	挟入部上方を欠く、ラフな成形で分厚
9	横刃形石器	A 0 2 A	Ⅲオチ	6.6	3.7	0.7	硬砂岩	1次剥片による、両部に調整加える
10	横刃形石器	A 0 3 B	Ⅲオチ	9.2	6.0	1.1	硬砂岩	調整剥片による、刃部鋭利、使用痕

3. 古代の土器・陶器（A地区）

(1) 須恵器（第8図1～9）

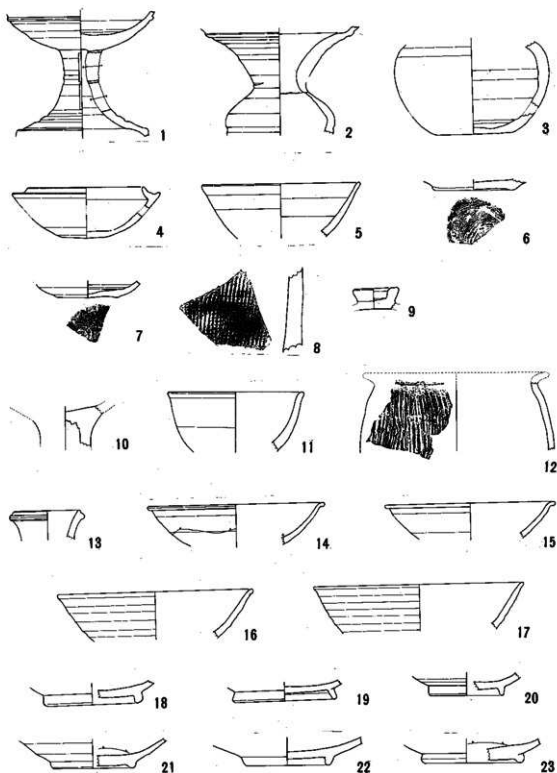
小破片を含めて15点の出土である。奈良時代末から平安時代にかけての住居址とみられる1号住居址より検出された坏1点（第9図1）を除くといずれも包含層からの出土である。高坏（第8図1）、甕（2）、坏（4）の3点は1号住居址を覆う雑群（調査区西方上手からの土石流の末端と思われる）上より検出され、2次堆積によるものと考えられた。いずれも古墳時代後期の所産と考えられ、早稲田神社方向に該期の何らかの遺構の存在が予測される。小形甕（3）、坏（5～7）、坏蓋つまみ（8）の胎土は灰白色を呈しがきつで、地元産と思われ、平安時代図分式にとまなうものであろう。

(2) 土師器（第8図10～12）

1号住居址から検出された土師器を除くとA地区から出土した土師器は小破片をも含めて10点と少なく、いずれも包含層からの出土である。高坏（10）、坏（11）、甕（12）があり、すべて摩耗した小破片である。カキ目を有する甕は唯一点の出土である。いずれも平安時代図分式に比定される。

(3) 白 瓷（第8図13～23）

灰釉陶器とされるものでA地区全域から出土したが、土師器や須恵器同様小破片で出土量も少ない。器種をみれば瓶子1点（第8図13）を除けばすべて碗（14～23）である。いずれも平安時代の所産である。



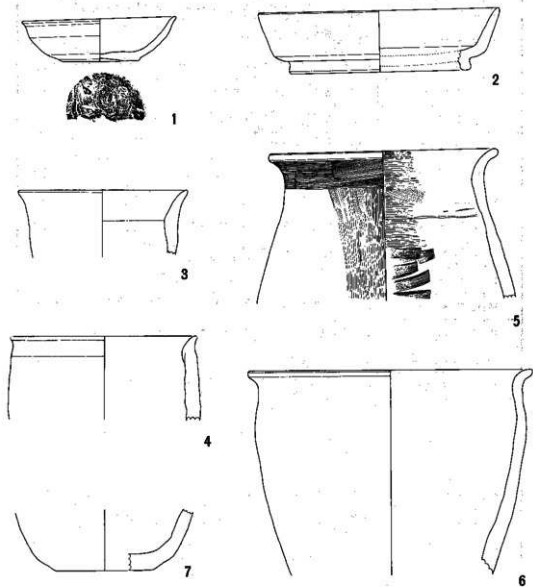
第8图 A地区出土 須惠器各種 (1~9)、土師器各種 (10~12)、白瓷碗 (13~23)

表2. 古代の土器・陶器一覧

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特徴	備考
8-1	須恵高坏	162+191+ 234+299	半個体	緻密、灰黒色、硬	脚部二段に有孔部あり	古墳時代
2	須恵罏	233+302	胴	緻密、灰白色、硬	肌ざらつく	古墳時代
3	須恵甕		半個体	がさつ、軽石状 白灰色、軟	摩耗、器面剥脱、2次火熱強く受ける	
4	須恵坏	312	口縁、底	緻密、青灰色、硬	良質	古墳時代
5	須恵坏	465	口縁	がさつ、青灰色 軟	ロクロ引き入念、内面に黒斑点あり	平安時代
6	須恵坏	皿下レキ	底	がさつ、青灰色	糸切り底	平安時代
7	須恵坏	543	底	がさつ、石英他 を含む、青灰色	糸切り底	平安時代
8	須恵壺	038	胴	緻密、赤紫色、硬	タタキ目	
9	坏 蓋	003	つまみ	長石粒含、青灰色、軟	ラフ、高台状のつまみ部	平安時代?
10	土師高坏	457	脚	黄褐色、軟	内面黒色処理、脚内部は坏底部にむけて棒状器具で突く、国分式	平安時代
11	土師坏	224	口縁	明褐色、硬	内面黒色処理、厚手、碗形、国分式	平安時代
12	土師壺	534	肩	砂質で緻密、硬	外面カキ目、内面上部ハケヨコナデ内面に指圧痕、国分式	平安時代
13	白瓷瓶子	193	口縁	灰白色、硬	極小破片、施軸入念	平安時代
14	白瓷碗	327	口縁	明灰色、硬	ロクロ痕ほとんど無し、口縁端部外へ折り返す	平安時代
15	白瓷碗		口縁	明灰色	口縁端部外へ折り返す	平安時代
16	白瓷碗	SY-N	口縁	白味強い、硬	ロクロ痕あらい	平安時代
17	白瓷碗	A10C	口縁	白色、ねっとりしている	ロクロ痕あらい、口縁端部に黄味強い、大形、内面の軸はじける	平安時代
18	白瓷碗	220	底	暗灰色、がさつ	極小破片	平安時代
19	白瓷碗	484	底	灰色、がさつ	細く長い付け高台、高台端に稜をもつ	平安時代
20	白瓷碗	072	底	白灰色、軟	細い付け高台	平安時代
21	白瓷碗	262	底	白色、硬	高台内低く厚手	平安時代
22	白瓷碗	461	底	灰白色、がさつ	内に向く貼り付け高台、後出的か?	平安時代?
23	白瓷碗	490	底	暗灰色、がさつ	太い貼り付け高台、底部厚い、皿?	平安時代?

4. 平安時代住居址出土土器・陶器

A地区はほぼ中央の最下層（地山層）にて検出された1号住居址からは少量の須恵器・土師器片が出土している。大部分の遺物は覆土上位の出土であり、下位からはほとんど出土していない。



第9図 1号住居址出土土器(1:3)

1・2(須恵器)、3~7(土師器)

(1) 須恵器 (第9図1・2)

2点の須恵環の他には須恵器の出土はない。1はカマド正面右よりの床面から出土した小形の環半個体で、夾雑物の多いがさつな胎土により焼成不良、明灰色ないしは暗灰色を呈するものである。2次の火熱を受けており、全面摩耗している。底部はきわめてラフな糸切りによっている。2は覆土から出土した高台付の大形環である。石英粒を含み、しまりのない胎土により、厚手のためか胎土内部まで火が通っていないため生焼けの感じがするものである。比較的古式のタイプであろうか。

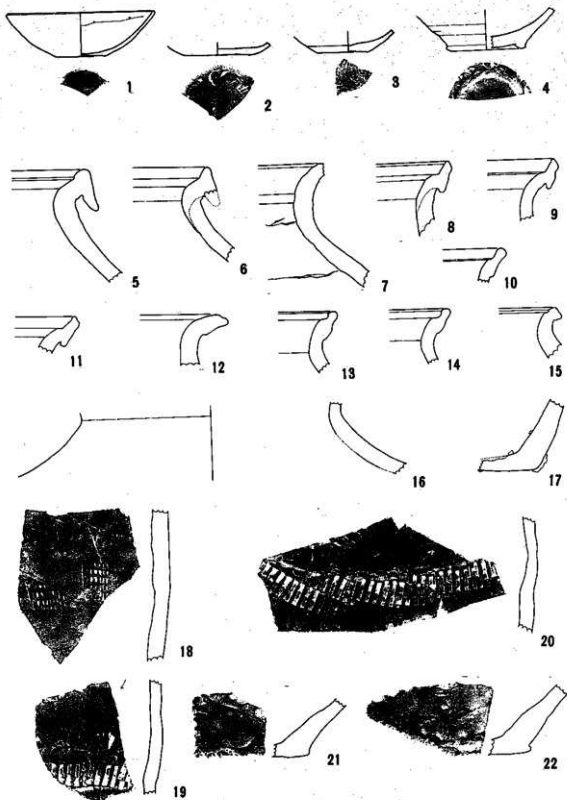
(2) 土師器 (第9図3～7)

破片量はポリ中袋2はい程度で少ない。3は小形甕の口縁部である。直に立ちあがる口縁部の内側はくの字状に突出している。4も直に立ちあがる口縁部で、端部は細くやせ、口縁内部は折り返しによって肥厚させている。ともに無文で手づくねによる整形ラフな甕である。5はカマド上面より出土した甕で、胴部中位から口縁部にかけての半個体である。やや締った頸部以下は長胴気味になるものと思われる。頸部は櫛刃状の器具で軽く入念に横なし、以下胴部も同様な器具で器面調整している。6は覆土中より出土した口径部に最大幅をもつややすづまり気味の甕で2次焼成のためか器肌はあれている。7はカマド内より出土した甕底部片である。土師器の甕はいずれもロクロ整形によらず、厚手で整形はラフである。胎土は精選されているとはいえないが比較的硬質に焼きしめられている。色調は暗いものが多い。

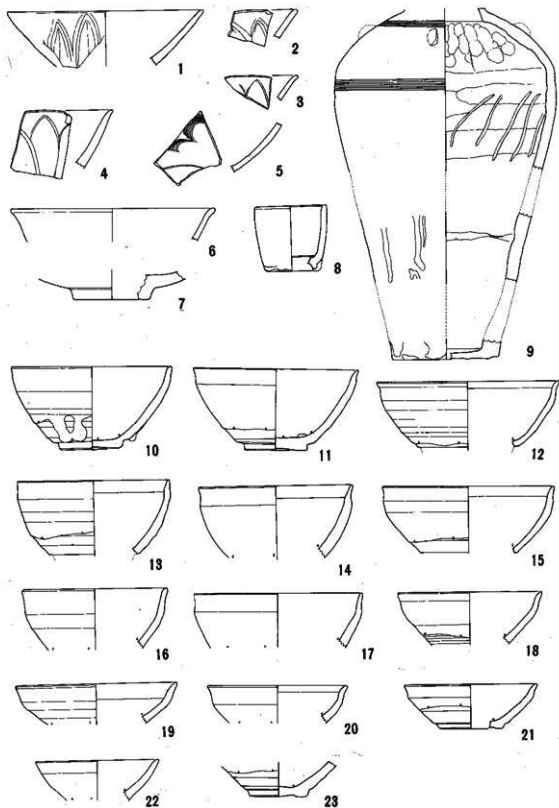
本址から検出された遺物は須恵環と土師甕のみであり、白瓷の出土はなく、またカキ目を有する土師甕の出土もなかった。高台環や甕にみられる古式の様相からして当地方では類似資料に乏しいが奈良時代末から平安時代の初期、9世紀初頭あたりの住居址と考えられる。

表3 1号住居址出土遺物一覽

図番号	器種	部位	胎土・焼成	特 徴	備 考
9-1	須恵環	半個体	夾雑物多し、がさつ	ラフなつくり、扁平ゆがむ、ロクロ引きあらい底部糸切り、焼けている	床面出土
2	須恵環	小片	石英粒含む、しまりない	生焼け状、大形厚手、焼ける	
3	土師甕	口縁	軟	摩耗、器肌あれる、もろい、直状口頸部、小形甕	
4	土師甕	口縁	雑、軟	内面ラフ、口唇内面肥厚、頸部指頭による押さえ、直状の口頸部、ハケ調整?	
5	土師甕	半個体	石英粒含む、不良、焼成良、硬	頸部しまる、櫛による器面調整、厚手	カマド上面出土
6	土師甕	口縁	不良	ラフなハケ調整痕残る、口径広い、もろい、焼ける	
7	土師甕	底	不良	全面摩耗、もろい	カマド内出土



第10图 A地区出土白瓷系碗(1~4)、常滑系甕·壺(5~22)(1:3)



第11图 A地区出土 青磁碗(1~8)、古瀬戸瓶子(9)、鉄軸天目碗(10~23)(1:3)

5. A地区出土中世・近世の陶磁器

(1) 白瓷系陶器 (第10図1~4)

極薄手の坏に近い碗(第10図1~3)3点と、厚手の碗(4)1点の計4点が出土している。前者は底面に糸切痕を、後者は糸切痕の上にラフな貼り付け高台を有し、高台端に靱尻痕を残している。ともに鎌倉時代以降の所産とみられるが、極薄手の碗はB地区の中世竪穴1より完形品の出土をみており(第17図4)、南北朝期の可能性が強い。

(2) 常滑系陶器 (第10図5~22)

大小破片の出土量は比較的多いが口縁部の形状を知り得るものは少なく、また底部に至っては3点の出土で少ない。胴部片は多く、産地を推定し得ぬものが大部分であるが、胎土や色調、あるいは同質の口縁部形状よりみて、おおまか常滑窯の所産と観察されるものである。A地区全域にわたって分布しているが、遺構に結びつく状態で出土したものはほとんどない。胴部破片のうち1点は石垣状遺構上面の石列をともなうピット中より出土し、他に数点の口縁部破片(第2図5・7)が石垣状遺構面に残存していた程度である。多くは13世紀後半から14世紀前半に常滑窯で生産された甕あるいは壺の破片であろう。尚、これらの資料は近年問題とされている中津川窯との関連が今後の課題である。

(3) 青磁碗 (第11図1~8)

小破片ながら青磁の出土量は比較的多くA地域全域にわたっている。器種をみれば碗形あるいは鉢形のものであり、外面側部に連弁文を施したことが多い。内面底部にヘラ描きによる凹線と櫛描きによる花文をもつものは一点のみである。胎土や釉の色調は多岐にわたっているが、大部分は13世紀代に中国よりもたらされた輸入陶磁の一群と考えられる。4は石垣状遺構上面より出土しているが、他に遺構にともなう状態で出土したものはない。

(4) 古瀬戸瓶子 (第11図9)

A地区中央よりやや北によった部分の最下層(地山層上面)より集中出土した17点の瓶子片は同一個体片とみられた。遺構との関連は不明であるが、付近には中世とみられる柱穴群や工房址1・2があり、茶入れの蓋をはじめ各種陶器片、古銭(新しいものは永楽通寶)などが出土している。17点の破片すべてを接合することはできないが、概略もとの器形を窺うことができる。口頸部を欠くが、肩部に4筋の平行沈線が二段に施文された四耳壺である。外面には肩部より透明な灰釉がかかり、胴下部に至って垂れた灰釉が薄緑色にたまっている。2次の火熱を受けているためか器肌はあれ、釉の剥脱部分が多い。ほぼ14世紀代の所産であろうか。古瀬戸瓶子は他に

土していない。

(5) 鉄軸天目碗 (第11図10~23)

天目碗の出土量はA地区全域にわたって多いが、大部分が小破片である。天目碗には豆天目と称される小形のものも含まれるがごく少量である。軸の状況をみれば茶色ないしはアズキ色を基調とするものが多く、他に漆黒色あるいは黒地に茶色の斑状のものなどがある。口縁端部の形状や底部の形状は様々であり、実測不能な小破片をも含めて細分の必要を感じている。量の割には遺構と結びつくものは少ないが、火葬墓面で灰軸平碗と共伴するものが数点認められ、墓壇内(火葬墓7)より古銭6枚とともに口縁部小片が出土している。また石垣状遺構上面を覆う礫群からは鉢鉢と天目碗(1)が共伴し、また石垣状遺構面とB地区との間の造成面からは比較的大きな破片や豆天目が出土している。造成面より出土したものは西上方の早稲田神社側からの落ちこみと考えられる。第11図10・11・13等はロクロ水引きにより、内反り、削り出し高台で、胎土等からみて美濃窯製品とみられ、他の多くも同様の美濃窯製品と思われるが相当の時間的な幅が感じられ、詳細な分析が課題とされる。

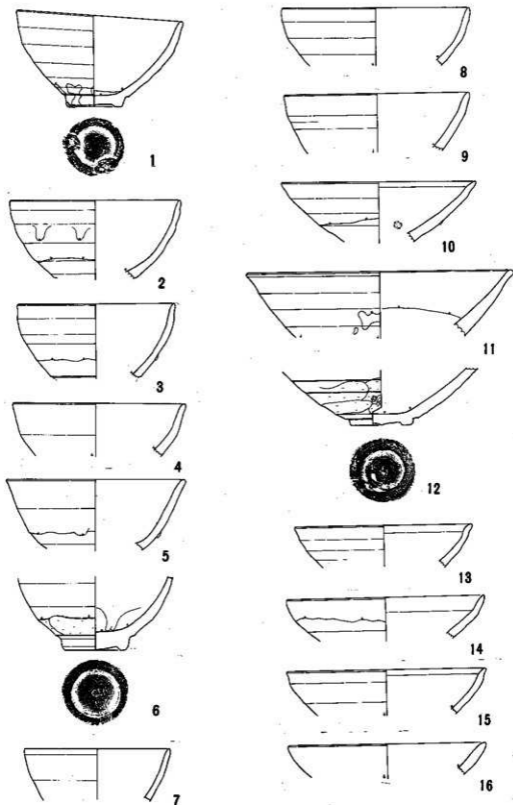
なお、第11図21の豆天目は瀬戸系胎土により16世紀後半の所謂桃山陶と考えられるものである。

(6) 灰軸平碗 (第12図)

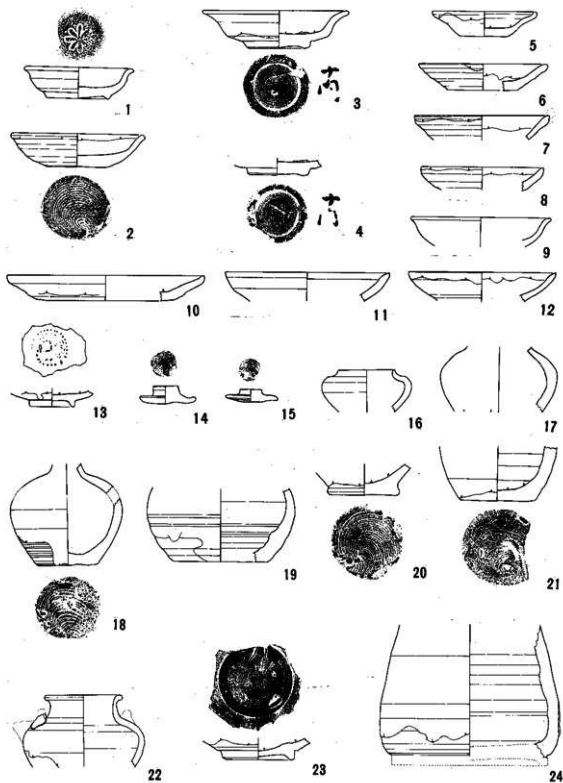
本遺跡の中世から近世初頭の出土陶磁中、特徴的な一群をなすものである。小破片をも含めればその出土量は多く、A地区全域にわたっている。白色に近い軟質の胎土(もぐさ土)により、内外面に厚く黄色あるいは薄緑色の灰釉を施した平碗ないしは丸碗と称されるものである。当地方では断片的に検出されてはいたが「黄瀬戸」などと分類されてきたものが多く、あまり注意されていなかった一群である。器形をみれば深い碗形のもの(1~9)、浅めの鉢形に近いもの(10~12)などに大別される。平碗・丸碗・碗についてはその分類区別が明確でないため個々に区分しえないが、浅めの鉢形に近く口径の大きなもの(例えば10・11の如く)については平碗であろうと考えている。(本稿では個々に区分しえないため平碗として一括しておく)全体的な傾向としてはその形状が鉄軸天目碗に近いものが多い。やや厚手でロクロ引きはあらく、高台脇はいずれもシャープな削り出しにより、高台は輪高台で幅広く、また高台内面は低いものが一般的である。施釉状態をみれば、内面は底部まで全面施釉されるも、外面側部は口縁端部からおよそ三分の二くらいまでは厚く施釉されるが、以下高台部までは無釉で、比較的粗雑な地肌をみせている。しかし無釉部分でも高台脇の削り出しはいずれもきわめてシャープなのが特徴的である。遺構との関連をみれば天目碗同様に火葬墓面および石垣状遺構面に大きな破片が出土する傾向があったが、多くは包含層からの出土である。平碗の大部分は15・16世紀の美濃窯製品と考えられる。

(7) 灰軸皿 (第13図1~13)

灰釉を施した皿を一括している。略完形のもの3点の他はすべて小破片であるが、出土量は多



第12图 A地区出土灰釉平碗(1~16)(1:3)



第13图 A地区出土灰釉皿(1~13)、灰釉茶入れ蓋(14·15)、灰釉·鉄釉小壺(16~21)
 鉄釉水滴(22)、鉄釉徳利(24)

い。概して小形で深めのもが多く、施釉状態は内外面とも口縁部に灰釉を施す場合が多くみられる。内面底部にまで施釉したものはほとんどなく、おろし目皿の施釉法と共通している。胎土は須恵質で硬質なものが多い。1は略完形で火葬墓からの出土、内面底部に菊花文の印刻がある。2も略完形で、石垣状遺構の背後、B地区とのなす造成面にて検出された。3も略完形で火葬墓面より検出され、灰釉平碗・鉄釉天目碗を共伴した。高台内面に「十門」？あるいは「南」？ともみえる墨書が認められ、これと同一の底部片が南10mほどの耕土からも検出されており注目された。皿の大部分は包含層からの出土である。灯明皿にみられるごとく内面底部に隆起帯をめぐらすものは検出されていない。1は16世紀初頭的美濃窯製品であり、菊皿の出土が皆無のところより、他の多くも15世紀から16世紀初頭的美濃窯製品を主体とするものであろう。

(8) 茶入れ蓋 (第13図14・15)

小さな蓋で茶入れの蓋とみられるものである。胎土は須恵質で灰釉皿のそれと似、薄緑色の灰釉が施されている。2点の出土で、ともに完形である。工房址の周辺より出土し、14はすぐわきより永楽通寶がほぼ同レベルで共伴している。

(9) 灰釉壺・鉄釉壺 (第13図16~21)

壺とみられるものは6点出土しているが、いずれも胴部ないしは底部破片で器形を知り得るものはわずかである。大部分は包含層からの出土であるが、16は中世石列3から、17は造成面から19は石垣状遺構面から出土している。17の内面には鉄サビ状の付着物がこびりついており、樹脂状のものが入れられていたことを示している。灰釉のものと鉄釉のものがある。

(10) 鉄釉水滴 (第13図22)

鉄釉を施した水滴の破片1点が包含層より出土している。本資料に類似する水滴は当地方の近世墓塚より数点検出されている。16~17世紀中葉にかけて美濃で生産されたものであろう。

(11) 器種不明 (第13図23・24)

内面底部に台状に低くもりあがった部分をもつ底部片(23)が造成面より出土している。外面には黒味の強い鉄釉が施されているが、どのような器形をとるか不明である。底部によった胴最下部に最大径をもつ鉄釉の徳利状の破片が石垣状遺構南端より出土している。前者ともに高台輪はシャープに削り出されている。時期的には新しいものかもしれない。

(12) 灰釉花瓶 (第14図1~3)

A地区では破片をも含めて3点の出土である。1は中世掘立柱建物址1のP₁中よりクヌギの炭化種子をともなって出土した完形の花瓶である。整形はきわめてラフで、粗いロクロ痕を残している。胴部中位に4~5本の筋をめぐらし、胴下部まで半透明な灰釉を施している。底部は糸切

りによる。尚、当資料はB地区の中世竪穴1より集中出土した陶器群のうちの2点の花瓶と同一窯製品であり、中世竪穴1と掘立柱建物址の同時性が考えられる。2は昭和54年度の試掘調査のおりに出土した花瓶で、口頸部を欠いている。台部までの間は薄緑色の不透明灰釉が厚く施され台部は無釉で白質の地肌を残している。3は包含層より出土した無釉の台部で、スカート状になっている。瀬戸窯製品とみられる。

03 灰釉おろし目皿（第14図4～9）

皿の内面底部に格子目状の荒い沈線を刻みこんだおろし目皿で、小破片6点の出土である。胎土・釉の状態は灰釉皿に似ている。器高の高いものや低いもの、刻みの深いもの浅いものがあるがいずれも底部は糸切りによっている。包含層からの出土である。

04 鉄釉香炉（第14図10・11）

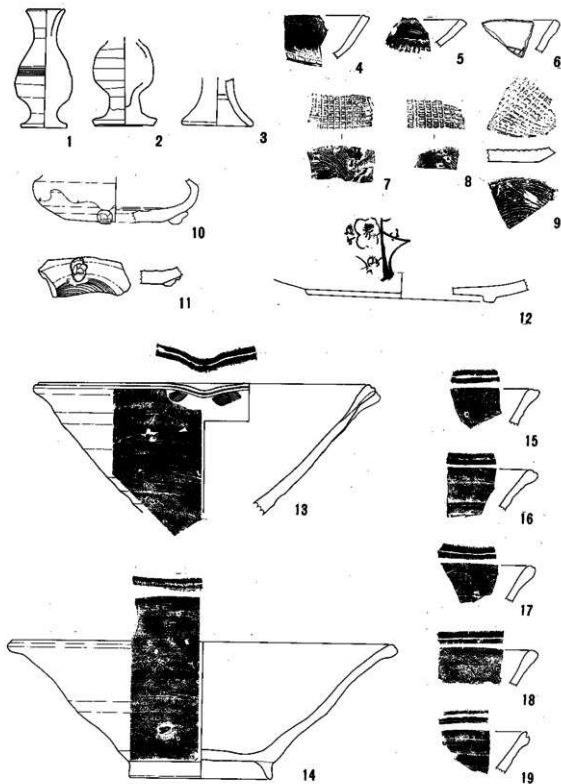
包含層より2点出土している。10は器形の概略を知り得る資料で、底径は広く、扁平な胴部の上に低い口縁が立ち上っている。胴部中央ほどまで黒味の強い鉄釉が厚く施されている。底部は糸切りにより、ラフな三足がつけられている。15世紀後半の美濃窯製品とみられる。11は底部小破片である。

05 灰志野鉄絵皿（第14図12）

A地区内2地点の包含層より出土した破片の接合資料で、大皿とみられる底部片である。内面には鉄絵による花木画が描かれ、長石釉が施されている。本遺跡出土陶磁中、唯一点の花木画の描かれた資料で、灰志野とみられ、16世紀後半以降の美濃窯製品と考えられる。

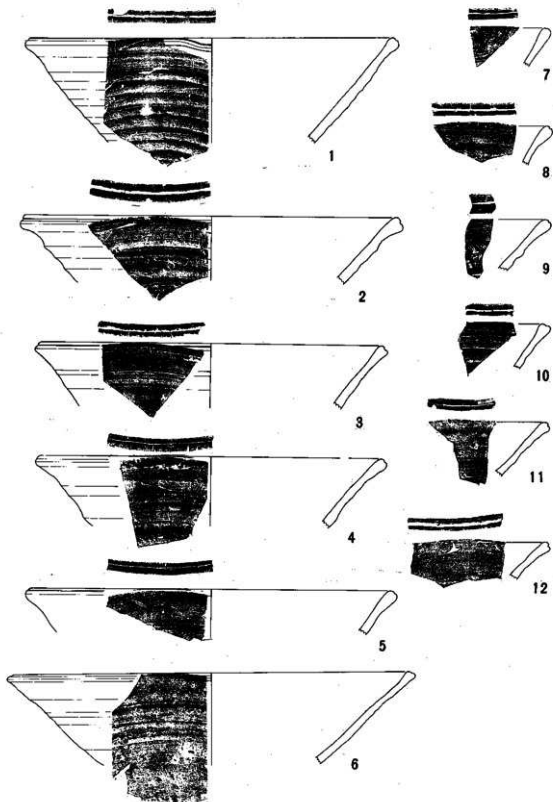
06 白雲系練り鉢（第14図13～19、第15、第16図1～7）

灰釉平碗同様に本遺跡の出土陶磁中特徴的な一群をなすもので出土量は多い。練り鉢はA地区全域にわたって分布していたが、特にA地区でも南半に多い傾向にあり、石垣状遺構を覆う集石部や石垣状遺構面に大きな破片が遺存していた。練り鉢は大きく深い鉢形を呈し、口径は最大で35.5cm、最小で27cm、平均すれば29.5cmを測る。底部にはラフな貼り付け高台がなされ、口台径は9～11.3cm、ほぼ器形の大まかを知ることで練り鉢（第14図14）によれば、口径31cm、高さ11cm、深さ8.5cmの大きさである。概観すれば口径は広く、器高はやや低め、比較的浅い鉢形のものが多いといえよう。片口部分の破片は少ないが多くの場合片口鉢であったものと考えられる。口縁端部には例外ないほどに一条の沈線が施されているのが一つの特徴である。この沈線には幅広の深いものと、細く浅いものの二者に大別され、わずかではあるがきわめてラフな凹線化したものも認められる。詳細にみれば口縁部の形状にはバラエティーがあり、胎土・色調や整形の具合により数種に細分される可能性を有している。器内外面に残るロクロ引きによるナデ調整痕は比較的大ざっぱで、所謂日常雑器の感を強く受ける。量は少ないが外面下部にヘラ整形を

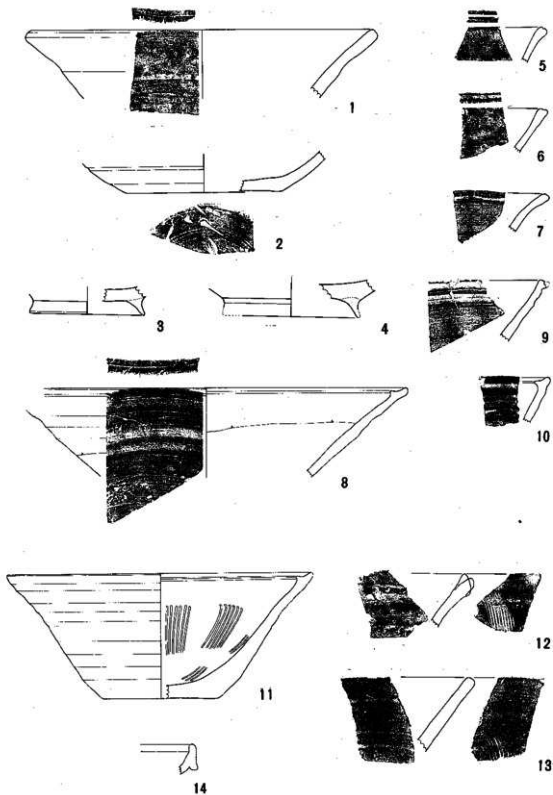


第14図 A地区出土陶器(1:3)

灰釉花瓶(1~3)、灰釉おろし皿(4~9)、鉄軸香炉(10・11)
鉄絵皿(12)、白瓷系練り鉢(13~19)

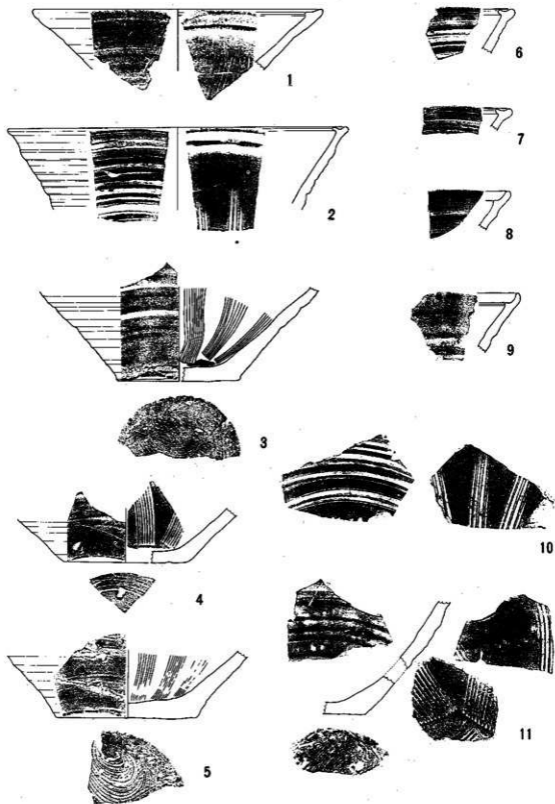


第15図 A地区出土陶器（1：3）
白瓷系統り鉢（1～6）



第16図 A地区出土陶器(1:3)

白瓷系練り鉢(1~10)、鉄釉溜り鉢(11~14)



第17図 A地区出土陶器(1:3)

鉄粘播り鉢(1~11)

施したのも認められる。胎土は白灰色に近いものが多く、砂粒を含むも比較的硬質に焼き締められている。色調は黄白色・黄褐色・灰白色のものが多く、また口縁部に透明ないしは黄褐色の釉のかかるものも多いが、これは自然釉によるものと観察され、意図的に施釉されていないものと考えられる。内面下部から底部にかけては使用痕とみられる摩耗部分をもつものが多い。白瓷系陶器、つまり山茶碗の系譜を引くものであろうが、その出自については不明点が多い。図示していないが、口縁部小破片のうち1点には明らかに常滑窯の胎土そのものの資料もあり、瀬戸・美濃・中津川窯など、いずれの生産によるものか問題が残されている。

⑬ 攪り鉢 (第16図11~14、第17図)

攪り鉢はA地区でも南半に分布が濃厚であり、他の陶器同様石垣状遺構やその周辺に比較的大きな底部片などが遺存した。攪り鉢の多くは鉄釉が施されたものであるが、少量赤茶色を呈する素焼き状の無釉のものも存在する。第16図11は暗赤茶色を呈する無釉の小形攪鉢で、第17図1も同様である。無釉のものはこの2点で、他はいずれも鉄釉が施されている。攪鉢の形状をみれば口縁内部に内に凸出す隆帯をもち、断面Y字状のものが施釉・無釉のものともに多く、素口縁ないしは端部の肥厚するものは2点のみ(第16図12・13)である。外面側部は總体的にロクロ引きがあらく、棒状器具のようなものでヨコナデしたもの(第17図2・10)も認められる。内面は櫛刃状器具による攪り目が帯状に施され、全面に攪り目を入れるものはない。内面は極度の使用によって摩耗し、地肌の出たものが多い。底面はラフな糸切りによっている。第16図12は小指先大の片口部をもっている。施釉状況をみれば暗紫色の鉄釉を施すものも多く、胎土は白色ないしは黄白色である。15世紀中頃から16世紀初頭的美濃窯製品が主体であろうか。なお、第16図14は16世紀後半の美濃窯による口縁部片で、他のものよりは後出的であり、この種の破片は唯一点である。

表4 A地区出土中世・近世の陶磁器一覧

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特徴	備考
10-1	白瓷系碗	358	半個体	灰白色・硬	口縁端部内側へ突出、きわめて薄手、底部細かい糸切り	
2	白瓷系碗	441	底	白色、緻密	糸切り底	
3	白瓷系碗		底	白色、がさつ	糸切り底	
4	白瓷系碗	A10C	底	白色、ねっとり する、緻密	糸切り上にラフな貼り付け高台 高台端にモミ圧痕	
5	常滑系壺	447	口縁	青灰色、含小石 粗	口縁内面に沈線状の切りこみ、 外面暗褐色で無釉	
6	常滑系壺	195	口縁	黒褐色、含砂粒 粗、やや軟	口縁内面たちあがり下に一部へ う削り、外面灰褐色で無釉、内 面に粘土継接合痕	13世紀末～ 14世紀前半
7	常滑系壺	090+478	口縁	灰白色、がさつ	口縁端部欠く、若草色および黄 味のつよい灰釉	

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特徴	備考
10-8	常滑系壺	439	口縁	灰色、含小石、やや粗	(甕)、口縁端部内面に弱く部分的な沈線、外面に暗緑色灰釉	13世紀末～14世紀前半
9	常滑系壺	119	口縁	灰色、含砂粒、やや粗	(甕)、外面明褐色で一部に灰釉	13世紀末～14世紀前半
10	常滑系壺	150	口縁	灰色、緻密、硬	(甕)、外面暗褐色、全面に灰釉	
11	常滑系壺	404	口縁	灰白色、軟	(甕)、全面に灰釉	
12	常滑系壺	228	口縁	暗赤色、粒子大きい緻密、硬	外面のみ灰釉(二次焼成により変色)常滑窯	12世紀末～13世紀中葉
13	常滑系壺?	029	口縁	灰色、緻密、わずかに砂粒含、硬	外面に灰釉、内外面黒褐色、傾きは推定	
14	常滑系壺?	054	口縁	灰色、わずかに砂粒含、密、硬	良質、口縁端内側と外面に灰釉傾きは不明、時期不明	
15	常滑系壺?	107	口縁	暗灰色、胎土不良だがよくしまる	茶色地にアズキ色の灰釉	
16	常滑系壺	349	肩	灰色、やや粗、砂粒含、硬	(甕)、内面剥脱多、灰～黄灰色の灰釉	
17	常滑系壺?	554	底	灰色、よくしまる	内外面に夾雑物付着	
18	常滑系陶器	S Y	胴	暗灰色、緻密、須恵質	外面赤茶色、タタキ	
19	常滑系陶器	077	胴	暗灰色、緻密、須恵質	無釉、暗灰色、タタキ、No20と同一個体か	
20	常滑系陶器	031+032+214	胴	暗灰色、緻密、須恵質	無釉、暗灰色、タタキ	
21	常滑系陶器	263	底	暗灰色、軟、須恵質	無釉、暗灰褐色、内面摩耗部分あり	
22	常滑系陶器	448	底	明茶色、軟	赤味の強い地肌	
11-1	青磁碗	321	口縁	灰白色にやや青味がかかる	青緑色(若草色)の釉、花卉不整で鋭角的	13世紀代
2	青磁碗	034	口縁	暗灰色	若草色釉、表面釉にキズあり、花卉の凹凸大きい	13世紀代
3	青磁碗	190	口縁	灰白色	若草色釉	13世紀代
4	青磁碗	486	口縁	暗灰色	釉ガラス質で厚い、暗く濃厚な若草色(カーキ色に近い)釉、花卉不整、鋭角的	13世紀代
5	青磁碗	272	胴	白色	全面透明なガラス質釉、内面小さく貫入、櫛による花文の陰刻	13世紀代
6	青磁碗	017	口縁	灰白色	内外面若草色がかりの白濁釉	
7	青磁碗	020	底	灰色	若草色釉、不良、気泡はいる	
8	青磁香炉?	A S - Z	半個体	白色	若草色の釉厚い、内面底部無釉香炉?	
9	古瀬戸瓶子	123	頸	灰白色、緻密、硬	肩部に四筋二段	
		048+122+124	肩		四耳壺	
		056+057+058+059+083	胴上		肩部より透明な灰釉、胴下部に至り帯状に釉垂れる	
		85			整形はあまり入念ではない	
335		底部はラフで薄い				

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特徴	備考
9	古瀬戸瓦子	455	胴下		内面肩部下にヘラによる深い斜行沈線をめぐらす 内面整形に指頭による凹凸痕	
		277				
		155	底			
		230				
		064				
		164	胴			
10	鉄軸天目碗	S Y	半個体	暗白色、緻密、硬	直に立つ口縁、茶黒色へ黒色釉軸あついで、地肌は紫がかる褐色削り出し高台	瀬戸系
11	鉄軸天目碗	079+200+256	半個体	白色、夾雑物多し、軟	口縁端部やせる、黒色上に油状の茶色斑点軸、地肌は赤味のつよい薄茶色、削り出し高台	
12	鉄軸天目碗	476+525	半個体	白色	口縁端部外へ張る、黒色釉、ロクロ痕高い、削り出し高台	
13	鉄軸天目碗	S X	口縁	白色	直状口縁、黒地に茶の斑状軸、胴下部シャープに削る	
14	鉄軸天目碗	319	口縁	灰白色の白瓷質硬	口縁部強くやせる、体部厚い、黒色の光沢軸、軸中に粒中のハジケ	
15	鉄軸天目碗	041	口縁	黄味がかった白色、硬	茶地にゴマ状斑点のある斑状の軸、地肌は紫がかる、胴下部シャープに削る、削り出し高台	
16	鉄軸天目碗	489	口縁	黄味がかった白色	厚手の口縁、直状、茶黒色軸	
17	鉄軸天目碗	212	口縁	白色	赤サビ状の軸、不良	
18	鉄軸天目碗	S X	口縁	灰白色、硬	内面黒、茶色の斑状軸、外面茶黒色釉、地肌に線状の整形痕、地肌黄味おびる	
19	鉄軸天目碗	134	口縁	灰色	浅い、茶ないし黒色釉、ロクロ痕あらい	
20	鉄軸天目碗	S X北	口縁	黄土色	胎土上に油状の斑状軸、肌なめらか	
21	鉄軸豆天目	434	半個体	白灰色、緻密	口縁下に明確な稜をもつ、黒ないし茶色釉、削り出し高台、地肌も胎土と同一の白灰色	桃山陶
22	鉄軸豆天目	Z	口縁		摩耗、紫がかった濃茶色釉	桃山陶
23	鉄軸豆天目	430	底	白色、硬	黒色釉、胴下部シャープに削る削り出し高台	桃山陶
12-1	灰軸平碗	500+527	略完形	明褐色、がさつ	薄緑色の半透明釉、地肌は黄味をおびた灰白色、内面底部釉たまり、シャープな削り出し高台	
2	灰軸平碗	499	口縁	白色	ロクロ痕高い、透明灰釉、地肌は黄白色	
3	灰軸平碗	210	口縁	灰白色	薄緑の半透明釉、口縁部は天目碗様にくびれる、高台盤の削り出しシャープ	
4	灰軸平碗	550	口縁	黄味がかった白色	厚手、薄緑に近い半透明釉	
5	灰軸平碗	S X	口縁	灰白色	透明および若草色釉、地肌は白色に近い、厚手	

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特 徴	備 考
6	灰軸平碗	A地区北	底	黄白色、がさつ	高台脇シャープな削り出し、胴下部ヨコ位にケズリ、黄味の強い透明釉	
7	灰軸平碗	108	口 縁		鉛色に近い濃茶半透明釉	
8	灰軸平碗	523	口 縁	橙白色、軟	ロクロ痕大きい、若草色釉	
9	灰軸平碗	558	口 縁	白色、がさつ	白濁部分のある半透明釉、厚手	
10	灰軸平碗	007	口 縁	灰白色、硬、白 瓷質	黄味強い、ウグイス色釉、白肌 灰白色、使用痕（釉の剥脱部）	
11	灰軸平碗	023	口 縁	白色、ちみつ	若草色釉、地肌黄橙色、底部方 向はきわめて厚手	
12	灰軸平碗	468	底	白色	胴下部へら削り、高台シャープ な削り出し、輪高台、無釉	
13	灰軸平碗	129	口 縁	暗灰色	暗いウグイス色釉厚い、釉に貫入	
14	灰軸平碗	S Y-N	口 縁	灰褐色、軟	淡緑色釉	
15	灰軸平碗	355	口 縁	灰白色、硬	口縁部天目碗様、透明釉	
16	灰軸平碗	A-S	口 縁	灰褐色、軟	黄緑色釉	
13-1	灰 軸 皿	A北・Ⅲ	完 形	白色、硬	灰軸変色？（二次焼成）、口唇強く 外反、底部厚い、内面底部に菊花文	
2	灰 軸 皿	S X	完 形	白色にやや黄味 おびる、軟	口唇やや肥大、口縁内外のみに 灰釉、地肌黄味おびる、外面黒 色斑点付着	
3	灰 軸 皿	A中央、Ⅲ	完 形	白色、気泡入る 軟	うぐいす色釉、削り出し高台、 底部厚い、高台内に墨書「十門」 ？「南」？	
4	灰 軸 皿	A中央、耕土	底	白色、軟	シャープな削り出し高台、高台 内に墨書「十門」？「南」？ No.3と同一	
5	灰 軸 皿	397	完 形	暗灰色、硬	内面全面釉、外面は口縁部のみ 釉、黄白色釉、2次焼成で釉変 色？	
6	灰軸皿？	244	略完形	白味の強い黄土 色	鉄釉？	
7	灰 軸 皿	221	口 縁	灰白色、白瓷質	口縁内外面薄緑色釉、口唇肥厚	
8	灰 軸 皿	040	口 縁	灰白色	口縁内外面若草色および緑色の 厚い釉	
9	灰 軸 皿	S X	口 縁	白色	全面に透明ないしは若草色釉、 貫入	
10	灰 軸 皿	A09C・レキ	口 縁	灰白色	若草色釉、大形？	
11	灰 軸 皿	390	口 縁	灰白色、がさつ	若草色釉	
12	灰 軸 皿	A08C・エ	口 縁	白瓷質（灰白色） 硬	口縁内外厚い透明釉、地肌灰白 色	
13	灰 軸 皿	135	底	白濁色	内面底部コンニャク判、透明釉	
14	茶入れ蓋	218	完 形	灰白色、硬	上面糸切り、薄緑色の灰釉	
15	茶入れ蓋	065	完 形	灰白色、硬	上面糸切り、製作ラフ、2次火 熱により灰釉が白色に変色	

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特徴	備考
16	灰釉壺	078	半個体	明灰白色、緻密	内外面に若草色の半透明灰釉、粟壺状、茶入れ?	
17	灰釉壺	398	胴	黄白色	枯りけのある黄緑色釉、内面に鉄ヤビ状の付着物	
18	灰釉壺	368+394	半個体	黄白色、軟	外面うぐいす色の釉、地肌は黄味および灰色、底部糸切り、縮頸	
19	鉄釉壺	S X	胴・底	黄白色	内外面鉄釉、内面整形あらい	
20	鉄釉壺	490	底	灰白色	内外面鉄釉、底部糸切り	
21	鉄釉壺	433	底	橙黄色	ゴマ状の斑点ある鉄釉、内面整形あらい、徳利?	
22	鉄釉水筒	044	口縁、胴	暗灰色、緻密、硬	内面全茶色釉、外面部分的に黒斑部のある茶色釉、地肌は暗灰色	16~17世紀中葉
23	皿?	S X	底	白色、しまりない、軟	内面底部低く台状にもりあがる内外面黒味の強い鉄釉、削り出し高台	
24	徳利?	188	胴下	黄橙色	外面あづき色に黒斑のまじる鉄釉、内面ロクロ痕あらい、高台脇シャープな削り出し	
14-1	灰釉花瓶	S B 01	完形	黄白色、硬	透明ないしは黄味がかった釉、胴部に4~5本の筋、底部糸切り、製作ラフ	
2	灰釉花瓶	試掘	口縁欠	灰白色、硬	厚い薄い緑色釉、脚部は無釉、底部糸切り	
3	花瓶	Z	底	白色、軟	底部はスカート状、無釉	
4	灰釉おろし目皿	246	口縁	白色、硬	内面灰釉剥脱、内面底部沈線浅い	
5	灰釉おろし目皿	285	口縁	灰白色、硬	口縁内面緑色釉、外面釉剥脱、内面底部深い	
6	灰釉おろし目皿	114	口縁	黒色小斑点まじる白灰色、硬	内面および口縁外面若草色釉、外面地肌黄橙色、内面底部沈線浅い	
7	灰釉おろし目皿	088	底	白灰色	内面透明釉、外面の地肌黄橙色練鉢と胎土似る	
8	灰釉おろし目皿	156	底	黒色斑点まじる白色胎土、硬	内面沈線あらい、無釉、底部糸切り	
9	灰釉おろし目皿	A N 3	底	白瓷質、硬	内面沈線あらい、透明釉、底部糸切り	
10	香炉		胴・底		黒黄色の鉄釉厚い、内面ロクロ痕あらい、底部にラフな三足、頸部に刻目隆帯	
11	香炉	140	底	灰白色、硬	無釉、底部糸切り、ラフな足を貼り付ける	
12	灰志野鉄絵皿	026+715	底	白色、密、硬	内面底部鉄絵(花文)内面長石釉、削り出し高台? 灰志野	16世紀後半以降
13	白瓷系練鉢	490		淡黄褐色、砂粒混入、粗	片口部は内側より指おさえ、内面下部摩耗(使用痕)	
14	白瓷系練鉢	S X 上		淡灰色、密、硬	外面下半のみへう削り、内面下部から底部にかけて使用痕、貼り付け高台	
15	白瓷系練鉢	173	口縁	白灰色、密、硬	口唇部の沈線幅広で深い、黄橙色の釉	
16	白瓷系練鉢	A Z	口縁	白灰色	灰釉	
17	白瓷系練鉢	A 中央、旧IV	口縁	灰白色	黄橙色釉	

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特徴	備考
18	白瓷系練鉢	A04A・Ⅲ	口縁	黄白色、軟	無軸	
19	白瓷系練鉢	348	口縁	白灰色、軟	無軸、黄褐色の地肌	
15-1	白瓷系練鉢	251+266+267 +268+269	口縁	淡黄褐色、砂粒 混入、硬	片口鉢、内面下部摩耗、ロクロ 引き入念	
2	白瓷系練鉢	279	口縁	砂粒含、がさつ 軟	口唇肥厚、外反強い、口唇部沈 線幅広く深い	
3	白瓷系練鉢	111	口縁	暗灰褐色、砂粒 含	口唇部の沈線深い	
4	白瓷系練鉢	319	口縁	明淡褐色、砂粒 含、やや軟	口縁端部～内面に自然軸？ 口唇部沈線弱い	
5	白瓷系練鉢	333	口縁	灰色、密、軟	ナデ整形、口唇部の沈線弱い	
6	白瓷系練鉢	424	口縁	灰色、砂粒含、 密	内面に灰軸	
7	白瓷系練鉢	081	口縁	灰色	地肌黄味強い	
8	白瓷系練鉢	Z	口縁	白灰色、軟	無軸、地肌白灰色	
9	白瓷系練鉢	213	口縁	灰白色	ロクンあらい、地肌黄色～黄橙 色、内面に灰軸の斑点	
10	白瓷系練鉢	275	口縁	白灰色	無軸、地肌黄土色、内面白・黒 の斑点	
11	白瓷系練鉢	241	口縁	灰白色、小砂粒 含、硬	内面に黄緑色の灰軸、一見常滑 風	
12	白瓷系練鉢	409	口縁	灰色、やや粒、軟	地肌灰色、口唇部の沈線は強い	
16-1	白瓷系練鉢	A N、Ⅲ	口縁	灰色、粗、不良	外面下部へう削り、内面上部に 自然軸、ナデ入念	
2	白瓷系練鉢	472+A Z	底	白灰色、密	底部系切り、黄褐色の地肌に緑 色の灰軸が現状にまじる	
3	白瓷系練鉢	A N・Ⅲ	底	灰色、粗、硬	貼り付け高台、弱い高台、内面 底部摩耗、外面地肌淡黄色	
4	白瓷系練鉢	093	底	灰色、砂粒含、硬	貼り付け高台、弱い高台、内面 底部摩耗、高台輪内外面ナデ	
5	白瓷系練鉢	040	口縁	白灰色	薄手、無軸	
6	白瓷系練鉢 ?	011	口縁	灰白色、がさつ 軟	口唇部の沈線なし、白瓷系の碗 か？ 外面ナデ入念	
7	白瓷系練鉢 ?	S Y	口縁	灰白色、軟	口唇部の沈線なし、白瓷系の碗 か？	
8	灰軸練鉢	S	口縁	黄味おびる明褐 色、軟	口縁端部Y字状の二重口縁、内 外面口縁部に施軸、軸は白色に 変色	
9	灰軸練鉢					
10	灰軸練鉢					
11	襦鉢	135+217+222 +334+359	略完形	赤茶色、石英粒 含、硬	ロクロ引き入念、内面摩耗、無 軸（地肌は赤茶色）	
12	鉄軸襦鉢	126	口縁	白色、軟	小指先大の小さな片口部、口縁 端部肥厚、暗紫色の鉄軸	
13	鉄軸襦鉢	185	口縁	白色	素口縁、内外面入念なヨコナデ 内外暗紫色の鉄軸	
17-1	襦鉢	367	口縁	赤茶色、石英微 粒含む、硬	口縁内面に凸帯めぐる、入念な ヨコナデ、揃り浅い、無軸赤茶色	

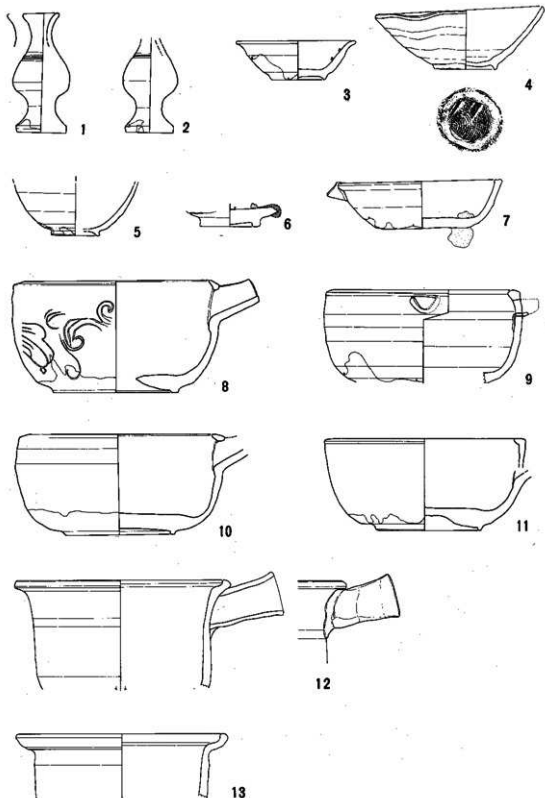
図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特徴	備考
2	播鉢	047+370	口縁	薄黄橙色、砂質で密、硬	口縁断面Y字状、外面縁かへラであらいヨコナデ、播目幅広で深い	
3	鉄軸播鉢	S Y南	底	黄白色、緻密	ロクロ引きあらい、底部糸切り播目は摩耗（地肌出る）内外面赤茶色鉄軸	
4	鉄軸播鉢	A02B	底	黄橙色、軟	底部糸切り、深くきれいな播目摩耗、赤褐色の鉄軸	
5	鉄軸播鉢	S Y北	底	黄味～黄橙色、軟	底部糸切り、内面摩耗、オレンジの明るい鉄軸	
6	鉄軸播鉢	361	口縁	黄白色	内外面鉄サビ色の鉄軸、口縁端部に炭化物付着	
7	鉄軸播鉢	046	口縁	黄白色	No 6 (361) と同一個体片か	
8	鉄軸播鉢	A07C	口縁	黄白色	口縁端部に鉄サビ色の鉄軸、以下無軸	
9	鉄軸播鉢	S X	口縁		内外面暗紫色鉄軸	
10	鉄軸播鉢		胴		No 2 (047+370) と同一個体	
11	鉄軸播鉢		底	黄白色、軟	底部糸切り、ロクロ引きあらい播目幅広、浅い、内外面暗紫色鉄軸	

6. 中世壜穴1出土陶器

B地区にて検出された中世壜穴1は耕土下の地山層（含礫黄色砂土層）に浅く掘られた壜穴遺構である。本址の2ヶ所に陶器の集中出土箇所があり注目された。昭和54年の試掘調査時に壜穴ほぼ中央部の床面に相当する地山層直上より片口鉢2点が疋位の状態で並んで出土し、今次の調査において、そこより1mほど北へはなれた壜穴北コーナーによった位置の覆土中位より鉄轆を中心に花瓶・片口鉢・碗類が集中出土した。耕土層から若干の陶器片の出土もあったが攪乱を受けているため本址からは除外し、後に一括する。なお、北コーナー覆土中より一括出土の鉄轆とこれをもりまく陶器類については、はたして本址にともなったものか否かについては現地調査時に確認されていない。鉄轆を中心として使用不能状態の汁器が集積された状況で出土している点からすれば、あるいは何らかの目的をもって一括埋設されたものとの見方もあるわけである。

(1) 灰軸花瓶（第18図1・2）

陶器集中出土地点から2点の花瓶が出土している。1は完形で高さ9.5cm、硬質な須恵質の胎土で、灰白色地に半透明の灰軸が施されている。肩部には四筋がめぐられ、底部は糸切りによる。2は口頸部を欠くが1と同一窯製品である。これら花瓶はA地区の中世掘立柱建物址1より出土した花瓶（第14図1）と同一製品であり、両者の関連が注意される。花瓶は瀬戸系の胎土焼成により、共伴出土した片口鉢同様、ほぼ南北朝期のものと推定される。



第18图 中世竖穴1出土陶器(1:3)

灰釉花瓶(1·2)、灰釉碗(3·5·6)、白瓷系碗(4)、
灰釉片口鉢(7~11)、灰釉行平鍋(12·13)

(2) 灰軸碗 (第18図3・5・6)

陶器集中地点からの出土である。暗灰色胎土で硬質、内外面に緑色から半透明の灰軸を施した碗である。3は浅めの碗の完形品である。口縁端部は強く外反し、胴上部に張りがあり、底部は糸切りの上に弱い高台をつけている。2次の火熱を強く受け、軸はコバルト色に変色し、剥脱している部分もある。5は口縁を欠く深めの碗である。底部には1と同様弱い高台がつけられている。6は分厚な底部片である。高台脇には焼成時のヒビ割れと、断口部に軸のたまりがみられる。本資料は焼成時に破損したもので、使用によって破損したのではないと考えられ、なぜこのようなものが持ちこまれていたのか疑問である。このような例は集中出土の陶器中、他にも見うけられる。

(3) 白瓷系碗 (第18図4)

陶器集中地点から出土した完形の碗である。暗灰色の須恵質胎土で硬質、器厚は薄く、無軸である。底部は糸切りの上にラフな弱い高台をつけ、高台端にはモミ圧痕が残っている。本資料と同様の碗はA地区の包含層から数点検出されている。山茶碗としては新しく、南北朝期のものと推定される。

(4) 灰軸片口鉢 (第18図7~11)

2点(第18図10・11)は試掘調査時に床面相当の地山面より並んで出土した略完形ないしは一部を欠損する片口鉢で、3点(7~9)は今次調査の陶器集中地点よりの出土である。7は碗形に近い小形の片口鉢である。内面底部三ヶ所に窯道具の一部が、また外面底部には親指大の窯道具が付着しており、正位に置くことはできない不良品である。内外面に薄緑色の灰軸を施している。底面は糸切りによる。片口部は口縁端部から削りこみ、内側よりはめ込んでいる。8は出土した片口鉢のなかでは最も大きなものである。陶器集中地点出土の接合資料であるが、断口は黒色ないしは暗褐色を呈している。器高は比較的高く、ロクロ引きはあらい。底部には低い高台がつけられているが、意図的に打ち抜かれているようで複雑に破損している。この部分の断口も黒色ないしは暗褐色である。外面側部にはラフな花文様の陰刻文がみられ、この部分に灰軸が若草色にたまっている。外面底部を除いて透明ないしは若草色、および白濁色の灰軸が施されている。片口部は口縁下をくり抜き、内面からはめこんでいる。9も8と似るが陰刻文はない。軸は一樣に厚く、全面に貫入が著しい。片口部の製法は8と同一であるが、小さな片口部である。胎土は白灰色で硬いが、部分的に断口部が暗褐色を呈している。10の上面観はかなりいびつで楕円形状を呈している。灰白色胎土中には粒の大きな小石も含む。片口部の先端を欠いている。底部は焼成時にハジケて一部孔があいており、その剥脱した小片が内面底部にこびりつき、この上に灰軸がかかっており、製品とはいえない不良品である。底部は糸切りの上に幅のせまい低い高台をつけている。高台脇には焼成時の不純物が大きく付着している。11は片口部を欠く。底部には焼成

時に大きな割れがはいり、外面底部には剥脱部もあり、容器としては用をなさない。特に片口の
 主用途とする液体の容器としては10同様全く要をなさない不良製品である。なぜゆえこのような
 不良品が持ち込まれたのであろうか。外面底部を除き透明ないしは若草色の灰釉が厚く施されて
 いる。片口鉢はすべて胎土・焼成状況が共通しており、同一窯製品と考えられる。南北朝期にお
 ける瀬戸窯系の片口鉢とみられる。

(5) 灰釉行平鍋 (第18図12・13)

陶器集中地点より出土した。12には筒状の把手が付いている。内外面に厚く半透明ないしは薄
 緑色の灰釉が施され、特に内面の貫入は細かい。暗灰色ないし灰色の硬い胎土や釉の色調、およ
 び地肌調子は片口鉢に比較すればかなり入念である。(灰釉片口鉢と区別するためあえて行平鍋
 とした。)

本址上部耕土出土の陶器中には灰釉平碗・鉄釉天目碗などの小片も若干あるが、耕土中でもあ
 り、本址からは除外し、後に一括した。竪穴1に集積された状況で出土した陶器は南北朝期、14
 世紀後半の瀬戸窯系の片口鉢を中心としているようであり、共伴した鉄器も室町時代の所産であ
 り、ほぼ時期的には合致している。しかし、これらの遺物が竪穴にともなったものか、あるいは
 偶然にこの地へ埋没集積されたものかは不明である。遺物面からすれば全く使用に耐えられない
 製作時(焼成時)の不良品が多く認められる点、鉄器という仏具を中心に集積された状況で陶器
 が出土している点からすれば、一対とみられる花瓶からみても、日常品とは考えられず、特殊な
 用途に供されていたものが何らかの意図をもって埋没集積されたものと考えた方が妥当であるか
 も知れない。いずれ早稲田神社と強い結びつきのある遺物であるといえよう。

表5 中世竪穴1出土陶器一覧

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特徴	備考
18-1	灰釉花瓶	S A 01-001	完形	灰白色、須恵質 硬	半透明釉を底部を除いて全面施 釉、肩部に四筋、底部未切り	
2	灰釉花瓶	S A 01-002	口縁欠	No 1と同様	No 1と同一製品、A地区中世相 立柱建物址出土品も同一製品	
3	灰釉碗	S A 01-006	略完形	灰色、粗	小形碗、弱い貼り付け高台、暗 緑色釉、貫入著しい、2次焼成	
4	白磁系碗	S A 01-003	略完形	暗灰色、密、硬	焼成時のゆがみ、極薄手、底部 未切りにラフな貼り付け高台	
5	灰釉碗	S A 01-021	口縁欠	灰色、軟	小さな貼り付け高台、薄手	
6	灰釉碗	S A 01-015	底	暗灰色、硬	断口に釉のたまり、焼成時に破 損している	
7	灰釉片口鉢	S A 01-14+15	半個体	暗灰色、硬	窯道具付着、小形、薄緑釉	南北朝期
8	灰釉片口鉢	S A 01 005+ 010+017+023	略完形	暗灰色、硬	花文陰刻、底部打抜き?	南北朝期
9	灰釉片口鉢	S A 01 002+004	半個体	白灰色、硬	小さな片口、釉に貫入著しい	南北朝期
10	灰釉片口鉢	(試掘)	略完形	灰白色、小石含	底部ハジケ、焼成時の割れ	南北朝期

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特徴	備考
11	灰釉片口鉢	(試掘)	略完形	灰白色・硬	焼成時の割れ、釉厚い	南北朝期
12	行平鍋	SA01-009	半個体	暗灰色・硬	筒状の把手、釉変色、貫入	
13	行平鍋	SA01-019	口縁	暗灰色・硬	全釉、厚い、把手欠	

7. 中世堅穴2出土陶器

B地区中世堅穴1の東南に重複した状態で検出された堅穴2については不明な点が多い。遺構面が耕土直下と浅いこと、層的に重複遺構の新旧がとらえられない不都合さに加えて、遺物面においても中世陶器や古銭等を浅い覆土中に包含してはいたが、床面相当部分より国分式の土師器環の略完形品が出土したりし、その所属時期を遺構検出時に明確にすることができていない。平安時代国分式期の堅穴一住居地の可能性も考慮されなければならないが、遺構面が東に向けてかなり強い傾斜を示し、明瞭な床面が認められず、また残存する壁（傾斜面高位の方）にカマド等の施設が認められない点、略完形の土師器環の他に平安時代の遺物はB地区全体をみても皆無である点、また重複状態をみると中世堅穴1が明らかな貼り床を堅穴2の上面にしていなと観察された点等々より、堅穴2は平安時代の遺構とみるより堅穴1同様中世以降の遺構とした方が妥当であるとの見解をもっている。

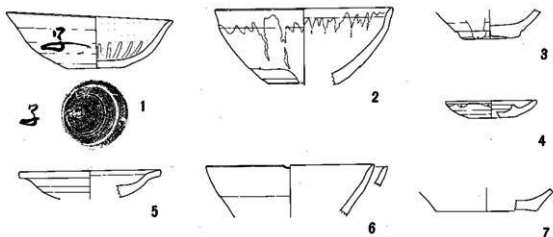
堅穴2より出土した土器・陶器には、土師器環・灰釉平碗・鉄釉天目碗・灰釉灯明皿・鉄釉皿・鉄釉碗などがある。

(1) 土師器杯 (第19図1)

堅穴西コーナーの床面相当部分にて逆位になって出土した口縁の一部を欠く略完形の土師器環である。器高の低い扁平な土師器環で、底部は糸切り、内面は内黒で暗文風のへら磨きがみられる。外面側部と外面底部に墨書がみられる。「子」字であろうか。当資料の外面側部は何となくなめらかな感じがし、相当使用された結果の手ズレ痕（使用痕）とも考えられるものである。全くの単独出土であるが、何らかの理由で伝世されていたものとも考えられる。堅穴1出土の鉄器ともに早稲田神社との結びつきを感じさせるものである。環は平安時代の国分式土器である。

(2) 灰釉平碗 (灰釉天目碗?) (第19図2)

器形は鉄釉天目碗のそれにきわめて類似している。口縁端部の形状はまさに天目碗のそれである。灰白色の軟質胎土により、器内外面に若草色の灰釉をかけている。外面側部の高台に近い部分はシャープなへら調整が加えられ、高台脇も同様シャープに削り出されている。あるいは灰釉平碗というものではなく、灰釉天目碗かもしれない。



第19図 中世壜穴2出土陶器(1:3)

土師器坏(1)、灰釉平碗(2)、鉄釉天目碗(3)、灰釉灯明皿(4)、
鉄釉皿(5)、鉄釉碗(6)、不明(7)

(3) 鉄釉天目碗(第19図3)

削り出し高台の底部片である。白色胎土、灰白色地に黒色釉が施されている。

(4) 灰釉灯明皿(第19図4)

小形の灯明皿で、外面は口縁部に、内面は底部まで灰釉が施されている。外面側部のログロ引きはシャープである。灯明皿と明瞭に区別できるものはAB両地区を通じて本資料一点のみである。

(5) 鉄釉皿(第19図5)

鉄釉が施されている口縁部小破片である。胎土は暗灰色で硬質である。

(6) 鉄釉碗他(第19図6・7)

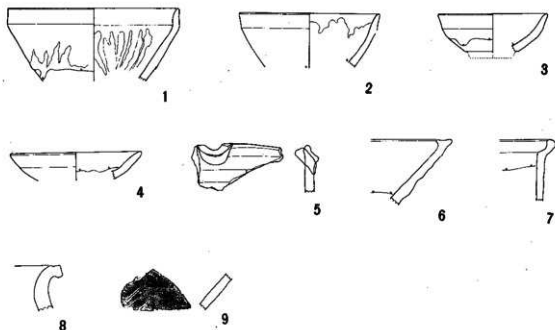
6は碗形を呈するが口縁部の一部をわずかに削りこんで片口としている。全面に天目碗同様の暗茶黒色の鉄釉が施されている。7は器種不明の底部片である。外面にススの付着が著しい。新しいものかも知れない。

表6 中世壜穴2出土陶器一覽

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特 徴	備 考
19-1	土師器坏	SA 02 - ユ	略完形	砂質、茶褐色、比較的密	外面側部と外面底部に墨書、内黒、暗文	平安時代
2	灰釉平碗	SA 02	口 縁	白色、軟	器形は天目碗に似る、若草色の灰釉（口縁端部白濁色）	
3	鉄釉天目碗	SA 02	底	白色	削り出し高台、灰白色地に黒色釉	
4	灰釉灯明皿	SA 02	半個体	白色、硬、密	小形、若草色の灰釉、外面側部のロクロ引きシャープ	
5	鉄釉皿	SA 02	口 縁	暗灰色、軟	鉄釉	
6	鉄釉碗	SA 02	口 縁		片口をもつ碗か、暗茶褐色釉（天目碗の釉と同一）	
7	不 明	SA 02	底	白色、硬	外面にスス付着	

8. B地区出土中世・近世陶器

B地区耕土中から出土した陶器片である。壜穴1・2にともなうものもあろうかと思われるが攪乱を受けている耕土中出土ということで一括して扱うことにする。なお、B地区の東は墓地に接しており、墓地関係とみられる現代の陶磁器の出土もあつたが除外した。



第20図 B地区出土陶器（1：3）

鉄釉天目碗（1・2）、鉄釉豆天目（3）、灰釉皿（4）

鉄釉練り鉢（5・6）、灰釉行平鍋（7）、常滑系壺（8）、灰釉おろし皿（9）

(1) 鉄軸天目碗 (第20図1・2)

1は口縁端部が直立し、側部の断面形が「く」字状になる器形をとる。胎土中には大粒の石英を含み灰色を呈している。地肌は鉄サビ色を呈し、この上に黒色および光沢ある茶色の鉄軸が厚く斑状に施されている。2の口縁部の立ちあがりも強く、側部に明瞭な稜を有している。胎土は灰白色で硬質、黒色中に茶色の斑状の軸を施している。

(2) 鉄軸豆天目 (第20図3)

厚手の胎土は灰色で硬く、地肌は黄味がかった灰白色を呈している。高台脇はシャープな削り出しによる。黒色と茶色による斑状の軸が厚く施されている。16世紀後半の桃山陶であろう。

(3) 灰軸皿 (第20図4)

硬質、緻密な胎土で、内面側部に灰軸が施され、外面側部は無軸で地肌は白濁色を呈している。

(4) 灰軸片口鉢 (第20図5)

竪穴1出土の片口鉢と同様の口縁部片である。片口部は口縁端部を削り込み内側より片口を付けている。緑色の灰軸が厚く施されている。

(5) 灰軸練り鉢 (第20図6)

口縁端部が「Y」字状になり、側部のロクロ痕のあらい練り鉢である。地肌は黄褐色を呈し、外面側部と内面は口縁部上部まで若草色の灰軸が施される。A地区出土の練り鉢中にも同形態のものが1点あるが、後出的な感のものである。

(6) 灰軸行平鍋 (第20図7)

竪穴1出土の行平鍋と同様の口縁部片である。若草色の半透明灰軸が施されている。

(7) 常滑茶壺 (壺) (第20図8)

灰色、須恵質の胎土で外面は赤茶色、内面は茶色地に黒色の斑点のある口縁部小破片である。

(8) 灰軸おろし目皿 (第20図9)

灰軸を施したおろし目皿の小片で、内面側部から底部にかけて浅い沈線が刻まれている。

以下図示していないが隣接する墓地関係とみられる現代の陶磁器やガラス器等がある。主として染付の茶碗が多い。

表7 B地区出土陶器一覽

図番号	器種	遺物番号	部位	胎土・焼成	特徴	備考
20-1	鉄軸天目碗	B-37上	口縁	大粒の石英粒含む、灰色	口縁直立、鉄錆色の地肌上に黒色と茶色の斑状釉	
2	鉄軸天目碗	B-28中	口縁	灰白色、硬	直立気味の口縁、黒地に茶色の斑状釉	
3	鉄軸豆天目	B-13ユ	口縁	灰白色、硬	削り出し高台、地肌は黄味強い灰白色、黒色と茶色釉、桃山陶	16世紀後半
4	灰軸皿	B-27上	口縁	緻密、硬、灰色	外面無釉、内面側部に灰釉施す地肌は白濁色	
5	灰軸片口鉢		片口	灰白色	口縁端部を削りこみ、内側から片口部をつける、緑色の灰釉	
6	灰軸線鉢	B34-上	口縁	白灰色、硬	端部断面Y字状、黄褐色の地肌内面は上部と外面に若草色の灰釉	
7	灰軸行平鍋	B24-上	口縁	黄灰色	若草色の半透明釉	
8	常滑系壺	B06-上	口縁	灰色、須恵質	外面赤茶色、内面茶色地に黒色斑点あり(曇?)	
9	灰釉おろし皿		底	白灰色	浅い沈線刻む、薄緑色の灰釉施す	

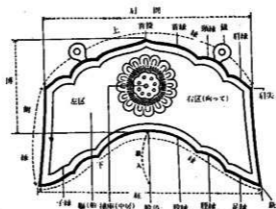
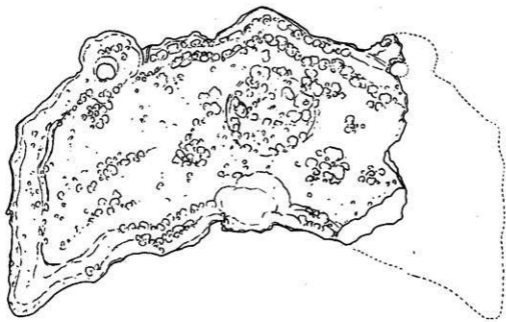
9. 中世竪穴1出土鉄磬・鉄鏃

B地区の中世竪穴1の北コーナーによった部分にて検出された陶器集中地点のほぼ中央部から鉄磬が出土し、またそれらの下位より鉄鏃が出土した。鉄磬はあたかも陶器類にかこまれた状況で出土し、何らかの理由によって集積埋納された様相を呈していた。

(1) 鉄 磬 (第21図)

磬の出土は全国的にもきわめて例の少ないものであり、当遺跡を特徴づける貴重な資料である。当磬は鉄製のためその保存状況は良くないがほぼ元の形を知ることができる。出土した磬は右側の鈕から側縁を欠いている。大きさをみれば、肩間は推定12.8cm、幅は6.0cm、厚さは左区の幅部分で0.6cmを計り、磬とすれば小形である。首縁は尖って高く新しい様相を示している。首縁・肩縁の間には鈕があり、右側の鈕は半分が欠損している。側縁はほぼ直であり湾曲していない。縁には足縁、頸縁、股縁が明瞭で、股入はかなり深く、およそ2.3cmを計り、首縁同様新しい様相を示している。本磬は片面磬とみられ、片面(表面)だけに文様や縁どりがあり、一片面は扁平である。表面には明らかに縁どりがみられ、首縁および頸縁の縁どりをみれば二重の縁どりである。文様については不明であるが、縁だけはとっている。撞座(中房)は鏝のもり上がりの状態より不明瞭ながら径2.5cmほどの円形モチーフがあったものとみられる。

磬とはわが国の仏教において採用された青銅製の梵音具の一つで、奈良時代より存在し、これが密教の盛行とともに広く使用され、各宗ともに読経の際、導師が磬で打鳴らし合図に用いたも



第21图 中世竖穴1出土铁馨 (1:1)



1. 開元通寶



2. 開元通寶



3. 開元通寶



4. 開元通寶



5. 開元通寶



6. 開元通寶



7. 開元通寶



8. 開元通寶



9. 太平通寶



10. 至道元寶

第22圖 早稲田遺跡出土古銭 (1:1)



1. 咸平元寶



2. 景德元寶



3. 祥符元寶



4. 天聖元寶



5. 皇宋通寶



6. 皇宋通寶



7. 皇宋通寶



8. 皇宋通寶



9. 皇宋通寶

第23圖 早稲田遺跡出土古銭 (1 : 1)



1. 嘉祐通寶



2. 嘉祐通寶



3. 治平通寶



4. 熙寧元寶



5. 熙寧元寶



6. 熙寧元寶



7. 元豐通寶



8. 元豐通寶



9. 元豐通寶



10. 元豐通寶

第24圖 早稲田遺跡出土古銭 (1:1)